

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（167）

南九州西回り自動車道建設（鶴川内 IC～出水 IC間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（XXXIII）

じんのおりあと
陣之尾遺跡・陣之尾塗跡

(阿久根市多田)

うえのばた
上野畠遺跡・広段遺跡

(阿久根市鶴川内)

きたやまでん
北山田遺跡

(出水市野田町)

2012年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



北山田遺跡遠景



北山田遺跡水田跡

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴って、平成20年度から平成22年度にかけて実施した陣之尾遺跡・陣之尾塁跡、上野畠遺跡・広段遺跡、北山田遺跡の発掘調査の記録です。

陣之尾遺跡・陣之尾塁跡は阿久根市多田に所在し、筒田川と内田川に挟まれた丘陵地にあります。調査の結果旧石器時代から近世・近代までの遺構・遺物が発見されました。

上野畠遺跡・広段遺跡は、阿久根市鶴川内に所在します。上野畠遺跡からは縄文時代、古墳時代、古代から近世までの遺構・遺物が発見されました。

北山田遺跡は、出水市野田町下名に所在し、野田川中流域に広がる扇状地の西側の丘陵地にあります。調査の結果、縄文時代早期から近世までの遺構・遺物が発見されました。

特に注目されるものは、北山田遺跡の斜面を切り開いて作られた水田遺構です。この水田は現代の水田を含めて5枚が重なっており、自然災害で埋れる度に畔や水路を含めて作り直されたことが分かりました。この土地の人々が「一所懸命」であったことを物語る証拠です。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々がご覧になり、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助として大いに活用されることになれば幸いです。

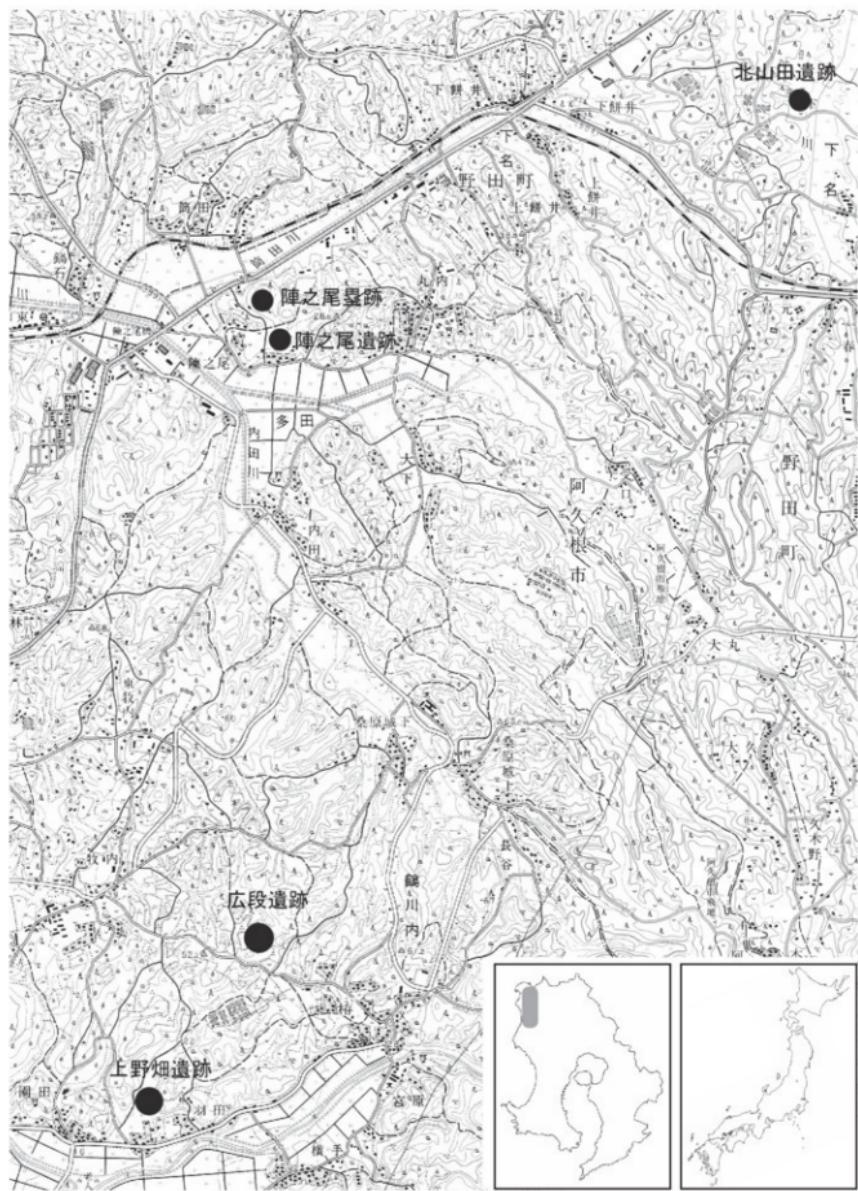
最後に、調査に当たりご協力をいただいた国土交通省九州地方整備局鹿児島国道路事務所、出水市教育委員会、阿久根市教育委員会、関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成24年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 寺田仁志

報告書抄録

ふりがな	じんのおいせき・じんのおりあと うえのばたいせき・ひろだんいせき きたやまでんいせき						
書名	陣之尾遺跡・陣之尾塙跡 上野畠遺跡・広段遺跡 北山田遺跡						
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査XX X III						
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第167集						
編集者名	吉岡康弘						
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター						
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原杣の森2番1号 TEL0995-48-5811 FAX0995-48-5821						
発行年月日	2012年1月						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	発掘原因
陣之尾遺跡	鹿児島県阿久根市多田陣ノ尾	46206	7-54	32° 06'10" 130° 23'21"	平成20年8月4日 ～	1655m ²	南九州西回り 自動車道（野 田IC～阿久 根鶴川内IC 間）に伴う記 録保存調査
陣之尾塙跡	鹿児島県阿久根市多田山ノ口	46206	7-18	32° 06'20" 130° 23'01"	平成20年9月26日		
広段遺跡	鹿児島県阿久根市鶴川内	46206	7-56	32° 03'30" 130° 23'09"	平成21年5月8日 ～ 平成21年5月22日	926m ²	
上野畠遺跡	鹿児島県阿久根市鶴川内	46206	7-57	32° 02'40" 130° 22'46"	平成21年8月3日 ～ 平成21年10月28日	3900m ²	
北山田遺跡	鹿児島県霧島市野田町下名	46208	8-255	32° 07'20" 130° 22'41"	平成21年5月8日 ～ 平成22年10月27日	5400m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
陣之尾遺跡	散布地	旧石器時代	なし	細石刃、細石刃核、剥片			
		縄文時代	なし	縄文早期土器、黒川式土器、打製石斧、鐸器、磨石、石皿			
		古墳時代	土坑1	成川式土器			
		中世	古道跡1 溝状遺構1	土師器、内黒土師器、同安窯系青磁、滑石製品			
		近世	ピット群1	染付			
陣之尾塙跡		なし	なし				
広段遺跡		なし	なし				
上野畠遺跡	散布地	縄文～近世	竪穴状遺構1、掘立柱建物跡2、炉状遺構2、柱穴28、土坑1	石鏽、削器、磨製石斧、磨石、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁			
北山田遺跡	散布地	中世～近世	水田4	青磁、土師器、染付、陶器			
要約							
		陣之尾遺跡は旧石器時代から中世までの遺物が出土した遺跡である。陣之尾塙跡については中世の城跡の可能性から頂上部、山腹の平坦地を曲輪、谷を堀と想定し調査を進めたが、遺構、遺物とともに確認できなかった。					
		広段遺跡についてはトレンチを14箇所設定し遺構、遺物の有無を調査した。遺構、遺物ともに確認できなかつた。					
		上野畠遺跡は縄文時代から近世の遺跡である。掘立柱建物跡柱建物跡や炉状遺構は当該期の生活の一端を知る資料となった。					
		北山田遺跡では4面の水田遺構が中世の青磁、近世の薩摩焼等の遺物を作り検出された。検出された4面の水田遺構は、湧水を利用し谷地形を改変して水田が設けられて以降、変遷を経ながら耕作されてきた經緯を窺い知ることができる貴重な資料である。					



遺跡位置図 (1 : 25,000)

例　　言

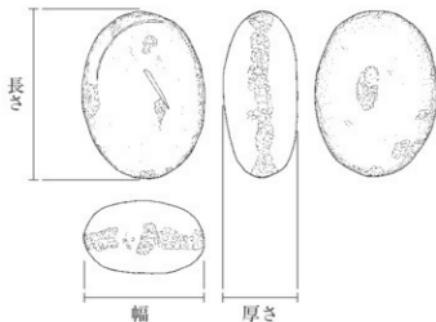
- 1 本書は、南九州西回り自動車道（出水阿久根道路）建設に伴う「陣之尾遺跡ほか」の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書に収録した各遺跡の所在地は以下のとおりである。

陣之尾遺跡・陣之尾墨跡	阿久根市多田	広段遺跡	阿久根市鶴川内
上野畠遺跡	阿久根市鶴川内羽田	北山田遺跡	出水市野田下名
- 3 本報告にかかる発掘調査は、国土交通省鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成 19 年度から平成 21 年度に実施した。
- 4 整理・報告書作成は、平成 22 年・23 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 遺物番号は（遺跡ごとの）通し番号であり、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 6 遺物注記の記号は陣之尾遺跡が「ジン」、上野畠遺跡が「上ハタ」、北山田遺跡が「マガS」である。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 陣之尾遺跡・陣之尾墨跡で用いたレベル数値は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所の作成した鹿児島 3 号阿久根北 IC ランプ第 1 工区改良外 1 件工事における現場内基準点水準点位置図中の KO - 10 に基づく標高である。
- 9 上野畠遺跡で用いたレベル数値は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所の作成した現況計画図中のセンター杭 No 5 に基づく標高である。
- 10 北山田遺跡で用いたレベル数値は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所の作成した現況計画図中のセンター杭 No 340 に基づく標高である。
- 11 本書で使用した方位は、すべて磁北である。
- 12 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が作業員の補助を得て行った。また、空中写真的撮影は北山田遺跡、陣之尾遺跡・陣之尾墨跡を（有）スカイサーベイ、上野畠遺跡を九州航空株式会社に委託した。
- 13 本調査に関わる理化学分析は（株）パリノサーヴェイに委託した。
- 14 遺構図、遺物分布図の作成・トレースは中原、吉岡が、整理作業員の協力を得ておこなった。
- 15 出土遺物の実測・トレースは、土器を吉岡、関、石器を中原が担当し、整理作業員の協力を得ておこなった。
- 16 出土遺物の写真撮影は、吉岡が行った。
- 17 本書の執筆は、第 1 ~ 2、第 3 章 1, 2, 3, 5 節 2, 6 節 2, 7 節 2、第 4 章 1, 2, 3, 5 節 2, 6 節、8 節、を吉岡が、第 3 章 4 節、第 4 章 4 節 2、第 5 章 4 節 2 を中原が、第 3 章 6 節 1, 7 節 1, 8 節 1, 9 節 を廣が、第 3 章 8 節 2、第 4 章 7 節 2, 3、第 5 章 5 節 2 を関が、第 4 章 7 節 1, 9 節 を市村が、第 5 章 5 節 1, 6 節 を富山が担当し、編集を吉岡が行った。
- 18 本報告にかかる出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管展示・活用を図る。

凡　例

1 石器計測

石器は以下の要領で、縦・横・厚みを計測し、重量とあわせ観察表に示している。また、文中次の呼称を用いた。



2 石器実測図

石器の実測の表現については、以下の凡例に基づく。判別が不明なところは必要に応じ、記述によりこれを補っている。



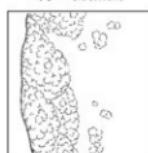
摺理面及び風化の弱い自然面



自然面（碟面）



磨面・研磨面



敲打痕



敲打「つぶれ」

目 次

序文

報告書抄録

遺跡位置図

例言

凡例

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 自然環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 陣之尾遺跡・陣之尾塙跡の調査	13
第1節 調査の経過(日誌抄)	13
第2節 発掘調査の方法	14
第3節 層序	14
第4節 旧石器時代の調査	20
1 遺構	20
2 遺物	20
第5節 繩文時代の調査	21
1 遺構	21
2 遺物	21
第6節 古墳時代の調査	26
1 遺構	26
2 遺物	28
第7節 古代・中世の調査	28
1 遺構	28
2 遺物	32
第8節 近世・近代の調査	32
1 遺構	32
2 遺物	36
第9節 総括	37

第4章 上野畠遺跡・広段遺跡の調査	39
第1節 上野畠遺跡の調査	39
1 発掘調査の経過(日誌抄)	39
2 発掘調査の方法	41
3 層序	41
4 繩文時代の調査	44
(1) 遺構	44
(2) 遺物	45
5 古墳時代の調査	47
(1) 遺構	47
(2) 遺物	47
6 古代の調査	47
(1) 遺構	47
(2) 遺物	47
7 中世・近世の調査	49
(1) 遺構	49
(2) 中世の遺物	61
(3) 近世の遺物	64
第2節 広段遺跡の調査	69
1 発掘調査の経過(日誌抄)	69
2 発掘調査の方法と成果	70
3 層序	70
第3節 総括	71
第5章 北山田遺跡の調査	73
第1節 調査の経過(日誌抄)	73
第2節 発掘調査の方法	73
第3節 層序	74
第4節 繩文時代の調査	80
1 遺構	80
2 遺物	80
第5節 中世・近世の調査	83
1 遺構	83
2 遺物	100
第6節 総括	102
第6章 自然科学分析	103

第1節 北山田遺跡の水田層に関する植物珪酸体分析	103
第2節 北山田遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定	108
第3節 陣之尾・北山田遺跡出土黒曜石製石器の産地推定	111

挿図目次

第1図 陣之尾遺跡・陣之尾塁跡、上野畑遺跡・広段遺跡の周辺遺跡図	8
第2図 北山田遺跡周辺遺跡図	10
陣之尾遺跡・陣之尾塁跡	
第1図 地形図およびトレンチ配置図	15
第2図 土層断面図1	16
第3図 土層断面図2	17
第4図 土層断面図3	18
第5図 遺物出土状況図	19
第6図 旧石器時代の石器	20
第7図 繩文時代の土器	21
第8図 繩文時代の石器1	22
第9図 繩文時代の石器2	23
第10図 繩文時代の石器3	24
第11図 古墳時代の遺構位置図	26
第12図 土坑および出土遺物	27
第13図 古墳時代の土器	28
第14図 古道跡位置図	29
第15図 溝状遺構位置図	29
第16図 古道跡	30
第17図 溝状遺構および出土遺物	31
第18図 古代・中世の遺物1	32
第19図 古代・中世の遺物2	33
第20図 ピット位置図	34
第21図 ピット断面図	35
第22図 近世・近代の遺物	36
上野畑遺跡・広段遺跡	
第1図 上野畑遺跡・広段遺跡位置図	40

第2図 地形図及びグリッド配置図	41
第3図 土層断面図	42
第4図 遺物出土状況図	43
第5図 繩文時代の石器1	44
第6図 繩文時代の石器2	45
第7図 古墳時代・古代の土器	47
第8図 須恵器	48
第9図 遺構位置図	50
第10図 壴穴状遺構	52
第11図 土坑および出土遺物	52
第12図 1号炉状遺構	53
第13図 2号炉状遺構	53
第14図 1号掘立柱建物跡	54
第15図 2号掘立柱建物跡	55
第16図 ピット位置図1	56
第17図 ピット位置図2	57
第18図 ピット位置図3	58
第19図 ピット位置図4	59
第20図 青磁・青花・陶器	61
第21図 瓦質土器	62
第22図 中世須恵器ほか	63
第23図 近世の遺物1	64
第24図 近世の遺物2	65
第25図 近世の遺物3	66
第26図 近世の遺物4	67
第27図 広段遺跡地形図およびグリッド配置図	69
第28図 トレンチ配置図	70
北山田遺跡	
第1図 土層断面図1	75
第2図 土層断面図2	76
第3図 地形図および遺構位置図	77
第4図 遺物出土状況図	78
第5図 繩文時代の石器1	79
第6図 繩文時代の石器2	80
第7図 繩文時代の石器3	81
第8図 水田1・2・3・4	84

第9図	水田1・2	86
第10図	水田2・3	88
第11図	水田3・4	90
第12図	水田1および出土遺物	92
第13図	水田2および出土遺物	94
第14図	水田3および出土遺物	96
第15図	水田4および出土遺物	98
第16図	中世・近世の遺物1	100
第17図	中世・近世の遺物2	101

表目次

第1表	陣之尾遺跡・陣之尾塁跡、 上野畠遺跡・広段遺跡の周辺 遺跡地名表	9
第2表	北山田遺跡周辺遺跡 地名表	11
陣之尾遺跡・陣之尾塁跡		
第1表	縄文時代の土器観察表	21
第2表	旧石器・縄文時代 の石器観察表	25
第3表	古墳時代の土器観察表	28
第4表	古代・中世の遺物観察表1	33
第5表	古代・中世の遺物観察表2	33
第6表	近世・近代の遺物観察表	36
第7表	ピット計測表	36
上野畠遺跡・広段遺跡		
第1表	縄文時代の石器観察表	46
第2表	古墳時代・古代の 土器観察表	48
第3表	1号掘立柱建物跡計測表	60
第4表	1号掘立柱建物跡規模表	60
第5表	2号掘立柱建物跡計測表	60
第6表	2号掘立柱建物跡規模表	60
第7表	ピット計測表	60
第8表	中世の遺物観察表	63
第9表	近世の遺物観察表	68
第10表	トレチ規模表	70

北山田遺跡

第1表	縄文時代の石器観察表	82
第2表	遺構内遺物観察表	83
第3表	中世・近世の遺物観察表	101

図版目次

卷頭カラー1 北山田遺跡遠景

卷頭カラー2 北山田遺跡水田跡

陣之尾遺跡・陣之尾塁跡

図版1 陣之尾遺跡・陣之尾塁跡遠景

図版2 ①～④土層断面 ⑤21T
⑥作業風景

図版3 ①～③土坑 ④⑤古道跡
⑥溝状遺構

図版4 陣之尾遺跡の遺物

上野畠遺跡

図版5 上野畠遺跡遠景

図版6 2号掘立柱建物跡

図版7 ①土層断面 ②作業風景 ③④竪穴
状遺構 ⑤～⑦土坑

図版8 ①②1号炉状遺構
③2号炉状遺構 ④ピット15断面
⑤完掘状況

図版9 上野畠遺跡の遺物

広段遺跡

図版10 ①土層断面 ②作業風景 ③4～
6T完掘状況 ④8～9T完掘
状況

北山田遺跡

図版11 北山田遺跡遠景

図版12 ①土層断面 ②作業風景
③遺物出土状況 ④水田1

図版13 ①水田2 ②水田3 ③水田4
④水田4の溝

図版14 北山田遺跡の遺物

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

平成16年12月、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所は、南九州西回り自動車道出水阿久根道路、野田IC～阿久根鶴川内ICの建設計画に基づき、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下文化財課）に照会した。

文化財課は平成18年6月に分布調査を実施した。その結果、建設予定地内に6か所の遺跡が所在することが判明し、鹿児島国道工事事務所に回答した。

この結果に基づき、事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについて、鹿児島国道工事事務所、文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下理文センター）の三者で協議し、埋蔵文化財の保護と事業推進を図るために、事前に発掘調査を実施することとし、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県の間で発掘調査に係る委託契約が結ばれた。

遺跡名	所在地	時代
中郡遺跡群	出水市野田町下名	弥生～中世
北山田遺跡	出水市野田町下名	古墳
陣之尾遺跡	阿久根市多田	縄文～中世
陣之尾塙跡	阿久根市多田	中世～近世
上野畠遺跡	阿久根市鶴川内	古墳～中世
広段遺跡	阿久根市鶴川内	古墳

第2節 調査の組織

1 陣之尾遺跡・陣之尾塙跡（平成20年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 宮原景信

調査企画 タ 次長 兼 総務課長 平山 章

タ 次長 兼 南の縄文調査室長 池畠 耕一

タ 調査第二課長 彌榮 久志

タ 主任文化財主事 兼 調査 富田 逸郎

タ 第二課第二調査係長 第二課第二調査係長

調査担当 タ 文化財主事 廣栄 次

タ 文化財調査員 橋口 拓也

調査事務 タ 総務係長 紙屋 伸一

タ 主査 鳥越 寛晴

2 北山田遺跡（平成21年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所

調査主体	鹿児島県教育委員会	所長	山下	吉守	美重
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	山齊	藤崎	憲志郎
調査企画	タ	次長兼南の縄文調査室長	青	和久逸	守成
	タ	調査第二課長	彌	彌榮	一典
	タ	主任文化財主事兼調査係長	富	田原	孝良
	タ	第二課第二調査係長	中	中富	伸一
調査担当	タ	文化財主事	原	山田	花屋
	タ	文化財主事	一	山	紙屋
	タ	文化財調査員	孝	田	越寛
調査事務	タ	総務係長	良	伸	晴
	タ	主査	一	鳥	

3 広段遺跡・上野畠遺跡（平成21年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所	所長	山下	吉守	美重
調査主体	鹿児島県教育委員会	次長兼総務課長	山齊	藤崎	憲志郎
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼南の縄文調査室長	青	和久逸	守成
調査企画	タ	調査第二課長	彌	彌榮	一典
	タ	主任文化財主事兼調査係長	富	田原	孝良
	タ	第二課第二調査係長	中	中富	伸一
調査担当	タ	文化財主事	原	山田	花屋
	タ	文化財主事	一	山	紙屋
	タ	文化財調査員	孝	田	越寛
調査事務	タ	総務係長	良	伸	晴
	タ	主査	一	鳥	

4 整理報告書作成作業

（1）平成22年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所	所長	山下	吉守	美重
調査主体	鹿児島県教育委員会	次長兼総務課長	田中	明治	
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼南の縄文調査室長	中村	耕治	
調査企画	タ	調査第二課長	井ノ上	秀文	
	タ	主任文化財主事兼調査係長	鶴田	静彦	
	タ	第二課第二調査係長	中原	一成	
整理担当	タ	文化財主事	中富	孝一	
	タ	文化財主事	山		

調査事務	タ	文化財調査員	花田 寛典
	タ	総務係長	大園祥子
	タ	専門員	鳥越寛晴

(2) 平成23年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 寺田仁志
調査企画	タ 次長兼総務課長 田中明成 タ 次長兼南の縄文調査室長 井ノ上秀文 タ 調査第二課長 富田逸郎 タ 主任文化財主事兼調査 鶴田静彦 タ 第二課第二調査係長
整理担当	文化財主事 吉岡康弘 タ 文化財主事 富山孝一
調査事務	タ 総務係長 大園祥子 タ 主査 岡村信吾

5 整理作業の経過（日誌抄）

整理作業及び報告書作成作業を平成22年度、平成23年7月29日にかけて、県立埋蔵文化財センターにて行った。大まかな整理作業、報告書作成作業の経過は次のとおりである。

平成22年4月

図面整理、接合、土器復元、注記。

平成22年5月

図面整理、接合、復元、土器実測。

平成22年6月

復元、石器実測、土器実測、遺構図トレース、拓本。

平成22年7月

拓本、石器実測、土器実測、遺構図トレース。

平成22年8月

石器実測、土器実測図トレース、拓本、遺構図トレース、遺構位置図作成。

平成22年9月

土器実測、石器実測、石器実測図トレース、拓本貼り、地形図パソコンデータ作成。

平成22年10月

レイアウト準備、石器実測、石器実測図トレース、地形図パソコンデータ作成。

平成22年11月

土器復元、レイアウト確認、土器実測、土器実測図トレース。

平成22年12月

石器実測、石器実測図トレース、土層断面図トレース。
平成23年1月
地形図作成、古墳時代の土器実測・トレース、古代の土器の実測・トレース。
平成23年2月
図面整理、レイアウト、遺構写真整理。
平成23年3月
遺構写真整理、石器実測、石器実測図トレース。
平成23年4月
中世の遺物の実測・トレース、文章作成、観察表作成。
平成23年5月
遺構位置図作成、近世の遺物の実測・トレース、レイアウト、文章作成、観察表作成。
平成23年6月
遺物出土状況図作成、レイアウト、文章作成、観察表作成。
平成23年7月
レイアウトチェック、文章チェック、観察表チェック、遺物写真撮影。



整理作業の様子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 自然環境

陣之尾遺跡・陣之尾星跡、上野畠遺跡・広段遺跡は、阿久根市に所在する。阿久根市は県の北西部に位置し、境界は北に日本三大潮流として名高い黒之瀬戸を隔てて長島と対し、東北は出水市高尾野町、東は出水市野田町、南は薩摩川内市と接している。

阿久根市の東南部には紫尾山系からなる標高300mの山々が連なり、また北部にも標高300mに達する笠山の山塊があり山地の多い地形である。東南部の山地は四万十層から、北部山塊は中新世～更新世火山性堆積物からなる山地である。両者の山地をつなぐようにして、阿久根平野と折多平野の二つの平野がある。いずれも沖積作用と隆起作用によって形成された平野で、本来は湿地が多い平野である。阿久根平野が市の行政機関が集中する市街地であるのに対して折多平野は、農業を中心とする市の穀倉地帯である。一方、西は東シナ海に面しており、約40kmに及ぶ海岸線は変化に富んでいて、美しい自然の景観を生んでいる。気候は温暖で降雨量が多く全体的に降霜も少なく、ハマジンチョウ、ヘゴ等の亜熱帯性の植物も越冬している。沿岸は漁業資源に富んでいる。

陣之尾遺跡・陣之尾星跡は阿久根市多田に所在する。多田地区は東方に紫尾山を中心とした出水山地が迫り、出水山地を源とする筒田川と内田川が合流し折口川と名を変えて、東シナ海に注ぐ。現在は、筒田川及び内田川（折口川）により形成された平地が広がるが、江戸時代の頃は入り江であったと伝えられる。陣之尾遺跡・陣之尾星跡は北側を流れる筒田川と南側を流れる内田川に挟まれた標高15m程度の小高い丘陵西端部に位置する。

上野畠遺跡・広段遺跡は阿久根市鶴川内に所在する。上野畠遺跡は鷹首山の北西、城山の北の標高約35mの丘陵上に位置し、遺跡の南側を高松川が流れ、県道46号線が通っている。広段遺跡は阿久根市内の中心部を流れる高松川中流域の右岸から約1km北の標高約12～15mの畑作地内に立地する。

北山田遺跡は出水市野田町下名に所在する。出水市は、鹿児島県の最北端に位置しており、熊本県水俣市に接する県境の市である。北東部は矢筈岳（687m）を中心とし、輝石安山岩の基盤岩からなる肥薩山塊が東北方向に走り、熊本県水俣市及び鹿児島県伊佐市と接する。南部は、四万十層群と一部花崗閃緑岩からなる紫尾山（1,067m）を主峰とする紫尾山地が南北方向に走り、さつま町と接する。この紫尾山地と、出水平野との断層崖下には、シラス台地と高位段丘がある。これに続く大野原一帯は、洪積台地の扇状地が広大に広がっている。この扇状地を囲むように、河岸段丘と沖積地が発達している。矢筈岳山地に源を発した米ノ津川と、紫尾山地を源とする平良川は、中流で合流し八代海に注ぐ。

平良川及び米ノ津川の左岸には、知識面と呼ばれる河岸段丘が扇状地をとりまくように細長く形成され、中流域では米ノ津面と呼ばれる沖積地が発達する。なお、下流域では三角州や海岸平野となり八代海となるが、海岸部は江戸時代以後干拓が行われ、現況の地形を呈す。

西部は扇状地及び高尾野川、野田川によって形成された河岸段丘や沖積地で阿久根市と境を接する。北西部は、遠浅の八代海を隔てて、長島及び天草諸島を望むことができる八代海では遠浅を利用したのりの養殖が盛んであり、また、冬には白い帆のけたうたせ船がクルマエビ漁にいそしみ、

荒崎の干拓地には、一万羽を数えるナベツル・マナヅルが近年飛来している。

北山田遺跡が位置する野田町下名の地形は、南部の急峻な紫尾山系からなだらかな扇状地が続いており、この扇状地を取り囲むように河岸段丘が見られる。この河岸段丘は野田川によって形成されている。河川の両側には沖積平野がみられ、先端には近世以降の低平な干拓地が広がっている。北山田遺跡はこの野田川左岸の台地上に位置している。

第2節 歴史的環境

陣之尾遺跡・陣之尾星跡、上野畑遺跡・広段遺跡の所在する阿久根市では平成14年現在で埋蔵文化財包蔵地として55箇所が確認されている。多くは分布調査での把握である。特に阿久根平野と折田平野周辺の台地及び丘陵に集中してみられる。

旧石器時代の遺跡が折田平野最深部の微高地を中心に赤刺遺跡、日暗遺跡等3箇所で確認されている。縄文時代になると市内各所に確認されるが、旧石器時代と同様に平野周辺の微高地に遺跡が見られ、波留貝塚等30遺跡が確認されている。弥生時代の遺跡は現在のところ確実な例が少なく、脇本周辺の台地上をはじめいくつかの遺跡で若干確認されるだけである。古墳時代になると脇本古墳群、鳥越古墳群が築かれるようになり、県内でも有数の古墳築造地域として知られている。古代になると山下地区を中心とした台地上に諏訪ノ前遺跡をはじめ9遺跡が確認されている。中世では山城が山下地区を中心に分布し、また、散布地の諏訪ノ前遺跡等を合わせて25遺跡が確認されている。近世になると、地頭館が山下地区から波留、町地区に移り、集落もそれに伴い波留、町地区に移るが、現在残る遺跡としては大曲窯、脇本窯をはじめ、わずかな遺跡である。これらの遺跡は、ほとんどが分布調査によるもので複数の時代にまたがり確認される場合が多い。

北山田遺跡の所在する出水地方は、早くから考古学・歴史学研究のフィールドとして、学術上重要な地として注目されてきた。出水市の東部の標高500mの上場高原一帯は、旧石器時代の遺跡が集中し、特に上場遺跡は、始良Tnテフラを境に爪形文土器と細石器の供伴やナイフ形石器、台形石器等を包含する7時期の文化層の存在が明らかになった。隣接する伊佐市には黒曜石原産地が所在する。

縄文時代の遺跡の立地は、主に扇頂部及び扇端部の河岸段丘や山麓縁辺、裾部に集中している。早・前・後期の中尾I・II遺跡などがあり、前期の莊貝塚、中期の柿内遺跡や江内遺跡、後期の出水貝塚、晩期の沖田岩戸遺跡、大坪遺跡などがある。

特に出水貝塚は大正9年、京都大学によって本県で最初の貝塚遺跡調査が行われた。戦後の調査によって貝塚下から早期押型文土器が出土し、貝層中及び貝層上部から中・後期の土器（南福寺式土器・出水式土器）などが出土するほか、埋葬人骨も計7体確認されている。また、江内貝塚でも中期を中心とする遺物や埋葬人骨が出土している。

縄文晩期遺跡では、沖田岩戸遺跡、尾崎B遺跡、大坪遺跡などがあり、いずれの遺跡も発掘調査が行われ、出水地方の考古学研究に大きな成果をあげている。

弥生時代遺跡としては、堂前遺跡や下高尾野遺跡があり、これらの遺跡により、弥生時代中期の覆石墓から後期の葺石土坑墓、さらに古墳時代の地下式板石積石室へと移行する埋葬形態の変遷を知ることができる。

古墳時代になると、洪積台地縁辺に位置する、短甲が出土した溝下遺跡や、八代海と東シナ海をつなぐ黒之瀬戸海峡によって隔てられた長島には、5～7世紀にかけて高塚古墳が出現する。

出水の地名が文献資料に現れるのは、続日本記で宝亀9年（778年）11月の条に遣唐船が出水海岸に漂着とあり、その後和名抄には「伊豆見」、建久國田帳に「出水郡」として登場する。平安時代には「院」が成立し山門院となり出水郡から独立して莊園化し、島津荘の成立と共に吸収される。その後、守護被官本田氏一族の所領に組み込まれ、やがて島津用久が薩州家を興す（1425年）と共に莊園は崩壊する。また、島津忠久が元暦2年（1185年）に島津荘下司職に補任され、忠久は木牟礼城に守護被官本田貞親を入部させたため、木牟礼城は5代貞久まで薩摩国守護所として守護勢力の拠点となる。

出水麓遺跡の南側には、戦国時代に島津用久によって築かれた亀ヶ城跡があり、現在は城山公園として市民に親しまれている。その山城の麓付近には薩州家にゆかりのある見性庵跡や薩州島津家の墓がある。北西部に800mほど行くと、薩州家五代実久が建立し、明治の廃仏毀釈により廃寺となつた専修寺跡がある。

亀ヶ城跡と出水麓地区の間を東西方向に横切るように、18世紀初頭（宝永年間～享保年間）に20数年という長い年月と膨大な労力により作られた五万石溝が走っている。時の藩主島津吉貴の命により大野原台地に水を引く目的で作られた全長約20kmに及ぶ灌漑用水路である。

出水市街地の南部一帯は、17世紀初頭の外城制度の下に藩境としての政治的要衝の性格を強め、藩内から移住された武士の住居（高屋敷）地区兼陣地として整備・発展してきた、いわゆる「麓」地区である。平成7年に国の重要伝統的建造物保存地区に選定されたこの地区には、出水市指定文化財である出水假屋門・武家門・石垣・生垣や竹添屋敷など4軒の建築物があるほか、伝統的建造物として特定された建造物などがほぼ昔の姿で残っており、当時の面影を今に伝えている。

北山田遺跡の所在する出水市野田町に島津氏の菩提寺であった感応寺（明治2年の廃仏毀釈のおり廃寺）があった。感応寺には初代から五代までの墓がある。また、熊陣地区（地蔵・大日・天神・仮屋）にも藩政期の石垣や武家門など、当時の面影を現在に残すところもある。

《参考・引用文献》

- 阿久根市 1974 『阿久根市誌』
阿久根市教育委員会 1982 『北山遺跡』 阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
鹿児島県教育委員会 1997 『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(VI)』 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書72
出水市教育委員会 1998 『出水麓遺跡(2)』 出水ふもと歴史資料館等建築物建設に伴う発掘調査報告書
阿久根市教育委員会 2003 『中之城跡』 阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
野田町 2003 『野田町誌』



第1図 陣之尾遺跡・陣之尾塁跡、上野畠遺跡・広段遺跡の周辺遺跡図 (1:25,000)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物等	備考
1	陣之尾 塹	阿久根市多田陣ノ尾	山地			本報告
2	陣之尾	阿久根市多田山之口	台地	旧石器～中世	土坑、古道跡、細石刃、細石刃核、剥片、縄文土器、打製石斧、礫器、磨石、石皿、成川式土器、土師器、同安窯系青磁、滑石製品	本報告
3	折駅 口上	阿久根市折口	台地	縄文		
4	渴山	阿久根市多田渴山	丘陵	縄文		
5	平田	阿久根市多田字平田	丘陵	縄文		
6	多田山	阿久根市多田多田山	低地	古墳	成川式土器、土師器	北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(IV) 平成9年鹿児島県教育委員会
7	堂免	阿久根市多田堂免	丘陵	縄文		
8	日暗	阿久根市鶴川内日暗	台地	旧石器		鹿考古報告
9	広段	阿久根市鶴川内	台地			本報告
10	上野畠	阿久根市鶴川内	丘陵	縄文～近世	竪穴遺構、掘立柱建物跡、炉状遺構、柱穴、土坑、石籠、削器、磨製石斧、磨石、弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁	本報告
11	波貝留塚	阿久根市波留	宅地	縄文～中世	曾畠式土器、出水式、磨消縄文土器	北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(IV) 平成9年鹿児島県教育委員会
12	新城跡	阿久根市山下新城	台地	中世		

第1表 陣之尾遺跡・陣之尾塹跡、上野畠遺跡・広段遺跡の周辺遺跡地名表



第2図 北山田遺跡周辺遺跡図 (1 : 25,000)

遺跡名	所在地	地形	時代	遺構、遺物等	報告書、参考図書など
1 竹林城跡	高尾町内木半礼	台地	中世		「鹿児島県の中世城館跡」鹿児島県教育委員会
2 川骨	高尾町内	台地	縄文、古墳	土器、成川式	「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（V）東町・高地町・平成7年度」鹿児島県教育委員会
3 木半礼	高尾町本半礼	台地	弥生（後）		
4 本半礼城跡	高尾町内尾崎	台地	中世		「鹿児島県の中世城館跡」鹿児島県教育委員会
5 草笠掛	野田町下名屋地	台地	古墳～中世	成川式、土師器、須恵器	「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（V）東町・高尾町・平成7年度」鹿児島県教育委員会
6 中林	野田町下名中林	丘陵地	中世	中世磁器	
7 北山田	野田町下名	台地	中世～近世	水田跡、青磁、薩摩焼	本報告
8 六枝	野田町下名六枝	丘陵地	中世～近世	青磁、染付、陶器	
9 中郡	野田町下名中郡	台地	弥生（後）		
10 木半礼城屋形跡	野田町下名屋地ほか	丘陵地	中世	水の手、土器、折れひづみ	「鹿児島県の中世城館跡」鹿児島県教育委員会
11 大園	野田町下名大園	台地	中世	土師器	「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（V）東町・高尾町・平成7年度」鹿児島県教育委員会
12 山内寺跡	野田町下名中郡	台地	建久7年		
13 木ノ上城跡	野田町下名中郡	丘陵地	中世		野田町郷土誌
14 崩上城跡	野田町下名中郡	丘陵地	中世		野田町郷土誌
15 感応寺跡	野田町下名八幡	台地	中世（鎌倉）建2		出水風土記
16 大畠	野田町下名瀬戸大畠	台地	縄文、中世	横状遺構、柱穴、繩文土器、土師器、須恵器、陶磁器	「大畠遺跡」野田町教育委員会
17 鶴之城跡	野田町下名鶴之城	丘陵地	中世	土器、空瓶	「鹿児島県の中世城館跡」鹿児島県教育委員会
18 松ヶ道A	野田町上名松ヶ道	丘陵地	縄文、近世	チャート、近世陶器	
19 野田畠	野田町下名田多園	台地	縄文～中世	堅穴建物、ピット、近世土器、土師器、瓦質土器	「野田畠遺跡」出水市教育委員会
20 春	野田町下名下田多園	台地	古墳～中世	成川式、土師器、染付	「大畠遺跡」野田町教育委員会
21 松ヶ道B	野田町上名松ヶ道	丘陵地	中世・近世	青磁、近世陶器	
22 桂ヶ城跡	野田町下名桜ヶ城	丘陵地	中世	土器、空瓶	野田町郷土誌
23 勝迫	野田町下名勝迫	丘陵地	縄文	チャート	
24 城内貝塚	野田町上名城内	山麓緩斜面	縄文・中世	貝層（二枚貝）	
25 鬼井山城跡	野田町上名本城	丘陵地	保元平治期	堅穴、空瓶、土器、ピット	「鹿児島県の中世城館跡」鹿児島県教育委員会
26 新城跡（野田）	野田町上名新城	丘陵地	中世	帶孔、空瓶、土器	「鹿児島県の中世城館跡」鹿児島県教育委員会
27 上名造跡群	野田町上名	机地	中世	土師器	
28 下名造跡群	野田町下名	机地	縄文～中世	押壓型、石鑑、土師器	「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（V）東町・高尾町・平成7年度」鹿児島県教育委員会
29 湯之谷	野田町上名湯之谷	丘陵地	縄文、古墳	チャート、古墳時代土器	
30 薩原	野田町上名薩原	台地	縄文、近世	黒曜石、磐石、近世染付	
31 石倉A	野田町上名石倉	河段段丘	江戸	近世染付、陶磁器	
32 大迫口B	野田町上名大迫口	台地	江戸	近世染付、陶器	
33 石倉B	野田町上名石倉	山麓緩斜面	縄文、近世	黒曜石、チャート石核、染付	
34 大丸A	野田町上名大丸	山麓緩斜面	縄文、江戸	黒曜石、チャート網片、瓦質器、近世陶器	
35 大丸B	野田町上名大丸	山麓緩斜面	縄文、江戸	磐石、近世染付	
36 大丸C	野田町上名大丸	台地	縄文	チャート原石、網片、チップ	
37 潤松	野田町上名涼松	台地	江戸	素燒瓦、近世陶器、染付	
38 丸尾	出水市莊下	扇状地縁辺	縄文・中世	墨曜石、陶磁器	「山内遺跡（上場遺跡）発掘調査等報告書」出水市教育委員会
39 桑水流	出水市莊下	扇状地縁辺	平安・中世	土師器、陶磁器	「山内遺跡（上場遺跡）発掘調査等報告書」出水市教育委員会

第2表 北山田遺跡周辺遺跡地名表

第1莊上	出水市莊下	台地	中世（鎌倉）	土師器、青磁	
41 莊上Ⅱ	出水市莊下	台地	古代	土師器、須恵器	
42 田瀬	出水市莊下	扇状地縁辺	繩文・古墳	貝殻、土器、須恵器	「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書 〔Ⅳ〕」
43 墓ノ内	出水市莊下	扇状地	平安・中世	青磁、土師器	「市内道路（上場遺跡地）発掘調査等報告書」出水市教育委員会
44 下高尾野	高尾野町下高尾野	台地	弥生（後）		
45 外島	出水市莊下	台地	古墳～中世		
46 宮田	出水市莊下	扇状地縁辺	平安・中世	土師器、陶磁器	「市内道路（上場遺跡地）発掘調査等報告書」出水市教育委員会
47 松ヶ角	高尾野町唐笠木笠木	台地	古代	土師器	
48 小村	出水市莊上	扇状地	平安・中世	土師器、陶磁器	「市内道路（上場遺跡地）発掘調査等報告書」出水市教育委員会
49 松ヶ野	高尾野町下高尾野	台地	較非毛・溝・縫	貝殻円筒形土器、土師器、青磁、石瓢、打製石斧	「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（V）東町・高尾野町・平成7年版」鹿児島県教育委員会
50 出じ道	高尾野町唐笠木	台地	繩文・中世	黑曜石、土器、土師器	「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（V）東町・高尾野町・平成7年版」鹿児島県教育委員会
51 講詠下	高尾野町唐笠木	台地	較非・平・垂	貝殻円筒形土器、土師器	「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（V）東町・高尾野町・平成7年版」鹿児島県教育委員会
52 放光寺	高尾野町下高尾野放光寺	扇状地	黃文・古墳・中世	土器、石器、人骨、土坑墓	「放光寺遺跡」鹿児島県教育委員会
53 新城跡（高尾野）	高尾野町下高尾野新域	河岸段丘	中世	埴・空塚、土塁	「新城跡」高尾野町教育委員会
54 鹿追	高尾野町下高尾野高松	台地	繩文～弥生	中期土器、免田式	「放光寺遺跡」鹿児島県教育委員会
55 講詠	高尾野町唐笠木	台地	繩文～弥生		
56 横馬場	高尾野町榮引・唐笠木	台地	繩文～弥生		
57 上石坂	高尾野町下高尾野上石坂	丘陵地	近世	近世陶磁器	
58 榛引跡群a	高尾野町下高尾野・榮引	台地	繩文～弥生		
59 荘田	高尾野町下高尾野芥田	台地	古代・近世	土師器、近世陶磁器	
60 本道	高尾野町下高尾野本道	台地	黃文・古墳・近世	繩文時代土器、古墳時代土器、近世陶磁器	
61 道上	高尾野町下高尾野道上	台地	近世	近世陶磁器	
62 水天原	高尾野町下高尾野水天原	台地	古墳・近世	古墳時代土器、近世陶磁器、窯道室	
63 本城跡	高尾野町下高尾野高城	台地	中世		「鹿児島の中世城館跡」鹿児島県教育委員会
64 高尾野燒窯跡	高尾野町下高尾野内野ノ下	山麓傾斜面	近世	大型陶器、摺鉢、窯道具	
65 建具堀	高尾野町下高尾野建具堀	台地	古墳・近世	古墳時代土器、近世陶磁器	
66 段の原	高尾野町下高尾野段の原	山麓傾斜面	繩文・近世	砾石、近世陶磁器	
67 青木	野田町上名青木	沖積地	繩文・古代・近世	土師器、近世陶器、黒曜石	
68 上平田	野田町上名上平田	沖積地	古代・中世・近世	土師器、青磁、青白磁、陶磁器	
69 七枝	野田町上名七枝	沖積地	中世・近世	中近世糞付、青磁普通底、麻痺燒、近世陶磁器	
70 新田	野田町上名新田	沖積地	古代・中世・近世	失墜土器・土師器、青磁、白磁、中近世糞付、近世陶磁器	
71 野角	野田町上名野角	沖積地	古代・中世・近世	失墜土器・瓦質糞付、青白磁、糞付、近世陶磁器	
72 觀跡	高尾野町下高尾野観跡	台地	中世・近世	青磁、近世陶磁器	
73 篠土山	野田町上名篠土山	台地	繩文・古代・中世	土師器、須恵器・土鍋・瓦質糞・中近世糞付、土器、黑曜石	
74 竹林	野田町上名竹林	台地	繩文・古代・近世	土器、土師器、近世陶磁器、黒曜石	
75 大道A	野田町上名大道	山麓傾斜面	近世	鉄滓	
76 大道B	野田町上名大道	台地	繩文・中世・近世	瓦質糞付、近世陶磁器、チャート	
77 小野段	野田町上名小野段	河岸段丘	近世	近世陶磁器	
78 笠山A	高尾野町下高尾野笠山	河岸段丘	繩文・古代・近世	黑曜石、チャート、土師器、近世陶磁器	
79 山仁田	野田町上名山仁田	河岸段丘	繩文・中世・近世	中近世糞付、黑曜石	

陣之尾遺跡・陣之尾塁跡

第3章 陣之尾遺跡・陣之尾塁跡の調査

第1節 調査の経過（日誌抄）

調査は以下の経緯で進行した。陣之尾遺跡を主体とし、陣之尾塁跡は（星）で記述する。また、トレンチについては「T」と表記した。

平成20年8月4日～8月8日

調査区坑設定。1～6 T設定、掘り下げ。トレンチ配置図作成。1 T土層断面実測、写真撮影。
4 T、5 T完掘、写真撮影。

8月11日～8月12日

7 T、8 T設定。4 T、5 T、7 T、10 T掘り下げ。9 T内遺構写真撮影。

8月18日～8月22日

4 T、5 T、6 T、8 T、10 T、11 T掘り下げ。9 T埋め戻し。溝状遺構1号検出状況写真撮影、
実測。三木靖教授（鹿児島国際大学）現地指導。

8月25日～8月28日

8 T掘り下げ終了、遺物取り上げ、土層断面実測、完掘状況写真撮影。11 T、12 T設定、掘り下げ、
完掘。4 T、5 T、8 T内遺物取り上げ。4 T拡張。13 T掘り下げ。14 T設定、掘り下げ。5 T、
11 T、12 T、13 T、14 T完掘、写真撮影。土坑3号、古道検出状況撮影、位置図作成、半裁。土
坑1号半裁。

9月1日～9月5日

4 T拡張及び掘り下げ。5 T、14 T完掘、写真撮影。14 T土層断面実測。土坑2、3、4号半裁。
トレンチ4完掘、写真撮影。土坑1号内遺物の出土状況図作成、写真撮影。古道跡実測。溝状遺構
1号実測。

（星）1地点環境整備、掘り下げ。2地点環境整備。3地点塹壕の位置図及びセンター図作成。

3地点15 T掘り下げ。15 T内ピット検出状況の写真撮影及び半裁。3地点トレンチ設定。2地点掘
り下げ。

9月8日～9月12日

ピット1号実測。硬化面掘り下げ。8 T、13 T掘り下げ。全面表土剥ぎ。古道跡写真撮影。

（星）1地点全面掘り下げ。2地点17 T掘り下げ。3地点16 T、17 T土層断面図作成、写真撮影。

4地点への伐開。1・2地点写真撮影、土層断面図作成、調査終了。台風対策。

9月16日～9月19日

21 T、22 T掘り下げ。古道跡平板実測。埋土内遺物実測。溝状遺構平板実測、写真撮影。ピット
配置図作成。

（星）1地点掘り下げ、センター図・トレンチ配置図作成。4地点20 T掘り下げ。

9月22日～9月26日

20 T、21 T掘り下げ。21 T内ピット平板実測、半裁、断面実測。21 T内遺物出土状況図作成。
21 T内溝状遺構検出状況写真撮影、実測。古道跡実測、写真撮影。Ⅲ層遺物取り上げ、センター
図作成、完掘状況写真撮影。全トレンチ埋め戻し。

（星）1地点埋め戻し。調査終了。

第2節 発掘調査の方法

陣之尾遺跡は段丘東側半分を占め、南東側に緩やかに傾斜する。陣之尾遺跡の北西側には二つの頂を有する山地が位置し、陣之尾塁跡に相当する。

陣之尾遺跡及び陣之尾塁跡の遺物包含層の存在を全体的に把握する必要性から、陣之尾遺跡に14本の確認トレンチ、陣之尾塁跡に6本の確認トレンチを設定し、トレンチ調査を行った。トレンチ設定にあたっては、調査範囲全体が捉えられるように調査範囲全体にかけてまんべんなく、且つ全体的地形を把握する必要性から、現況の地形傾斜に沿って、或いは等高線とほぼ直交するように留意して設定した。また、陣之尾の小字名があり、阿久根市誌に記される該地が中世の山城であるとの伝承、戦前・戦後に陣之尾塁跡の付近で青年たちが刀等を数多く収集していたとの集落民の見聞などから、中世の山城や近代における西南戦争の薩摩軍の進軍・敗路の可能性などを考慮し、陣之尾塁跡に関しては曲輪や堀を有する城跡の可能性も考えながら、トレンチを設定した。

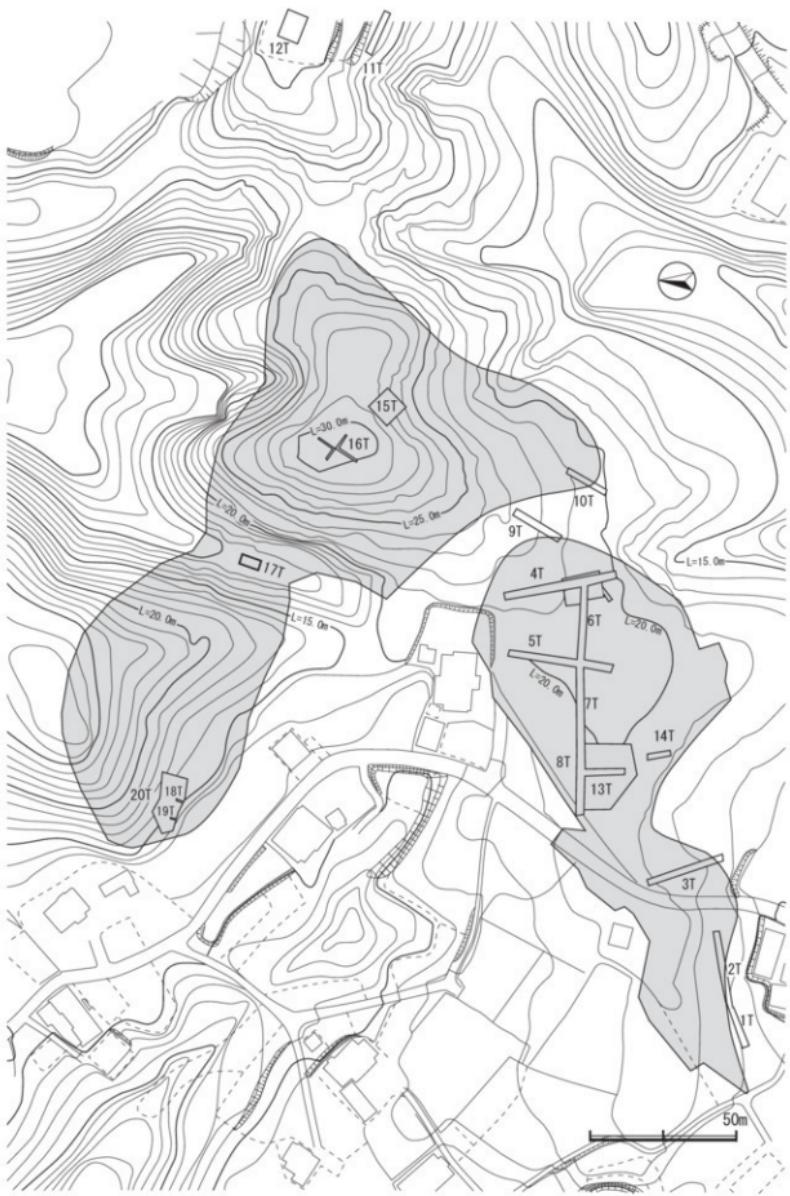
草や竹藪の伐開等を実施した後、重機によって表土を除去し人力（山鋤、ジョレン、移植ゴテ等を利用）により掘り下げを行った。II層（褐色砂壤土）～III層（淡黄褐色火山灰）～IV層（安山岩風化土）まで段階的に調査を進めた。各層下面では遺物の取り上げを行った後、遺構検出を行った。検出した遺構については、掘り下げや出土遺物の取り上げを行った後、写真撮影や遺構図面作成、センター図作成、土層断面図作成等を実施した。

遺構遺物が発見された箇所についてはトレンチを広げて調査した。以上の調査の結果、陣之尾遺跡においては、古墳時代相当の土坑1基、古代相当の古道跡1条、古代・中世相当の溝状遺構1条、近世相当の柱穴群が検出され、旧石器時代から中世までの遺物が出土した。陣之尾塁跡においては15T内の表土中から石鎌が1点、18Tの表土中からスクレイバーが1点出土した。10T、11T、12T、17Tには包含層は存在するが遺構・遺物は確認されなかった。他のトレンチについては包含層は存在せず、表土直下にシラスや基盤層の凝灰角礫岩が堆積する状況であった。

第3節 層序

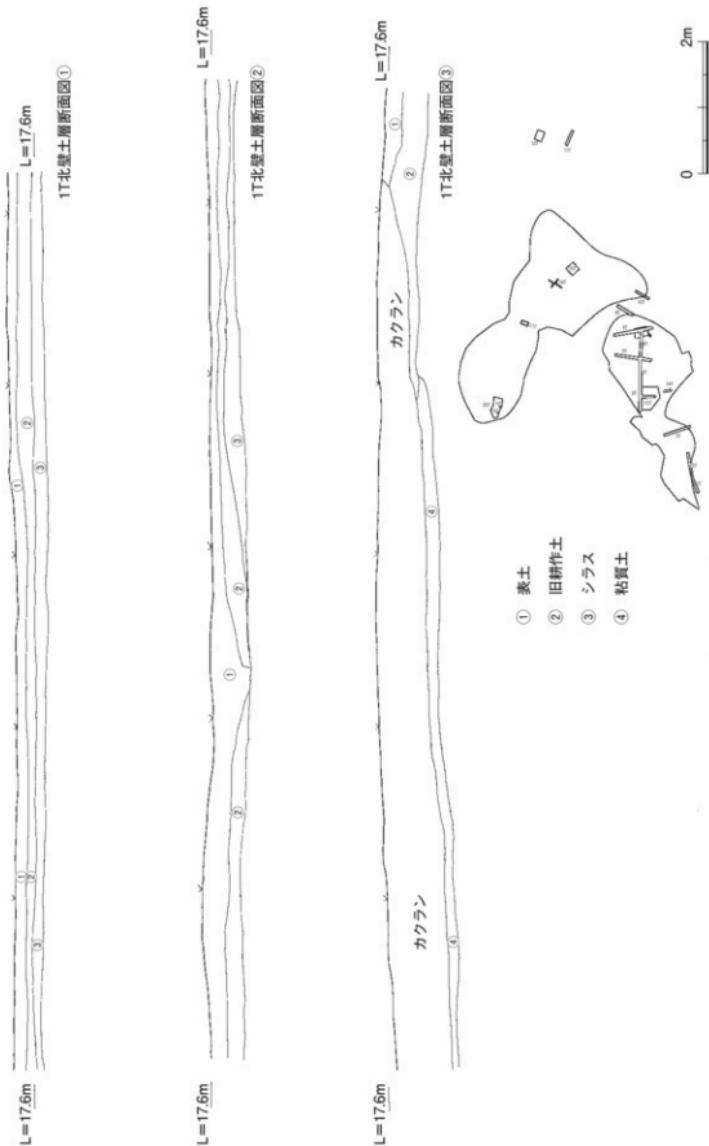
陣之尾遺跡は、丘陵上の比較的平坦な面に位置するが、場所によってはII・III層が削平を受けている。現地形は、畑の造成・開墾等により形成されたもので、旧地形は緩やかに傾斜していたと想定される。陣之尾塁跡では、頂上付近のII・III層の堆積は非常に薄く表層以下十数cmでIV層に（地山）に至る。陣之尾遺跡・陣之尾塁跡の基本土層は右のとおりである。



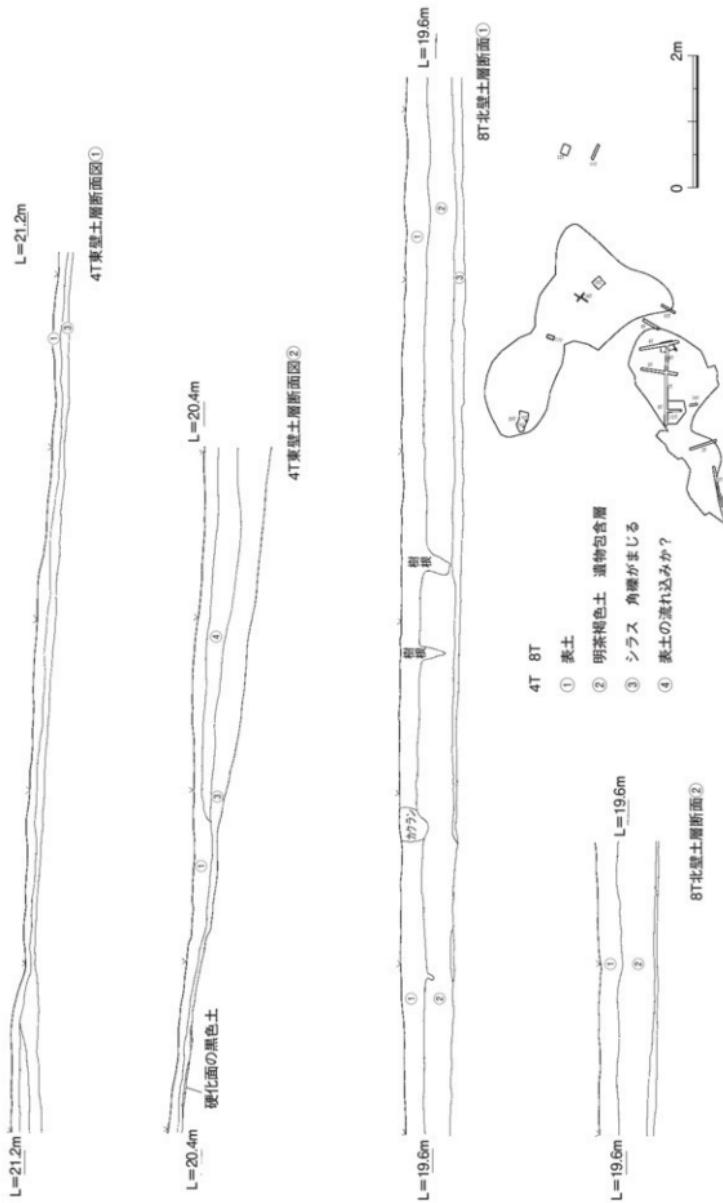


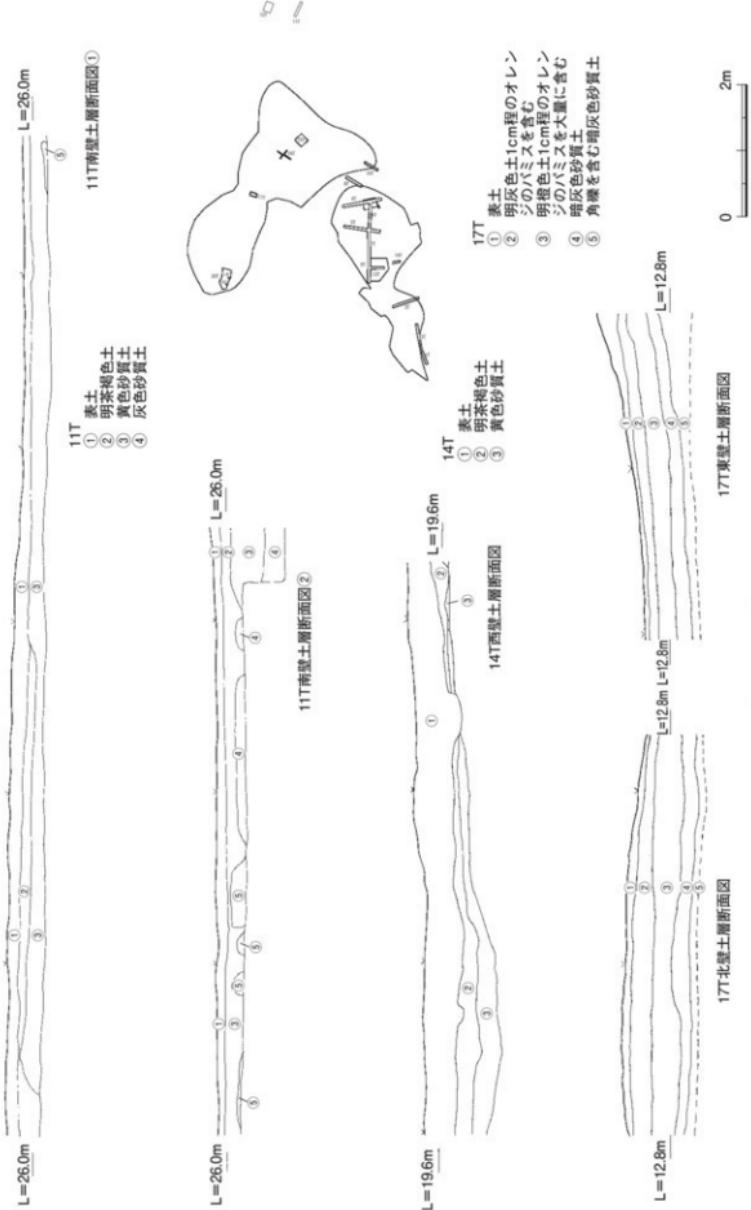
第1図 地形図およびトレンチ配置図

第2図 土層断面図1

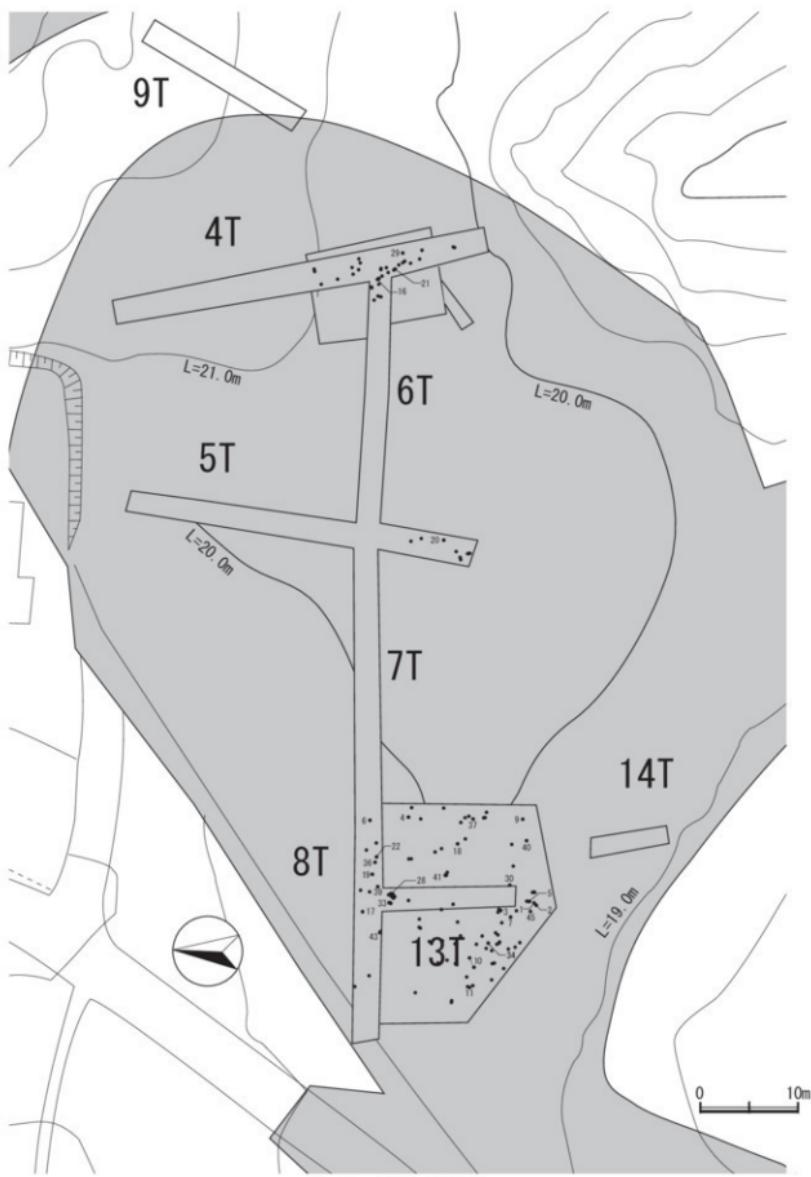


第3図 土層断面図2





第4図 土層断面図3



第5図 遺物出土状況図

第4節 旧石器時代の調査

旧石器時代相当の遺構は検出されなかった。遺物は細石刃のほか調整剥片、細石刃核が出土した。

1 遺構

旧石器時代相当の遺構は検出されなかった。

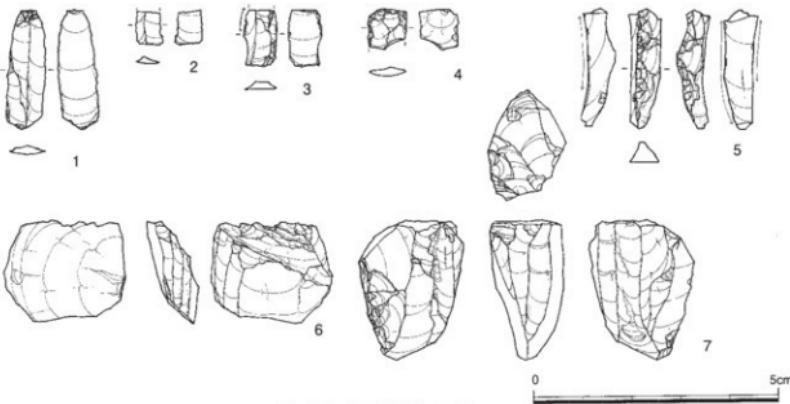
2 遺物（第6図）

遺跡中、層堆積が希薄な箇所が多く、包含層が厚く堆積する箇所についても、I層中に旧石器時代から古墳時代の遺物が含まれる状況にあり、層位に基づき出土石器の時期区分を明確にしえないことから、形式学的に旧石器時代の遺物と認定し得るもののみを旧石器時代の石器として報告した。細石刃文化期の石器は主に21T周辺を中心に出土している。

細石刃 1はガラス質で透明感があり、不純物をほとんど含まない、黒色で良質な黒曜石製の細石刃である。分割されないほぼ完形の細石刃で、頭部には頭部調整の痕跡をとどめる。末端部は主要剥離面側にやや湾曲し、底面右半分には自然面が残置され、左半分は折り取られている。右側刃全面に微細剥離が生じており、刃部が摩耗する。2も不純物を含まない黒色で良質な黒曜石製の細石刃で、頭部、尾部とも折断により除去された中間部である。左右両側縁ともに微細な剥離が生じているが、左側刃部に顕著でありかつ刃部と並行する線条痕が観察される。3も1・2と同様の黒色で良質な黒曜石製の細石刃である。頭部と尾部を折断により除去された中間部である。左右両側刃とともに微細な剥離が見られるが、左側刃に顕著であり、折れの生じた下半部を除き、側刃から表裏両面に微細な剥離が、また刃部と並行する線条痕がみられる。4は灰黒色を呈する比較的良質な安山岩製の細石刃の頭部片で、頭部調整が施される。中間部以下は折断されており、明確な使用の痕跡はない。

調整剥片 5はあまり不純物を含まない黒色で良質な黒色の黒曜石の剥片である。稜上から自然面の残る右側刃に向けて剥離調整が加えられた後、上方から削片状に剥出された断面が三角形を呈する剥片で、ファーストスピールとみられる。

6は灰褐色を呈する良質な珪質頁岩の剥片で、背面左寄りに連続する細石刃の剥離痕がみられる。当初、細石刃核の打面左側刃から繰り返し剥離が加えられた後、作業面側から後方に向けて作業面



第6図 旧石器時代の石器

及び右側面を除去するように剥出された剥片で、末端部にはヒンジフラクチャーを生じている。通常の作業面再生剥片とは異なるが、細石刃核の調整剥片の一種として図示した。

細石刃核 7は作業面の中央付近に軽石質不純物が密集する部分があるものの、黒色でガラス質の黒曜石製の細石刃核である。やや厚みのある剥片を素材とし、正面形が楔形を呈する。背縁稜上からの調整剥離により明瞭な尾縁が形成され、当初、側方から加えられた剥離により打面形成がおこなわれた後、作業面側から調整が加えられている。

第5節 繩文時代の調査

繩文時代相当の遺構は検出されなかった。遺物では繩文時代早期中葉の条痕文土器、中原式土器、押型文土器が出土した。石器では打製石鎌、スクレイパー、ドリル、剥片、石核、磨製石斧、礫器、磨石、敲石類が出土した。

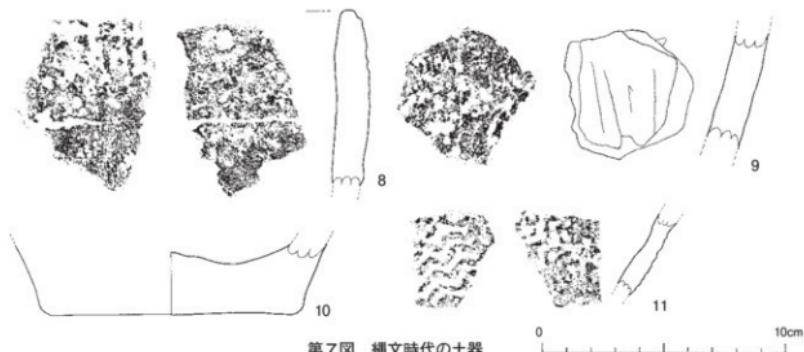
1 遺構

繩文時代相当の遺構は検出されなかった。

2 遺物

土器（第7図）

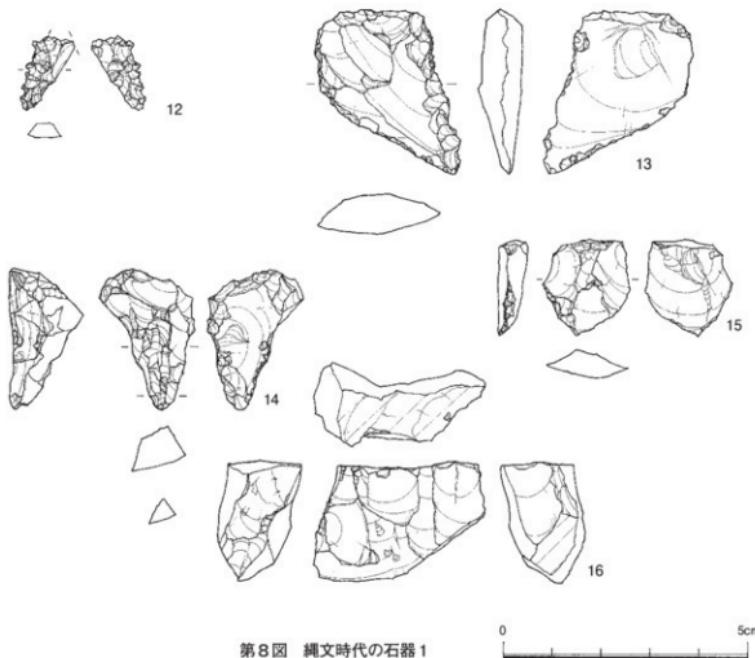
繩文時代の土器は4点出土し、すべてを図化した。いずれの土器も小片であり摩滅が激しい。8～11は繩文時代早期中葉の土器である。8は口縁部がやや内湾し、外面に斜位の貝殻刺突文がわずかに観察できる。9は胴部で、外面の文様等は不明である。内面はヘラ削りが施される。10は底部である。中原式の範疇にはいる資料と思われる。11は胴部で縱位の山形押型文が施される。



第7図 繩文時代の土器

第1表 繩文時代の土器観察表

掲図 番号	種別	器種	部位	出土区	層位	法量(cm)			胎土			色調	調整		備考	
						口径	底径	器高	石英	長石	角閃石		外面	内面		
7	8	繩文土器	深鉢	口縁部	—	II	—	—	—	—	—	○	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	—	ヘラケズリ	早期中葉
	9	石版式土器か?	深鉢	胴部	2IT	II	—	—	—	○	—	—	(外)明赤褐色 (内)にぶい黄褐色	—	—	早期中葉
	10	中原式土器か?	深鉢	底部	2IT	II	—	10.8	—	○	—	—	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	—	—	早期中葉
	11	押型文土器	深鉢	胴部	2IT	II	—	—	—	○	—	—	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄褐色	山形押型文	山形押型文	早期中葉



石器（第8～10図）

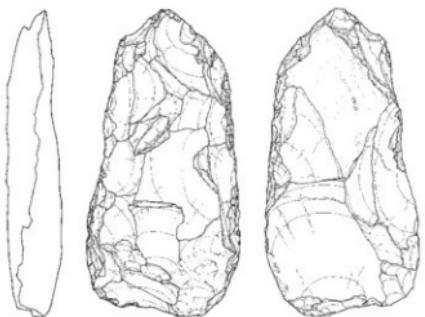
遺跡全体に層堆積が希薄であり、II層中に旧石器時代から古墳時代の遺物が一括に包含されるこ^トから、層位に基づき出土石器の時期区分を明確にしれない。よって形式学的に旧石器時代の遺物と認定し得たもの以外を、縄文時代の石器として報告する。中には弥生時代から古墳時代の遺物が含まれている可能性があることも付記しておく。

石鎌 12は黒色で不純物をほとんど含まない良質な黒曜石製の石鎌である。先端部分及び右脚部を大きく欠損し、全形を留めないが、基部からやや深く三角形状の抉りが入る凹型の二等辺三角形鎌とみられ、側刃部分は鋸歯状を呈する。

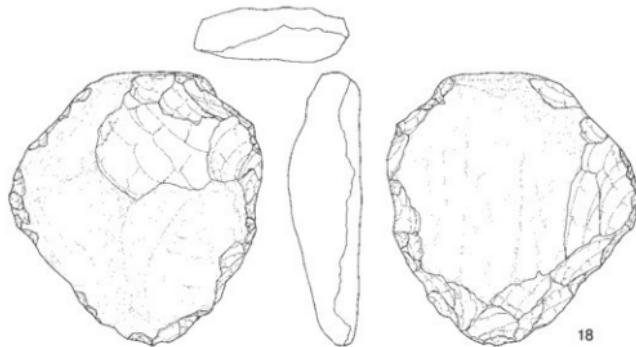
スクレイバー 13は青灰色で透明感がなく、不純物を少量含む黒曜石製で、剥離面を打面として剥出された「ノ」の字状の剥片を素材とする。素材剥片の左辺及び右辺に主要剥離面側から比較的平坦な剥離調整が加えられているほか、斜行する底辺部分にも小剥離が連続してみられる。新しいキズを除き、バテナの発達が顕著なことから旧石器時代の遺物である可能性も否定できない。

ドリル 14は透明感のある黒色で、白色の晶子がわずかに入る比較的良質な黒曜石製である。残核からの転用とも考えられ、厚みがあり端部は断面三角形状を呈する。端部付近を中心稜上には細かい剥離がみられ、やや摩耗を生じていることからドリルとして提示したが、端部に集中した剥離が重なって生じていることから彫器的な機能も想定される。

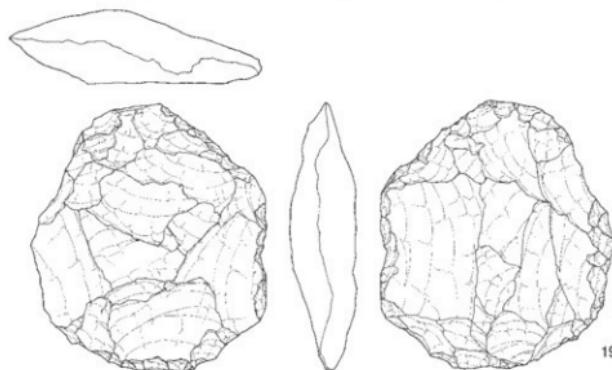
剥片 15は灰白色を呈する比較的良質なチャートの剥片である。不定形な剥片ではあるが丁寧に打面調整を施したのちに剥出され、左側辺下半に主要剥離面側からの連続した小剥離がみられ、刃部にはやや摩耗が生じている。スクレイバーとしての機能が想定されるが、加工痕のある剥片として図示した。



17



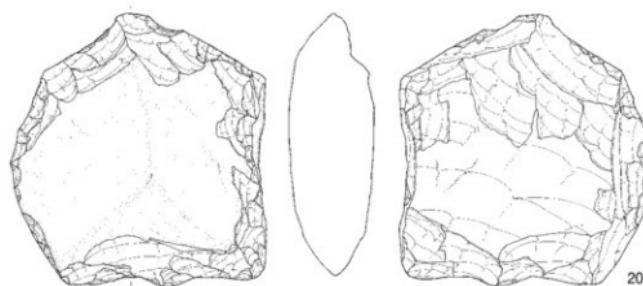
18



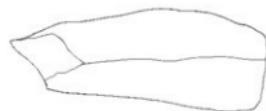
19



第9図 繩文時代の石器2

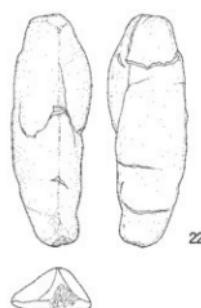


20



21

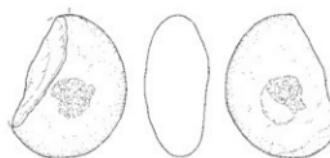
0 5cm



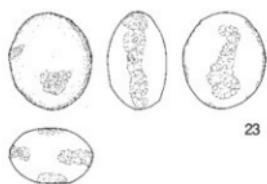
22



23



24



25

0 10cm



第10図 純文時代の石器3

石核 16は黒色を呈するあまり良質とは言えないチャート製の石核である。主に節理面から剥離した上面を打面に剥片の剥出が行われるが、打面調整は行われず、剥離痕からは不定形な剥片の剥出が窺われる。

石斧 17は灰色を呈し、部分的に白色の斑紋のある硬質頁岩製の石斧である。自然面を有する厚みのある剥片の周縁部分から粗い剥離で大まかな形状を整えた後、基辺及び側辺に細かい歯潰し状の調整が加えられる。一見、打製石斧を思わせるが、刃部周縁には剥離痕を切る形で明瞭に研磨が施されており、刃部を中心に研磨が加えられた磨製石斧である。その後、刃部先端方向から加わった力により、裏面側に大きく剥離が生じており、刃部が大きく失われている。

礫器 18は表裏に自然面が残るホルンフェルスの扁平な亜円碟で、周縁部分に粗い剥離が加えられている。19はやや風化の激しいホルンフェルスで周縁部分から求心的に剥離が加えられており、本来、石核であった可能性もある。上辺及び下辺には剥片剥離に伴うとみられる大きな剥離痕の後に、比較的小さな剥離が縁辺にみられることから礫器として図示した。20は背面に自然面を留める厚みのある剥片で、腹面の大きな剥離は摂理に沿っている。やや風化が激しいが、上辺と下辺に対向する剥離がみられ、山形を呈する上辺は階段状の剥離となっていることから、楔的な用途も考えられる。21はホルンフェルスの亜角碟で、左右の側面は自然面が残置され、山形を呈する上辺及び下辺に対向する剥離がみられることから楔的な使用も考えられる。

磨石・敲石類 22はやや不定形ながら断面三角形を呈する棒状の砂岩の亜円碟である。器面は稜上を含めやや平滑であるが研磨等の痕跡は認めない。下端部に敲打によるとみられるぶれが生じていることから敲石とした。23は断面が楕円形を呈する小型の砂岩円碟で、周縁部及び表裏面の一部に敲打痕が顕著に観察される敲石である。24は平面形がほぼ円形を呈する砂岩円碟で、表裏面の中心付近を中心に敲打痕が集中する敲石である。表裏とも凹みは生じておらず、表裏面上にわずかに研磨の痕跡がみられる。25は平面形が長円形を呈する砂岩円碟で、周縁部分に敲打痕が顕著に観察される。裏面中央にも敲打痕が集中してみられ、表面には磨面が認められることから磨石・敲石として使用されたものとみられる。

第2表 旧石器・縄文時代の石器観察表

種別 番号	掲載 番号	器種	層位	石材	出土区	出土構造	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	標高 (m)	備考
6	1	細石刃	I	黒曜石	21T		2.4	1.4	0.2	0.4	20.435	
	2	細石刃	I	黒曜石	21T		0.7	0.6	0.1	0.04	20.27	
	3	細石刃	I	黒曜石	21T		1.2	0.8	0.1	0.1	19.557	
	4	細石刃	I	安山岩	21T		0.9	0.8	0.2	0.1	19.729	
	5	調整剥片	I	黒曜石	21T		2.4	0.7	0.7	0.6	20.325	ファーストスボル
	6	調整剥片	II	片貝貝岩	-		2.1	2.5	1.1	3.7	19.487	
8	7	細石刃核	I	黒曜石	21T		2.8	2.2	1.6	7.8	20.375	
	12	石核	シラス上	黒曜石	15T		1.5	0.9	0.3	0.3	27.3	
	13	スクレイパー	-	黒曜石	18T		3.4	2.4	0.9	6.4	-	
	14	ドリル	I	黒曜石	1T		2.9	2.0	1.5	4.3	21.945	
	15	剥片	I	ナノート	13T		1.9	1.7	0.7	1.8	-	
9	16	石核	II	チャート	4T		2.5	3.5	1.7	12.7	20.671	
	17	石斧	II	貝岩	8T		12.6	6.3	2.3	202	19.614	
	18	稚器	II	ホルンフェルス	-		11.2	10.3	3.0	336	19.882	
	19	稚器	II	ホルンフェルス	8T		11.0	9.2	2.7	308	19.674	
	20	稚器	II	ホルンフェルス	5T		11.2	10.5	4.2	595	20.589	
10	21	稚器	II	ホルンフェルス	4T		6.2	6.8	2.0	101	20.606	
	22	磨石・敲石類	II	砂岩	-		14.2	4.9	2.6	182	19.447	
	23	磨石・敲石類	-	砂岩	-		5.9	5.1	3.4	145	-	
	24	磨石・敲石類	-	砂岩	4T		8.8	6.9	3.9	295	-	
	25	磨石・敲石類	-	砂岩	-		10.2	7.4	4.5	478	-	
12	26	石頭	安山岩		土塁1		23.5	22.3	5.0	2400	20.9	

第6節 古墳時代の調査

古墳時代相当の遺構は6T内に土坑が1基検出された。遺物では壺形土器、壺形土器が出土した。

1 遺構

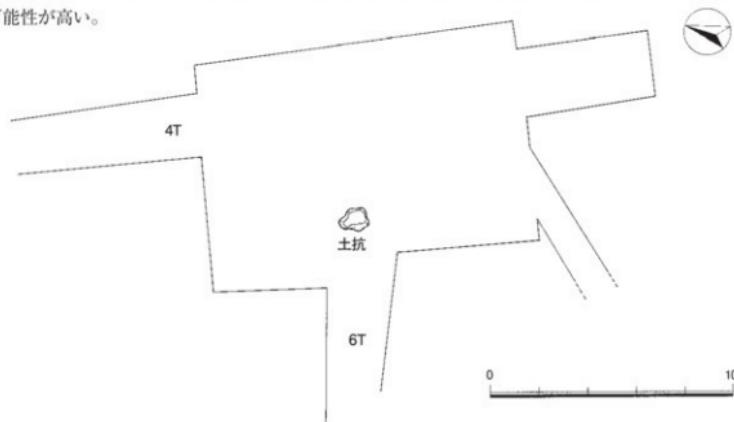
土坑 土坑が検出された6Tは、重機（バックホウ）で耕作土を除去すると、8・13T周辺で見られるII層（旧石器時代～古墳時代）が削平を受けており、極めて薄いIII層（無遺物層）直下に基盤層であるIV層（安山岩風化土）が露出する状況にあった。土坑1号は、III層上面で検出された。平面観は、長楕円形の長軸上に小さな円形が癒着する形状である。長径1.2m×短径0.9m×検出面からの深さ0.2mを測る。埋土は、やや粘性のあるにぶい褐色砂壤土（II層からIV層の混土か）で色調及び硬度等一様で、埋土は一枚である。

埋土中には、基盤層（IV層）に含まれる大小の安山岩の礫が無数に包含される。現代の土地改良事業に伴う重機による填土によると思われるが、埋土は極めて硬く締まっている。断面観は、深度が浅く、床面は比較的平坦である。埋土中には、用途が不明な鉄片が1点、安山岩製の石皿が1点包含される。26は石皿の資料である。本来は楕円状の器形をしていたと思われる。表面中程が摩滅により大きく凹み顕著な使用感が窺える。半分程破碎しており、破碎面が埋土に突き刺さるように斜立する。埋土中に含まれる多数の礫同様に、埋め戻す際に投げ込まれた印象を受ける。また、近年の土地改良事業工事の際に、本遺構に打ち込まれるよう紛れ込んだ可能性も否定できない。

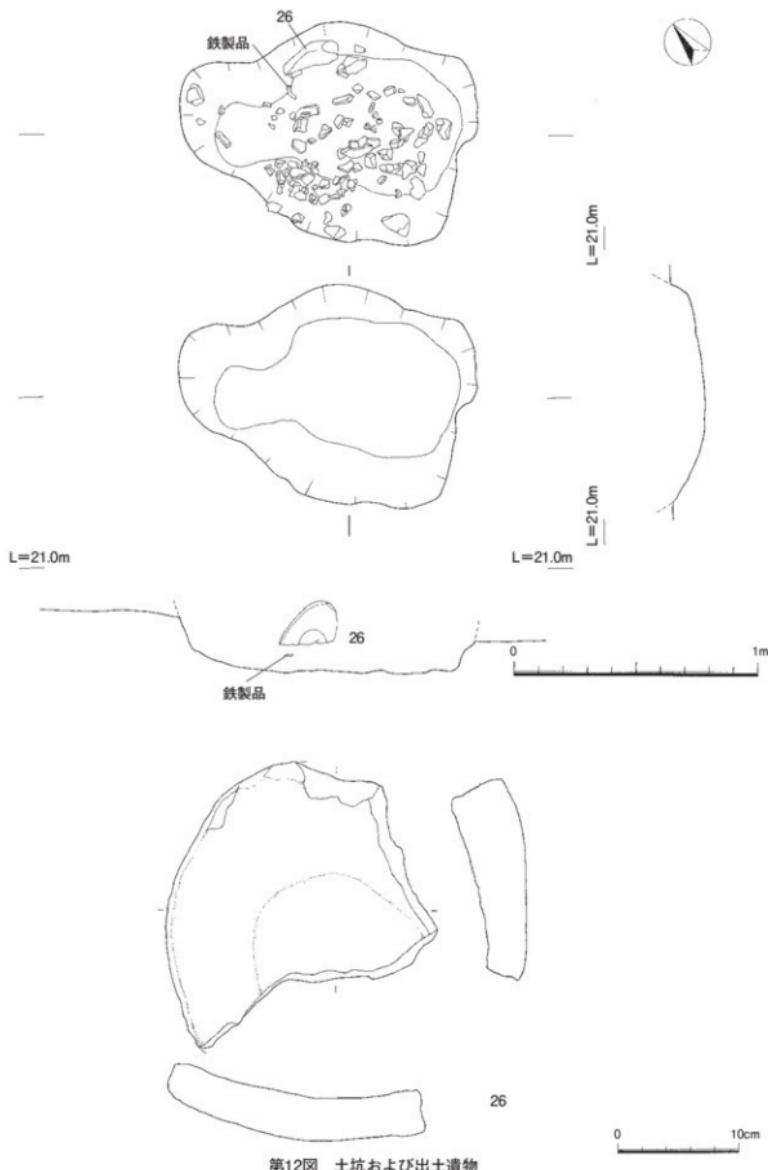
また、鋸がひどく小片のため固形できなかったが、ほぼ床着で鉄片が検出された。

本遺構の時期については、いくつかの可能性が考えられる。本遺跡の現況の土層状況では、黒褐色砂壤土は全く捉えられないが、本遺跡内からは黒褐色砂壤土を埋土とする溝状遺構が検出されており、本来は、本遺跡にも黒褐色砂壤土が堆積していたものと思われる。この黒褐色砂壤土の時期については、古跡が想定される溝状遺構1条の黒褐色砂壤土の埋土内に、内黒土師器が包含されていることから、少なくとも古代・中世を含む地層であると判断される。

これらの状況から、本土坑の時期については、埋土に黒褐色砂壤土を全く含まないことから、黒褐色砂壤土堆積以前（即ち、古代以前）から、鉄片を含む時期の間が比定され、弥生時代から古墳時代の間で考えられ、遺物の出土状況では弥生時代相当遺物は捉えられないことから、古墳時代の可能性が高い。



第11図 古墳時代の遺構位置図



第12図 土坑および出土遺物

2 遺物（第13図）

27は高環の口縁部である。内外面とも横方向のミガキが施される。環部腰部のステップが1条の沈線に略化され巡らされることから筒貫式土器の可能性を見る。28・29は壺形土器の胴部の破片であると思われる。いずれも外面に縱位のハケメが施され、29は内面にも横位のハケメが捉えられる。資料の欠損状況から、いずれも胴部下半の資料と思われる。30は先端が先尖で器厚が薄いことから壺の口縁部と判断した。

第7節 古代・中世の調査

古代・中世に比定される古道跡が4・6 T拡張部で1条、溝状遺構が8・21 T内で1条検出された。遺物では土器類の壺・壺や甕、青磁や白磁の碗・皿が出土した。

1 遺構

古道跡 古道跡が検出された4・6 T拡張部は、重機（バックホウ）で表土を除去すると、基盤層であるIV層（安山岩風化土）が露出する。本古道跡は、埋土が黒褐色砂壤土で、表土を除去したIV層上面で検出された。長さは約21.5m、幅は40～80cm、深さは約0.5mであり、北東－南西方向に極緩やかにS字状に延び、両縁端は緩やかにフェードアウトする。埋土は、黒褐色砂壤土で色調は一様で、1枚の埋土と判断される。埋土は全体的に一様に硬く締まっているが、一般的な道跡で捉えられる粘質土を敷設した硬化面は見いだせなかった。II・III層が削平を受けていることから、本古道跡の敷設面も削平されている可能性があり、埋土上位に硬化面が存在した可能性も否定はできない。埋土が硬い理由については、道としての使用による硬化以外に、土地改良事業に伴う重機による填圧が、表土直下の本遺構に影響を及ぼした可能性もある。埋土は1枚であり、埋土中には、拳大から小礫まで大小・形状間わず礫が多数混在し、床着含め、埋土中に浮遊するのも多い。礫は、基盤層に見られる安山岩の他、砂岩を含む。本遺構の南側数m程には、麓の集落と本遺構が位置す



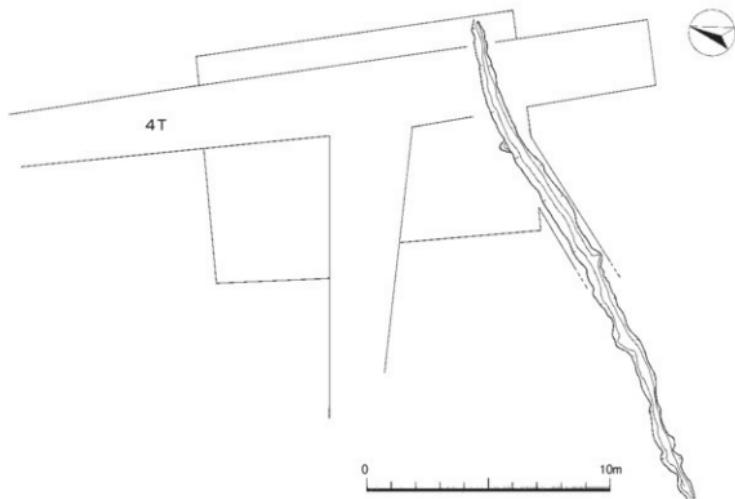
第13図 古墳時代の土器

第3表 古墳時代の土器観察表

種別 番号	掲載 番号	種別	器種	部位	出土区	層位	胎 土					色 調	焼成	調 整		備考
							石英	長石	角閃石	その他				外 面	内 面	
13	27	成川式土器	高環	口縁部	20T, 21T	-	○					(外) にぶい黄褐色 (内) にぶい黄褐色	良			
	28	成川式土器	甕	胴部	3T	II						(外) にぶい黄褐色 (内) にぶい黄褐色	良	ハケメ		
	29	成川式土器	甕	胴部	13T	II						(外) オリーブ黒 (内) 灰オリーブ	良	ハケメ	ハケメ	
	30	成川式土器	壺	口縁部	20T, 21T	II	○	○				(外) 橙色 (内) 橙色	良			

る台地上を繋ぐ里道が現存し、本遺構とほぼ並行する。道幅も本遺構に類似することから、この里道同様の古道跡の可能性で報告する。なお、古道跡の深さが約 0.5 m と比較的深いことから、歩行に適した深さを形成する必要性など、今後検討する必要がある。古道跡の形成時期は、埋土中に内黒土師器が 1 点包含されたことや他の溝状遺構から滑石製品が包含されたことから、古代・中世の時期が想定される。

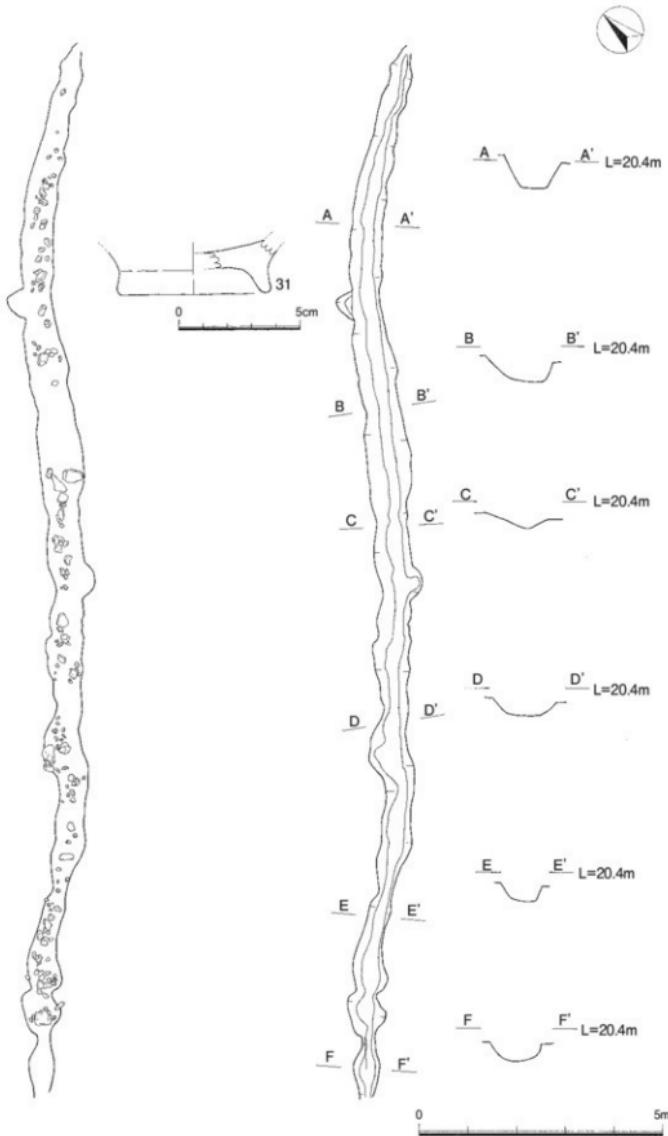
遺構内遺物 31 は古代比定の土師器塊の底部で、黒色土器 A 類である。内面は炭素で焼されており、黒色を呈する。ミガキは摩滅のためはっきりしない。



第14図 古道跡位置図



第15図 溝状遺構位置図



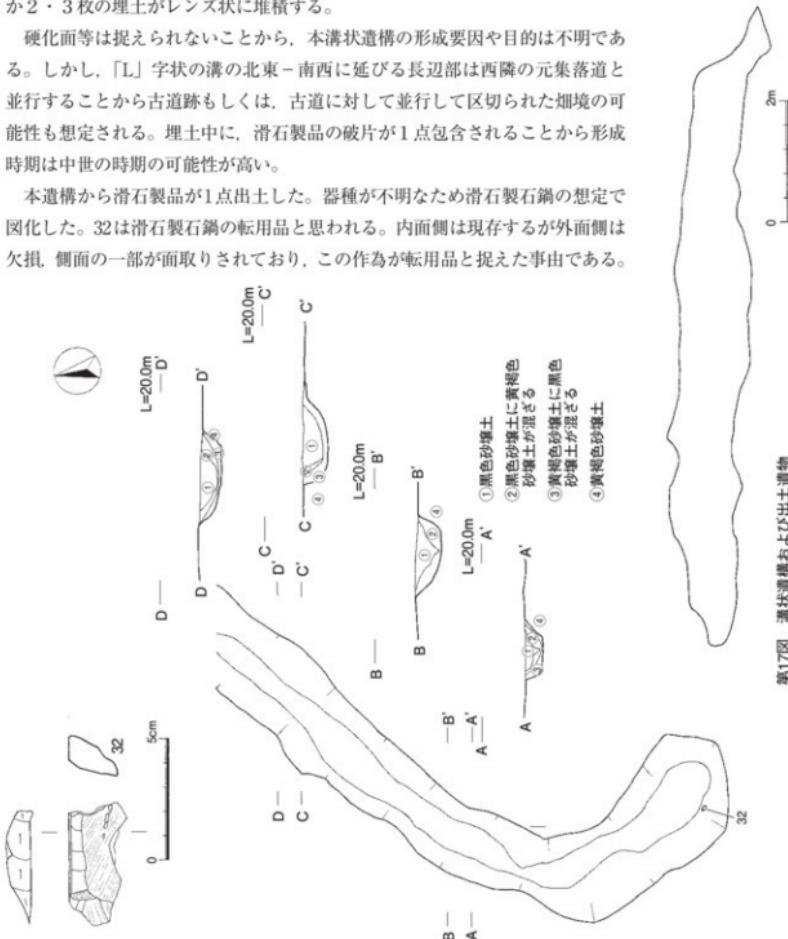
第16図 古道跡

溝状遺構

本溝状遺構は、8・21T拡張部内で、耕作土を重機（バックホウ）で除去した後のⅡ層面中に黒褐色砂壤土を埋土として検出された。「L」字状の溝が1条、直線状の溝が1条、分離した状態で検出されたが、同一の連続する溝状遺構であると判断した。長さは約11mで、幅0.7m程度である。極薄であるが埋土堆積が捉えられる「L」字状の溝に対して、直線状の溝の埋土は地山に滲む程度で、断面を捉えることができなかった。黒褐色砂壤土のはか2・3枚の埋土がレンズ状に堆積する。

硬化面等は捉えられないことから、本溝状遺構の形成要因や目的は不明である。しかし、「L」字状の溝の北東－南西に延びる長辺部は西隣の元集落道と並行することから古道跡もしくは、古道に対して並行して区切られた畠境の可能性も想定される。埋土中に、滑石製品の破片が1点包含されることから形成時期は中世の時期の可能性が高い。

本遺構から滑石製品が1点出土した。器種が不明なため滑石製石鍋の想定で図化した。32は滑石製石鍋の転用品と思われる。内面側は現存するが外面側は欠損、側面の一部が面取りされており、この作為が転用品と捉えた事由である。



2 遺物（第18図）

33～35は土師器である。33は壺または塢の底部である。内面が黒色を呈し、外面には煤が付着する。34・35は甕である。34は胴部片であり、内面調整にケズリを施す。35は底部である。外面には、ハケメが施される。内面調整は、器面が剥離し捉えられない。36～38は白磁碗の口縁部である。3点とも口縁端部が外側に屈折し、上端部は平坦につくられる。端部内面には稜がつき、先端は尖る。胎土は灰色みの強い灰白色を呈する。36の軸は外面腰部までかかる。38は内面の口縁部上位に極細の沈線が巡らされる。3点とも12世紀中頃から後半の時期の資料と考えられる。

39は皿であるが胎土はやや黄色がかかった色相を呈する。14世紀末から15世紀中頃の時期に相当するものと思われる。40は景德鎮窯系の菊花皿の底部片である。16世紀後半の時期が想定される。

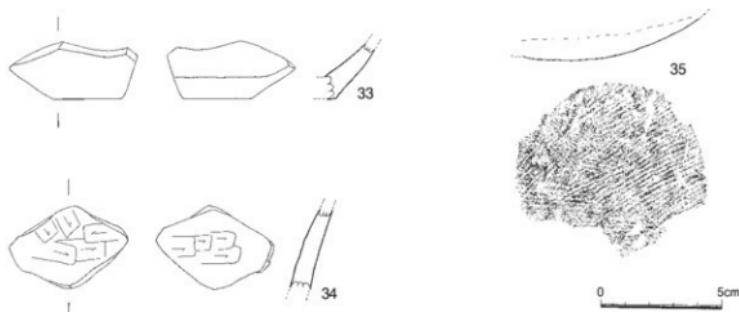
41～44は、同安窯系青磁の資料である。41、42は口縁部片であり41は1条の横沈線が捉えられる。外面の口唇部から1cm程下位は、わずかに内側に屈曲する。器種は不明である。42の外面には櫛目文が施される。43は体部である。外面には細かい縱位の櫛目文が施され、体部下位は露胎である。12世紀中頃から12世紀後半の製品と思われる。内面には2条の沈線による略化した花文がヘラ状の施文具で描かれる。44は腰部片である。体部外面には斜縱位の櫛目文が捉えられる。体部下位は無施釉である。内面にもわずかに櫛目文が捉えられるほか1cm程の米粒程の目跡を残す。

第8節 近世・近代の調査

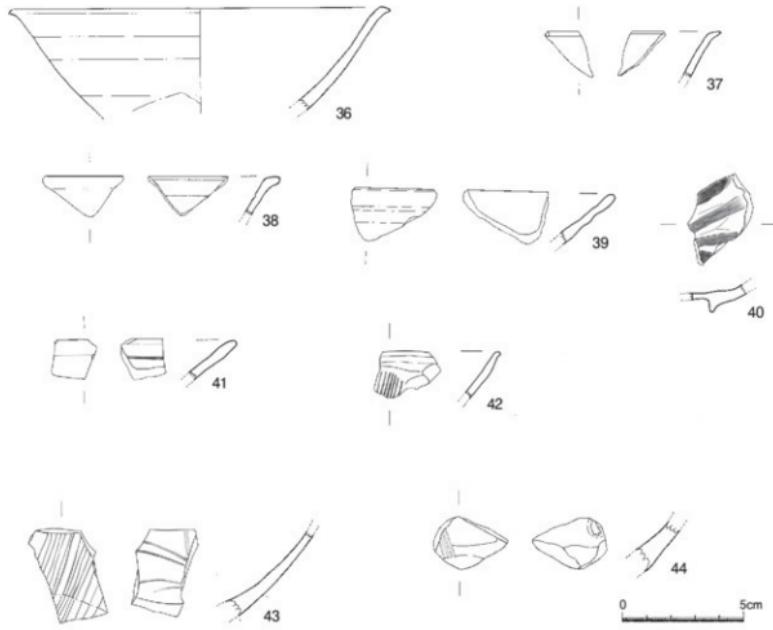
近世・近代に比定される遺構では21T内でピット群が検出された。遺物は染付や獸骨の加工品が出土した。

1 遺構

ピット群 13トレンチ拡張部（21トレンチ）内で、II層中に灰黒色砂壤土を埋土として15基検出された。P1～5の5基は、一見掘立柱建物跡が成立しそうであるが、柱穴間が約2mと短く、掘立柱建物跡の可能性は低いと考える。他の10基については、その位置に特に性質を見いだせず、用途・目的は不明である。埋土の色調は、表土に似るが、表土に密に含まれる径数mm程度の軽石がわずかに含むのみで、P15の埋土中に薩摩焼が含まれることから、近世に比定した。



第18図 古代・中世の遺物 1



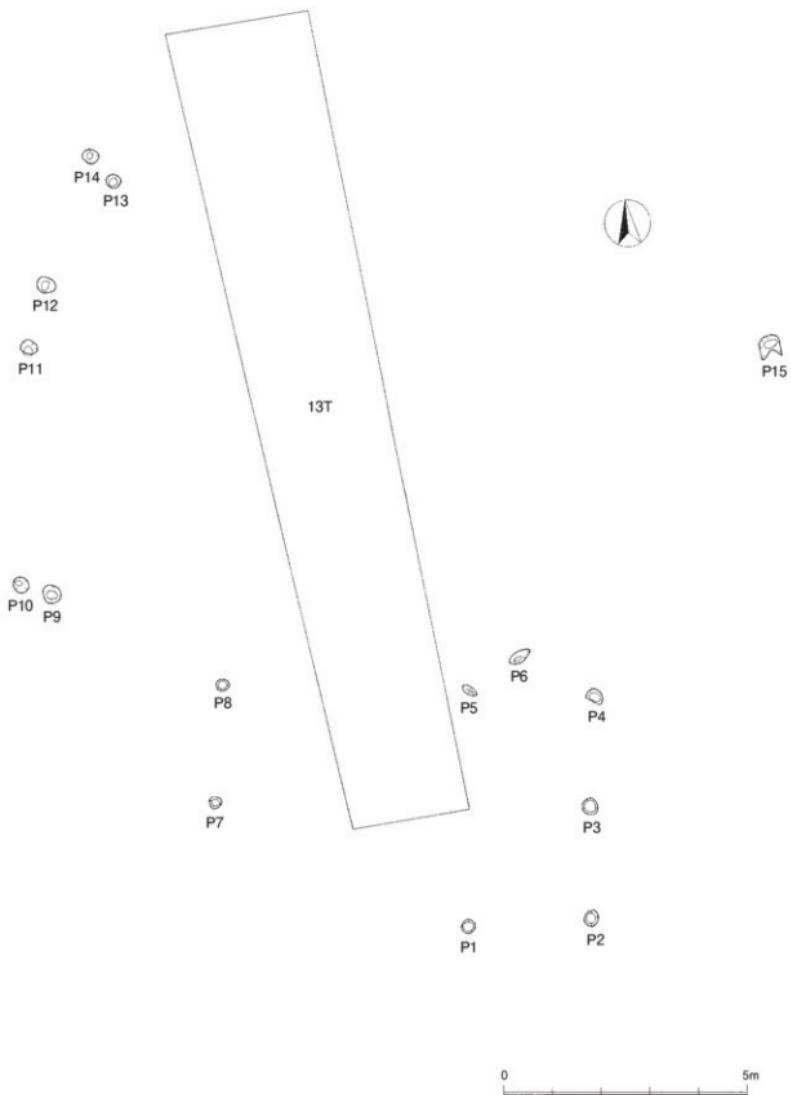
第19図 古代・中世の遺物2

第4表 古代・中世の遺物観察表1

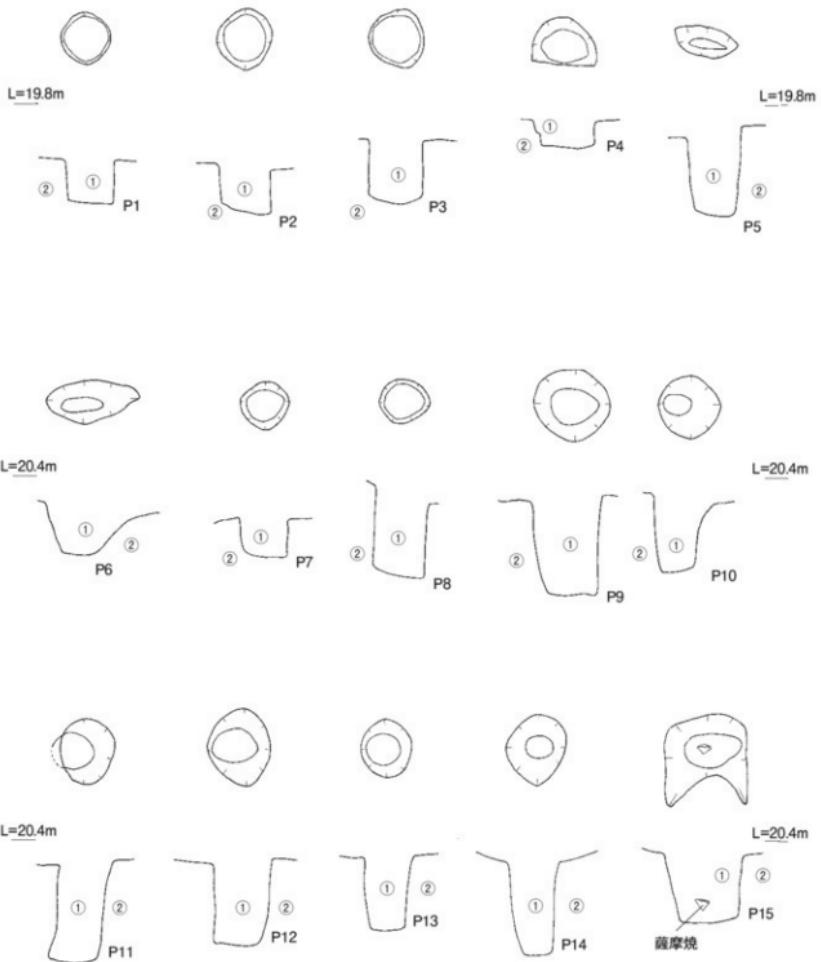
種別 番号	種別 番号	器種	部位	出土区	層位	胎 土				色 調	焼成	調 整		備考
						石英	長石	角閃石	その他			外面	内面	
16	31	土師器	塊	底部	古道跡内	-	○	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)黒色				
17	32	滑石製品	-	-	溝状造構内	-	-	-	-					
	33	土師器	壊または塊	底部	13T	II	○	-	-	(外)にぶい黄橙 (内)黒色	良			
18	34	土師器	塊	胴部	21T	II	○	-	○	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	良	ハケメ	ケズリ	
	35	土師器	塊	底部	8T	II	○	-	-	(外)明黄褐	良	ハケメ		

第5表 古代・中世の遺物観察表2

種別 番号	種別 番号	器種	產 地	出土区	層位	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬の種類	施釉部位	時 期	備 考
						口径	底径	器高					
	36	白磁	碗	-	-	II	15.6	-	灰黄色	透明釉	腹部以下無釉	12世紀中頃～後半	太宰府分類V類4
	37	白磁	碗	-	20T	II	-	-	灰黄色	透明釉	-	12世紀中頃～後半	
	38	白磁	碗	-	-	-	-	-	灰黄色	透明釉	-	-	
	39	白磁	皿	-	20T	II	-	-	灰白	透明釉	-	-	
19	40	白磁	皿	-	20T	II	-	-	灰黄色	透明釉	-	16世紀後半	
	41	青磁	-	同安窯系	20T	II	-	-	灰白	透明釉	-	-	
	42	青磁	-	同安窯系	21T	II	-	-	灰	透明釉	-	-	
	43	青磁	碗	龍泉窯系	13T	II	-	-	灰白	透明釉	-	-	
	44	青磁	-	-	-	II	-	-	灰オーラブ	透明釉	-	-	



第20図 ピット位置図



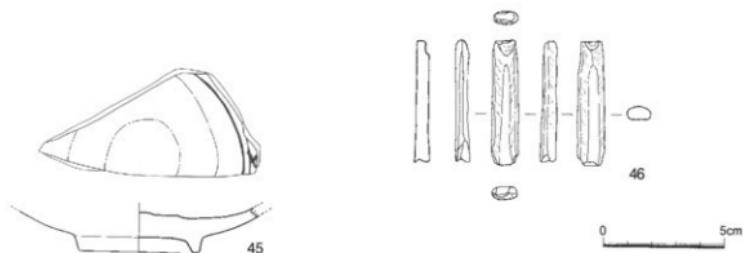
- ① 灰黒褐色砂壤土に径数ミリの
軽石がわずかに含まれる
- ② 黄褐色砂壤土



第21図 ピット断面図

2 遺物（第22図）

45は近世の遺物である。45は在地産の染付皿と思われる。見込みは蛇の目釉剥ぎである。46は近代の資料である。獣骨を加工してつくられている。歯ブラシの柄の可能性がある。



第22図 近世・近代の遺物

第6表 近世・近代の遺物観察表

掲図番号	掲載番号	種別	器種	産地	出土区	層位	法量(cm)			胎土の色調	釉薬の種類	施釉部位	時期	備考
							口径	底径	器高					
45	染付	皿	肥前系	—	II	—	5.0	—	—	淡褐色	透明釉	骨付釉剥ぎ	18世紀後半	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
22	46	—	—	—	ST	—	最大長50	最大幅1.1	最大厚0.55	—	—	—	—	—

第7表 ピット計測表

掲図番号	掲載番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
21	1	21	20	17	
	2	26	22	18	
	3	24	22	26	
	4	27	20	11	
	5	24	13	36	
	6	37	17	22	
	7	21	20	15	
	8	22	18	35	
	9	32	30	39	
	10	26	26	32	
	11	26	20	41	
	12	33	25	35	
	13	24	20	30	
	14	30	24	38	
	15	34	24	27	埋土中に薩摩焼

第9節 総括

陣之尾遺跡・陣之尾塚跡は、沖積及び隆起により形成された折多平野の東部（多田）と西部（折口）の間隙に舌状に張り出す山地の縁端に位置する。江戸時代に描かれた絵図によると、本遺跡の南西方向に西流する折口川の東端（筒井川と内田川の合流地点）まで入り江が食い込んでいる。その状況から本遺跡の周辺環境を推察すると、旧石器時代から近世以前のある時期までは、沖積平野で湿地帯を形成し、その後水田へ改変されたものと想定される。

(1) 旧石器時代

旧石器時代相当の遺構は検出されていない。遺物に関しては21トレンチから、細石刃、調整剥片、細石刃核が出土している。細石刃核は正面觀が楔型を呈する削片系の細石刃核であり、地域編年では比較的新しい段階に位置づけられるものである。石材は黒曜石であり、産地推定分析の結果、腰岳系の可能性を見る。

(2) 繩文時代

繩文時代相当の遺構は検出されていない。遺物は21トレンチ内を中心に出土し、土器に関しては、繩文時代早期中葉に比定される中原式土器及び山形押型文土器の胴部片が確認された。中原式土器資料は条痕文が胴部上位に限られており、既研究より中原式土器後半に相当すると考えられる。山形押型文土器は口縁部が外反することから、既知の土器編年の研究から石坂式土器に並行する時期が推定される。石器に関しては、打製石鎌やスクレイパー、ドリル、剥片、石核、磨製石斧、礫器、磨石、敲石が出土している。黒曜石の他、チャートや硬質頁岩、ホルンフェルス、砂岩などを素材とする。

(3) 古墳時代

古墳時代相当に比定される遺構として、土坑が1基検出された。埋土中に石皿及び鉄片を含む。用途・目的を推定する判断材料に乏しく特記できない。出土遺物に関しては、壺形土器の胴部、壺形土器の底部、壺形土器の口縁部が出土した。壺形土器の底部が丸底であった点や壺形土器の口縁部が外傾することから、既知の土器研究から辻堂原式土器、釜貫式土器の可能性が推察される。

(4) 古代・中世

古代・中世相当の遺構として、古道跡が1条、溝状遺構が1条検出された。不明瞭であるが埋土上面が硬化しており、隣接する現在の里道とほぼ並行することから古道跡と捉えた。掘り込みが約50cmと比較的深い。埋土中には礫が多く入り込んでいるが、道跡敷設に際し意図的に敷き詰めたのか、周間に散在していた基盤層の安山岩が自然に流れ込んだのかは不明である。なお、埋土中には黒色土器A類が含まれる。1条検出された溝状遺構は、深さが浅く現在の集落道とほぼ並行し斜角に向きを変える「L」字状を呈することから、中世の畠境の可能性で報告した。埋土中には滑石製石鍋の転用品が1点含まれていた。出土遺物は、遺構内遺物を含めて、古代相当の黒色土器A類の塊や坏、土師壺、中世相当の同安窯系青磁碗、白磁碗や皿、滑石製石鍋の転用品が出土した。

(5) 近世

近世相当の遺構では、ピット群が検出された。特に、掘立柱建物跡が推定される規則的な並び方は捉えられなかった。遺物としては、在地産染付皿、薩摩焼の小片、近代の歯ブラシの柄と思われるものが出土した。

上野畠遺跡・広段遺跡

第4章 上野畠遺跡・広段遺跡の調査

第1節 上野畠遺跡の調査

1 発掘調査の経過（日誌抄）

調査は以下の経緯で進行した。

平成21年8月3日

発掘器材搬入、オリエンテーション、環境整備。

8月4日

環境整備。表土剥ぎ。グリッド杭設定。トレーナー設定、掘り下げ。

8月5日～8月7日

トレーナー掘り下げ。トレーナー配置図作成。写真撮影。

8月10日

トレーナー掘り下げ。トレーナー設定。

8月11日～8月12日

トレーナー掘り下げ。溝状遺構写真撮影。写真、図面の整理。

8月17日～8月18日

トレーナー掘り下げ。グリッド杭設置。溝状遺構掘り下げ、実測、写真撮影。

8月19日～8月21日

トレーナー掘り下げ。トレーナー14設定。溝状遺構掘り下げ、実測、写真撮影。

8月24日～8月25日

トレーナー掘り下げ、写真撮影。B・C-3～5区の全面調査。B・C-3～5区センター図作成。

8月26日～8月28日

トレーナー掘り下げ、B・C-3～5区遺物取り上げ。B・C-3～5区遺構精査、写真撮影、センター図作成。

9月1日～9月4日

トレーナー掘り下げ。溝状遺構掘り下げ。F-3～5区I・II層掘り下げ。土坑1掘り下げ、実測、写真撮影。

9月7日～9月10日

I・II層掘り下げ。硬化面検出、平板実測。ベルトコンベア設置、使用開始。

9月14日～9月18日

I～IV層掘り下げ。C-4区下層確認用トレーナー土層断面図作成。B・C-2・3区下層確認トレーナー写真撮影、位置図作成。C-4区下層確認トレーナー土層断面写真撮影、位置図作成。D-4・5区遺物出土状況図作成。

9月24日～9月28日

I～IV層掘り下げ。遺物出土状況図作成、遺物取り上げ。センター図作成。

10月1日～10月2日

IV層上面センター図作成。図面、遺物、写真整理。

10月5日～10月16日

I~IV層掘り下げる。C~E-6・7畝状遺構埋土除去。土層断面図作成。遺物出土状況図作成。土坑2,3号写真撮影、掘り下げる。住居跡1号埋土掘り下げる。

10月19日

ピット埋土掘り下げ。ピット配置図作成。

10月20日～10月21日

II～IV層掘り下げ。炉状遺構1号平面実測、写真撮影。炉状遺構2号埋土掘り下げ、写真撮影。ピット集中区平面、断面実測。堅穴住居跡掘り下げ。空中写真撮影準備（調査区内の清掃）。

10月22日~10月23日

IV層掘り下げ。竪穴住居掘り下げ。ピット掘り下げ。空中写真撮影。C～E-5～7区IV層上面コンター図作成。ピット位置図作成。

10月26日～10月28日

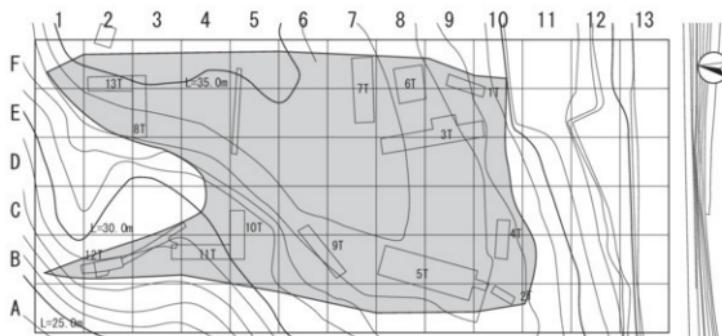
豎穴住居掘り下げ。埋め戻し。調査終了後の環境整備。



第1図 上野畠遺跡・広段遺跡位置図 (1/25,000)

2 発掘調査の方法

上野畠遺跡は標高約35mの丘陵地に位置し、遺跡の南側には宅地並びに水田や畑が広がっている。東南方向には鷹首山、南方向には城山があり、高松川が流れている。調査は調査区内の草払い等の環境整備を行った後、道路建設用センター杭のNo.3とNo.4を基準に、10m間隔の区画を設定した。グリッドについては、西から東へA・B・C・・・列、北から南へ1・2・3・・・列とした。その後、約3mの幅の先行トレンチを11か所設定し、重機で表土を剥いだ後、人力（山鋤、ジョレン、ねじり鎌）でⅡ層からⅣ層上面まで掘り下げ、写真撮影・測量・遺物取り上げ等を行った。



第2図 地形図及びグリッド配置図

3 層序

今回の調査にあたって基本的な層位を右図のようにまとめた。

I層は表土である。II層は、腐植の入る灰褐色壤土で縄文時代から中世の遺物包含層である。III層は、シラスの堆積層である。IV層は、約3~5cmの大きさの礫を多く含み、遺跡全体に広がっている。V・VI層は遺跡の北西部に堆積していた。

I層	耕作土 灰褐色壤土
II層	腐植土 灰褐色壤土 遺物包含層
III層	シラス 黄褐色火山灰土
IV層	礫を含む粘土 赤褐色埴土
V層	黄褐色シルト
VI層	暗紫灰色溶結凝灰岩

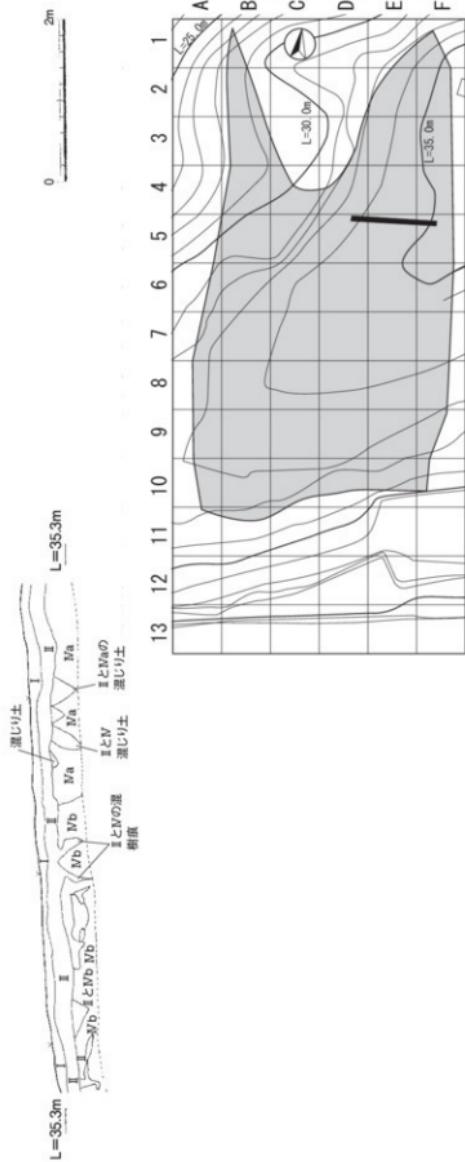
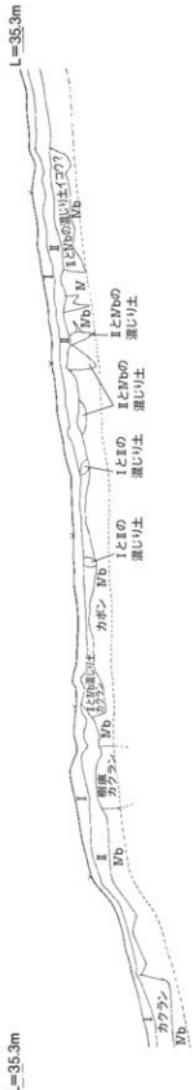
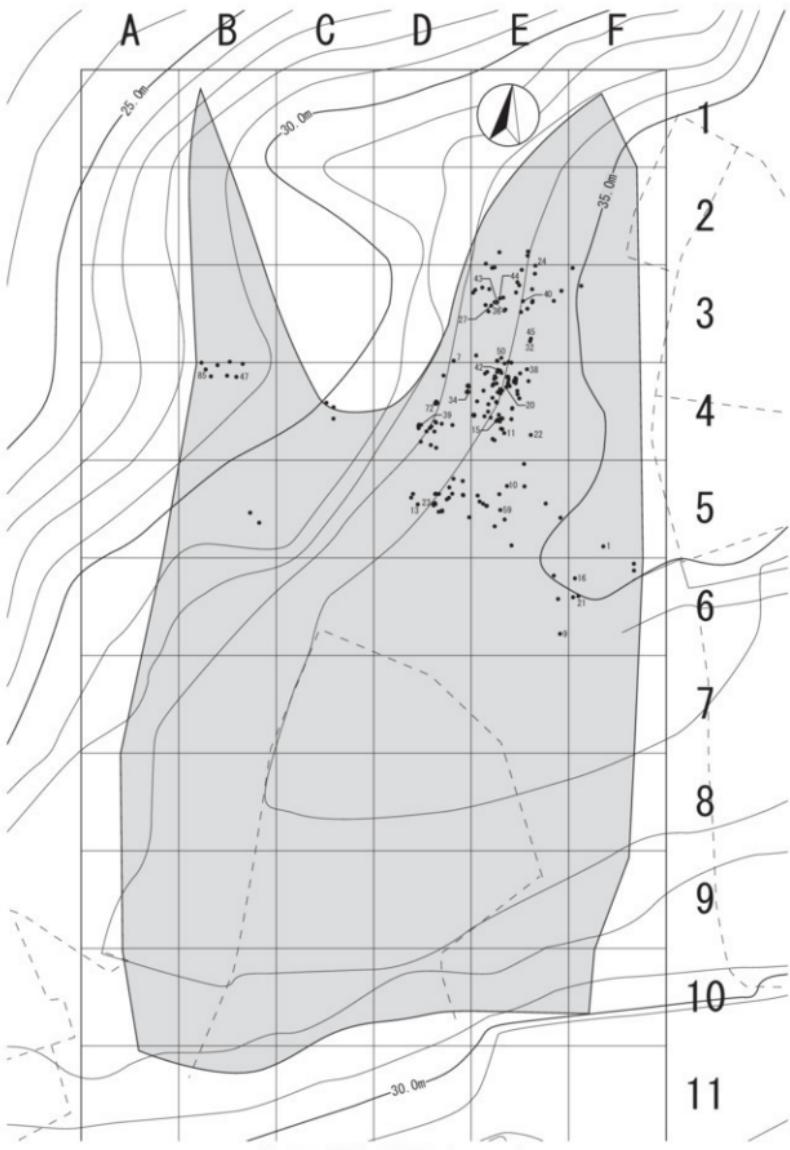


図3 土層断面



第4図 遺物出土状況図 ($s=1/500$)

4 縄文時代の調査

縄文時代相当の遺構は検出されなかった。遺物は石鎌、ドリル、楔形石器、剥片、石斧、磨石・敲石等の石器が出土した。

(1) 遺構 縄文時代相当の遺構は検出されなかった。



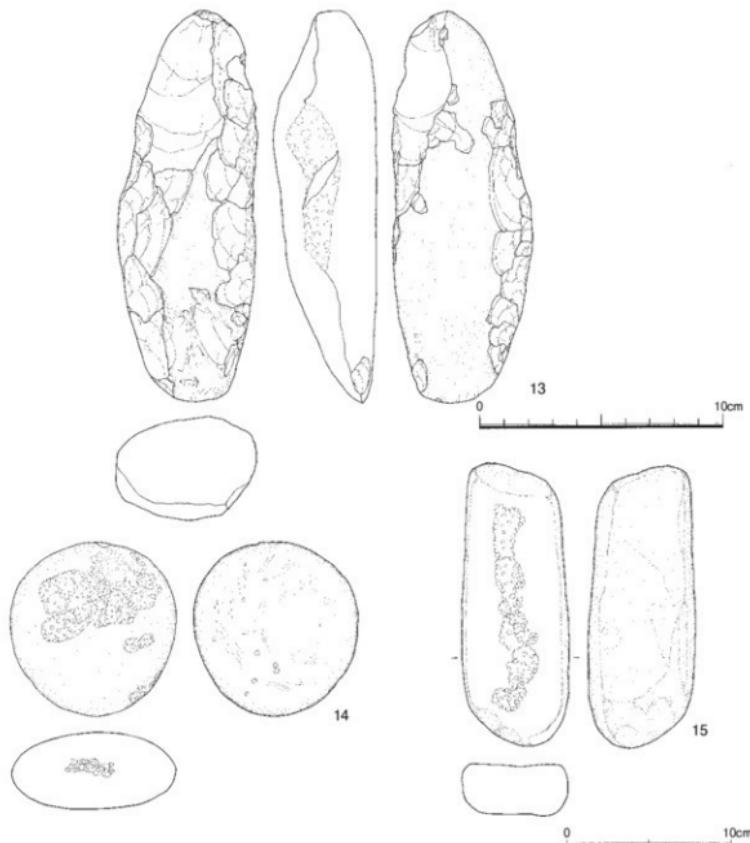
第5図 縄文時代の石器 1

(2) 遺物

石器（第5・6図）

遺跡全体に層堆積が希薄であり、層位に基づき出土石器の時期区分を明確にしえないことから、縄文時代以降の石器として一括した。

石鎌 1は黒灰色の良質なチャート製で、主に基部及び左右側辺部のみに調整が施され、主要剥離面が比較的大きく残置される。基部に浅い三角形状の抉りが入り、左右の脚部が非対象となる凹基の石鎌で、先端部を欠損する。2は珪質分の少ない黒色のチャート製で、右脚部を欠損する平基の石鎌である。左右両側辺の調整は粗略で厚みを取りきれていないことから未製品の可能性もある。



第6図 縄文時代の石器2

3は不純物をほとんど含まない黒色で良質な黒曜石製の石鎌である。先端部分から右側辺部及び右脚部を大きく欠損し、全形を留めない。基部からやや深く内弯する抉りが入る凹基の石鎌で、脚部は丸みをもつ。4は黒色不透明で白色の不純物をわずかに含む比較的良質な黒曜石製の石鎌で、左右両脚部とも欠損する。そのため全体の形状は不明であるが、両側辺は丁寧な調整が施されている。5は灰黒色で良質な安山岩製の平基の石鎌で、先端部及び左右の脚部を欠損する。

ドリル 6は灰黒色で良質なチャート製で、素材の形状を生かしながら稜上から細かい調整を施して錐部を作り出す。端部には使用による細かい剥離が生じ、稜上にはわずかに摩耗がみられる。

楔形石器 7は黒色でやや透明感があり白色の不純物を多く含む黒曜石製で、上下・左右に対向する剥離がみられ、上・下辺にはややぶれが生じ断面形は紡錘状を呈する。

剥片 8は珪質分の少ない黒色のチャート製で自然面を打面に剥出された剥片で、下辺部分には折れが生じている。規則的な二次加工はみられないものの、両側辺には微細な剥離が生じている。9も珪質分の少ない黒色のチャート製で節理面を打面に剥出されている。10も8・9と同様のチャートのやや厚みのある剥片である。11は良質な珪質頁岩製の大型の剥片である。背面は摺理に沿って剥離しており、主要剥離面はバルブがやや発達し、末端にはヒンジフラクチャーを生じている。

石核 12は黒色半透明で白色の不純物をやや多く含む黒曜石で、自然面は擦りガラス状を呈する。自然面の残存状況から母岩は小さく角礫状を呈するもので、剥出された剥片は小型の不定形なものとみられる。

石斧 砂岩の棒状の亜円礫を素材とし、素材礫の長軸の両端及び両側辺から粗い剥離で形状を加工したのち、側辺に部分的に敲打調整を加えている。刃部付近を研磨して強凸弱凸刃の円刃に仕上げられた磨製石斧で、身部基部より甲高となり側面形状が靴型を呈する。

磨石・敲石類 14は砂岩円礫で、背面及び周縁の一部に敲打の痕跡がある。裏面は緩やかな凸面を呈する比較的顯著な磨面をもつ、磨石、敲石である。15はやや不定形な扁平・棒状の砂岩礫で、正面の平坦面の中央部付近に連続して敲打痕の集中部があり、わずかに凹みが生じている。

第1表 繩文時代の石器観察表

掲載 実測 番号	掲載 番号	器種	層位	石材	出土区	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	標高 (m)	備考
	1	石鎌	IVa上	チャート	F-5	15	14	0.3	0.5	34.96	
	2	石鎌	-	チャート	-	11	16	0.4	0.8	-	
	3	石鎌	表土	黒曜石	E-6	23	19	0.5	1.7	-	
	4	石鎌	-	黒曜石	-	13	0.9	0.4	0.3	-	
	5	石鎌	-	安山岩	-	15	18	0.3	0.9	-	
5	6	ドリル	-	チャート	E・F-3	29	17	1.1	40	-	
	7	楔形石器	IV	黒曜石	D-3	25	20	0.8	41	33.035	
	8	剥片	-	チャート	E・F-3	22	22	0.4	3.5	-	
	9	剥片	IV a 上	チャート	F-6	27	29	0.6	3.8	34.755	
	10	剥片	II	チャート	E-5	24	21	0.9	5.1	34.445	
	11	剥片	II	頁岩	E-4	44	46	1.0	28.1	34.08	
	12	石核	表土	黒曜石	D-4	15	30	1.6	4.3	-	
	13	磨製石斧	II	砂岩	D-5	160	58	43	4460	33.83	
6	14	磨石・敲石類	IV a	砂岩	D-7	107	100	4.7	6850	34.136	
	15	磨石・敲石類	II	砂岩	E-4	173	66	3.2	6350	33.96	

5 古墳時代の調査

- (1) 遺構 古墳時代相当の遺構は検出されなかった。
- (2) 遺物 (第7図)

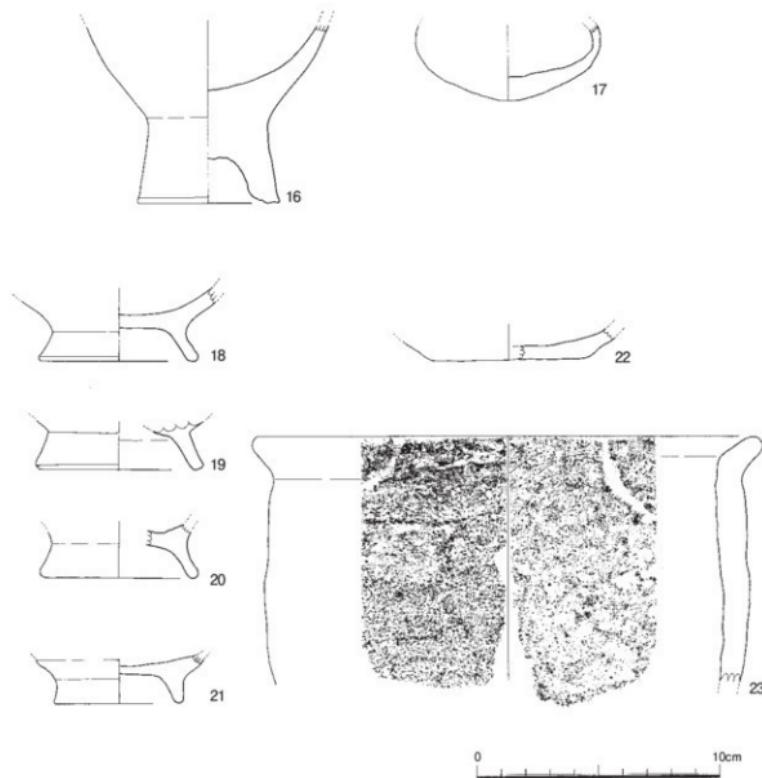
16・17は成川式土器である。16は壺形土器の底部、17は壺形土器の底部である。2点とも全体的に摩滅が激しく、器面調整等の詳細は不明である。

6 古代の調査

- (1) 遺構 古代相当の遺構は検出されなかった。
- (2) 遺物

土器 (第7図)

18～22は古代の土師器である。5点とも摩滅が激しく器面調整等の観察が難しい資料である。18～21は椀の底部である。18～20は高台がバチ状に開き、体部との境は「く」の字状を呈する。

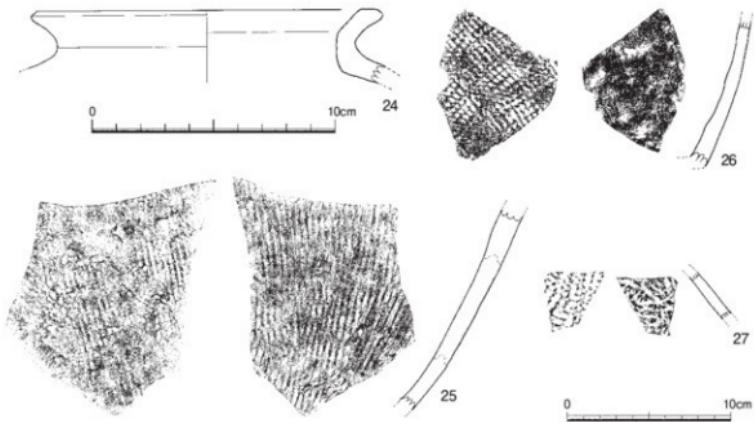


第7図 古墳時代・古代の土器

体部中位から口縁部にかけては残存していないが、逆ハの字状に開くものと思われる。21は高台の開きがやや弱く、高さも低い。22は壺の底部である。底面の切り離しは回転ヘラ切りである。23は甕である。頸部から口縁部は短く、外側に強く屈曲する。摩滅が激しいため鮮明ではないが、内面は斜位のヘラ削りが施され、口縁部下位には稜が残る。また内面口縁部下位には、煤も観察される。

須恵器（第8図）

24～27は須恵器である。24は甕の口縁部である。口縁部は短く、頸部で外側に強く屈曲する。内外面はナデ調整が施される。胎土の色調は一般的な暗灰色ではなく、鈍い橙色を呈する。25・26は甕の胴部である。2点とも胎土の色調は、灰白色を呈する。25は外面に格子目タタキ、内面に平行タタキの痕跡が残る。26・27は壺の胴部から底部であるが、底面は欠損している。胎土の色調は灰白色を呈する。外面は格子目タタキが観察されるが、胴部下位は横ナデがみられる。内面はタタキ成形後横ナデが施されるが、一部にあて具の痕跡が残る。



第8図 須恵器

第2表 古墳時代・古代の土器観察表

序号	銘文 番号	種別	器種	部位	出土区	層位	法量(cm)			胎土			色調	機成	調整		備考
							口径	底径	高さ	石英	長石	角閃石	その他		外面	内面	
7	16	波川上ノ器	甕	底部	F-6	IVa上	-	5.8	-	○				褐色	ナデ		
	17	波川上ノ器	壺	底部	E-3	II	-	5.2	-		○			明黄褐色	良	ナデ	赤色の石粒含む
	18	土師器	甕	底部	E-3'4	II	-	6.5	-	○				浅黄褐色	良	ナデ	赤色の石粒含む
	19	土師器	甕	底部	D-3'6	II	-	7.0	-	○				浅黄褐色	良	ナデ	赤色の石粒含む
	20	土師器	甕	底部	E-4	II	-	6.6	-	○				にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	赤色の石粒含む
	21	土師器	甕	底部	F-6	IVa上	-	0.8	-	○				(外) 明黄褐色 (内) 明褐色			
	22	土師器	壺	底部	E-4	II	-	6.2	-	○				浅黄褐色	ナデ	ナデ	
	23	土師器	甕	口縁~胴部	E-4	II	21.0	-	-	○				(外) 明赤褐色 (内) にぶい褐色	ナデ	ナデ	
8	24	須恵器	甕	口縁部	E-3	II	14.4	-	-					にぶい黄褐色			
	25	須恵器	甕	胴部	E-4	II	-	-	-					灰黄褐色	格子目タタキ	平行タタキ	
	26	須恵器	甕	胴部	D-4	IVa	-	-	-					灰色	格子目タタキ		
	27	須恵器	甕	胴部	E-3	II	-	-	-					灰白色	格子目タタキ		

7 中世・近世の調査

中世・近世相当の遺構は土坑、炉状遺構、掘立柱建物跡、ピットが検出された。また、中世の遺物としては青磁、青花、陶器、瓦質土器、中世須恵器、滑石製品が、近世の遺物としては陶器が出土した。

(1) 遺構

豎穴遺構（第10図）

D-5～6区で検出された。長軸約4m、短軸約3m、検出面からの深さは約20cmである。埋土は主に黄褐色土で炭化物を含んでいる。床面に2基の柱穴が確認された。径は25cmから30cmで、深さは10cm程度である。柱穴の埋土は灰黄褐色土で炭化物を多く含んでいる。床面に硬化面は確認できなかった。また、床面に炭化物が広がっていたものの遺構内遺物が無く、その時代を特定することはできなかった。

土坑（第11図）

B-2区で検出された。長径約1.6m、短径約1.4m、検出面からの深さ約30cmである。埋土は單一で主に褐色土である。埋土中から寛永通宝1点が出土した。床面は粘質でありやや堅く締まっている。

1号炉状遺構（第12図）

南西斜面部のE-3区で検出された。直径約1mの円形で検出面からの深さは約10cmである。燃焼部の床面が焼土化している。埋土は單一の暗褐色土である。周囲にピット等の建物の痕跡は確認できなかった。

2号炉状遺構（第13図）

南西斜面部のF-3区で検出された。長径約1m、短径約80cm、検出面からの深さは約10cmである。燃焼部の床面の焼土化した部分がわずかに残る。埋土は單一の暗褐色土である。周囲にピット等の建物の痕跡は確認できなかった。

1号掘立柱建物跡（第14図）

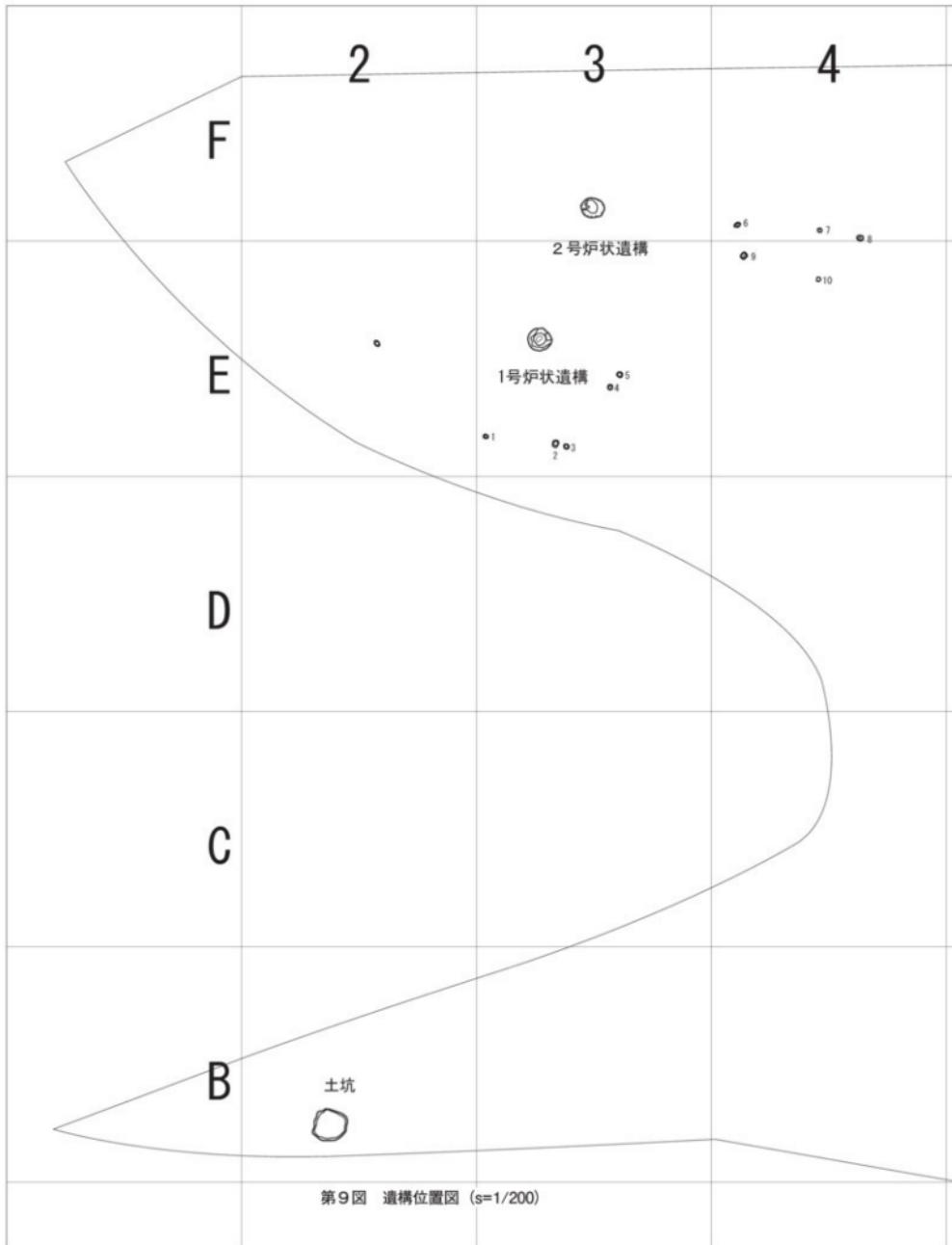
F-7区で検出された。規格は2間×2間の建物である。大きさは4m×2.8mである。柱穴の検出面からの深さは最も深いもので48cm、浅いもので9cmである。柱穴の埋土の色調はⅡ層に似る。柱穴内から遺物は出土しなかったが埋土の状況、周辺の遺物の出土状況から中近世の時期の可能性で考えたい。

2号掘立柱建物跡（第15図）

E・F-7区で検出された。規格は2間×5間の建物で北西側に庇を持つものである。大きさは9.6m×5.2mである。柱穴の検出面からの深さは最も深いもので48cm、浅いもので8cmとなるが残存値で20～30cm程度のものが多い。柱穴の埋土の色調はⅡ層に似る。柱穴内から遺物は出土しなかったが埋土の状況、周辺の遺物の出土状況から中近世の時期の可能性で考えたい。

ピット（第16～19図）

1・2号住居周辺から28基のピットが検出された。ピットの位置に特定の性質を見いだせず、用途・目的は不明である。埋土の色調はⅡ層に似る。いずれのピットも遺構内遺物は検出されなかつたが、埋土の状況、周辺の遺物の出土状況から中近世の時期の可能性で考えたい。



5



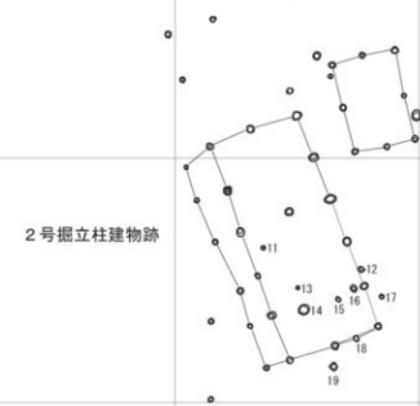
6

2号掘立柱建物跡

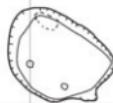
7

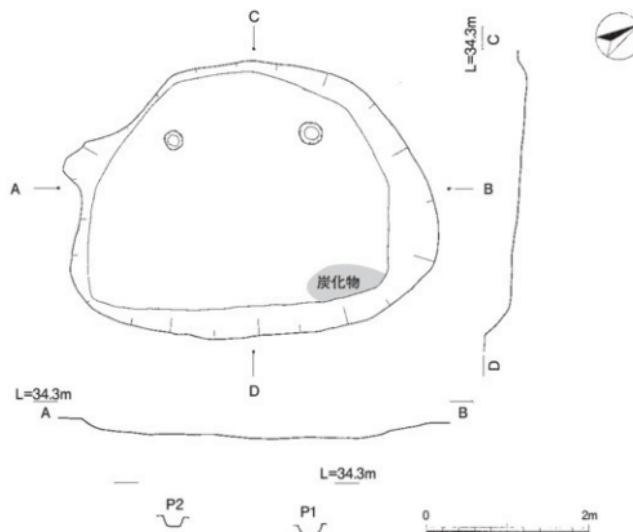
1号掘立柱建物跡

8

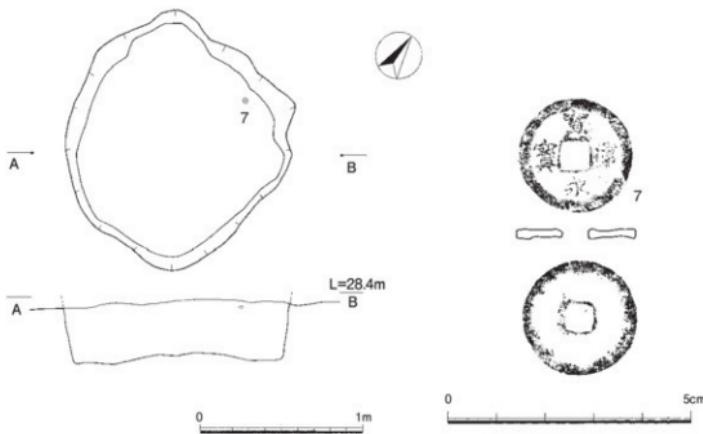


竖穴状遺構

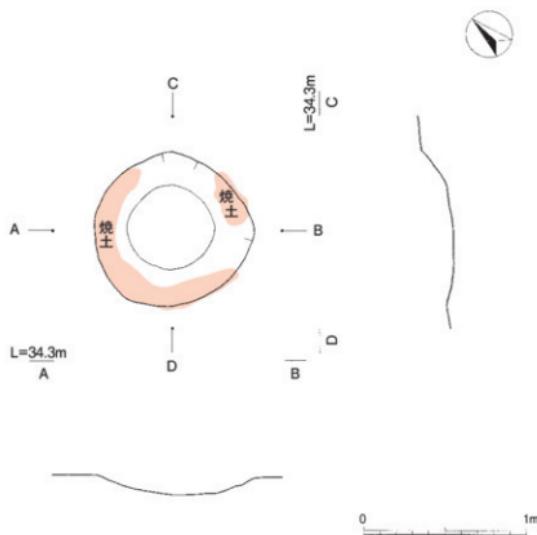




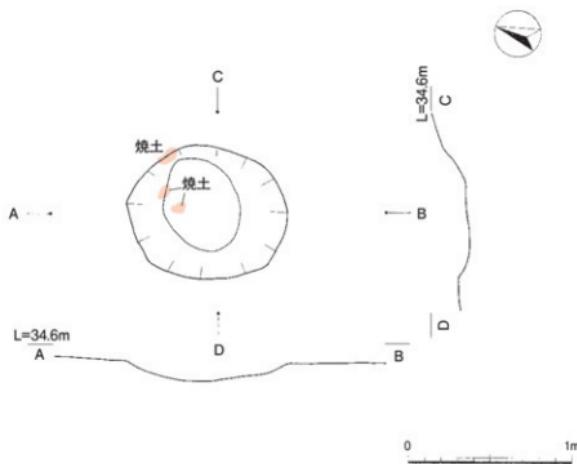
第10図 竪穴状遺構



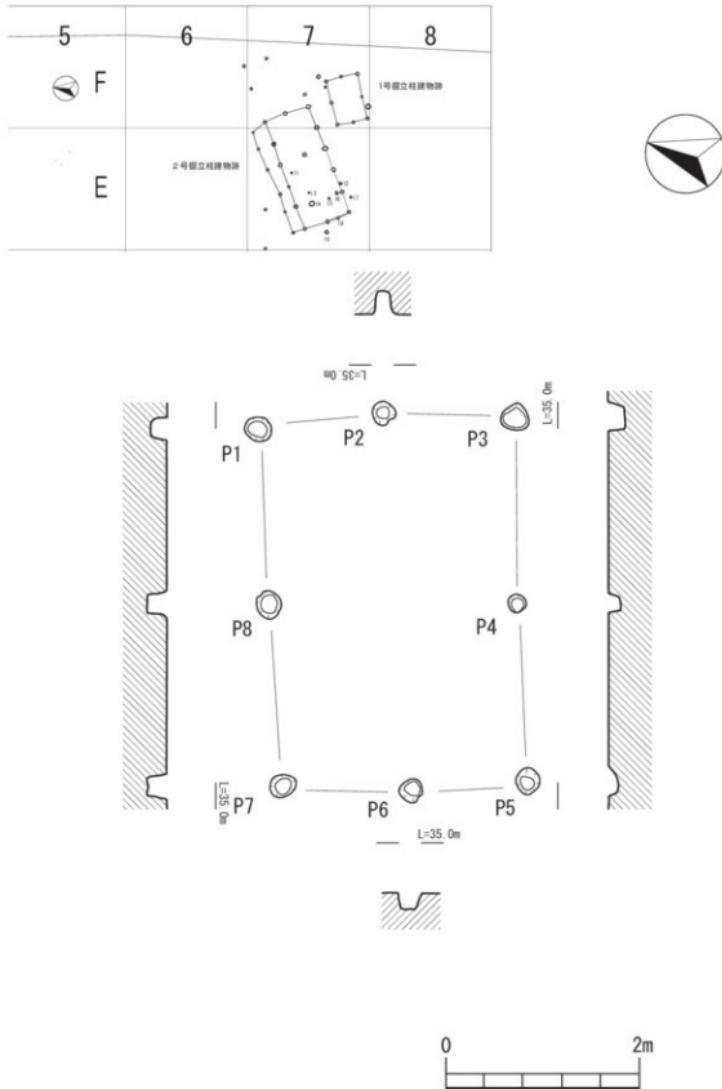
第11図 土坑および出土遺物



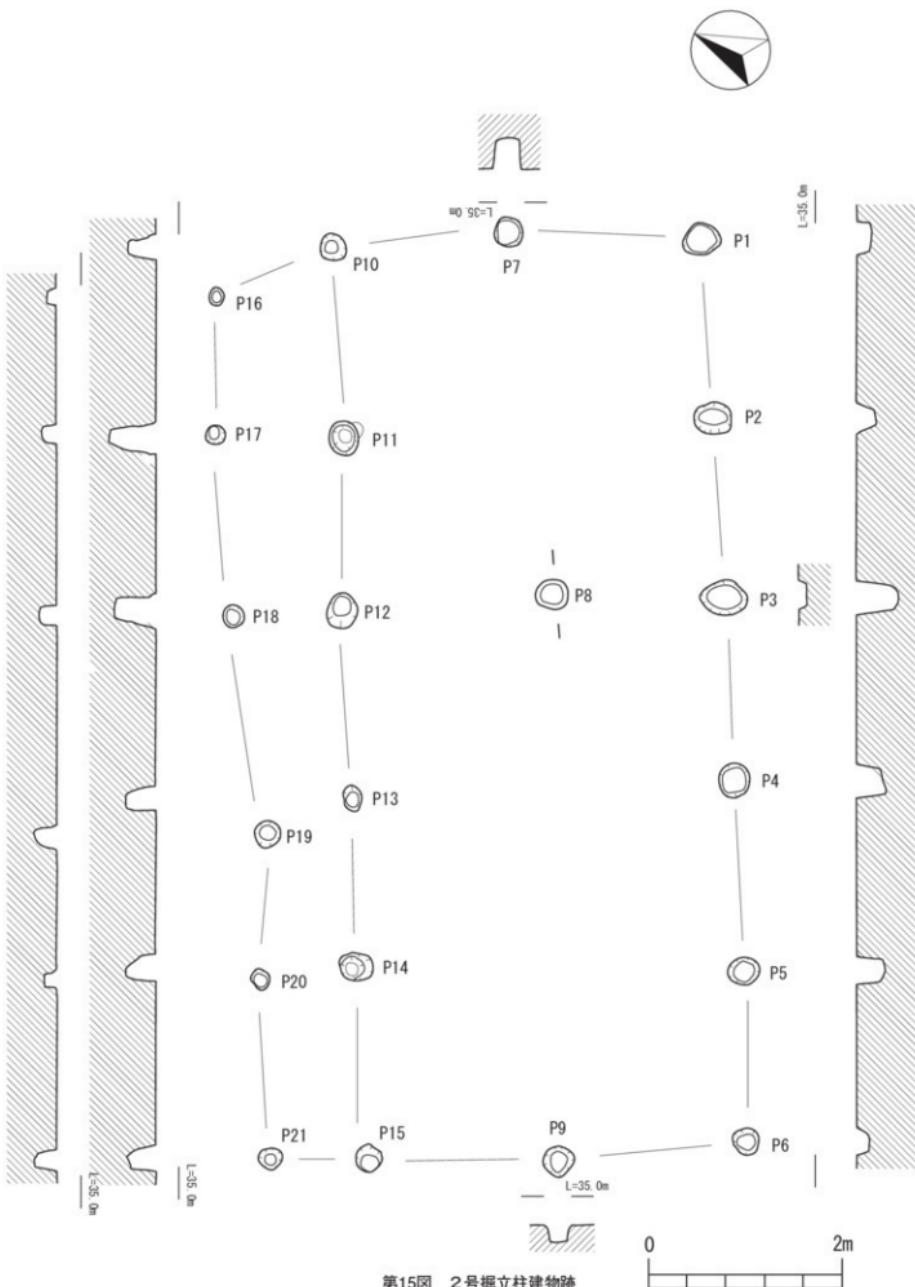
第12図 1号炉状遺構



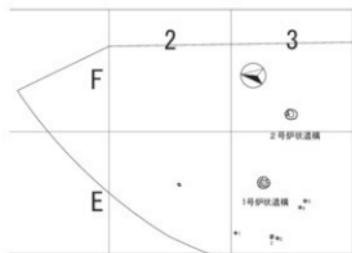
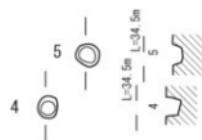
第13図 2号炉状遺構



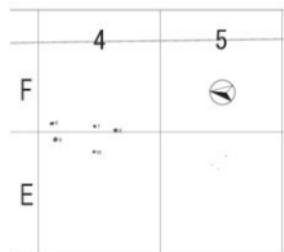
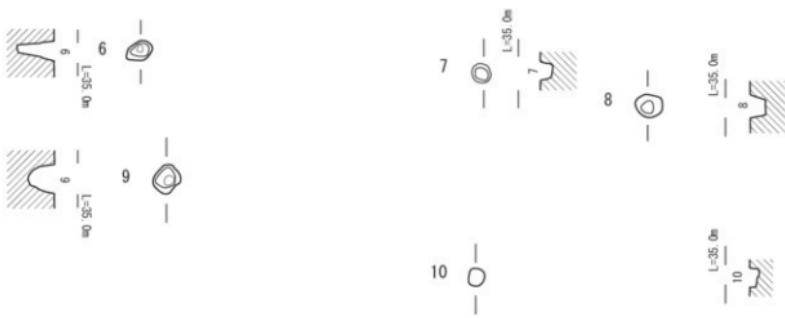
第14図 1号掘立柱建物跡



第15図 2号掘立柱建物跡

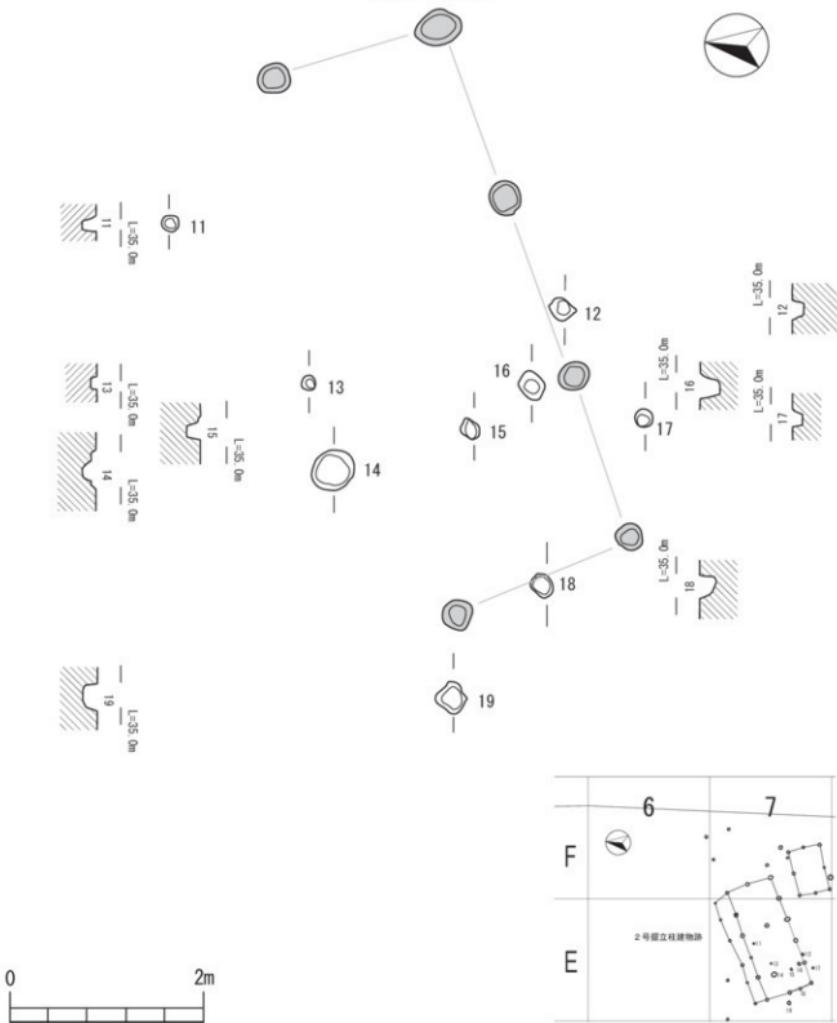


第16図 ピット位置図 1

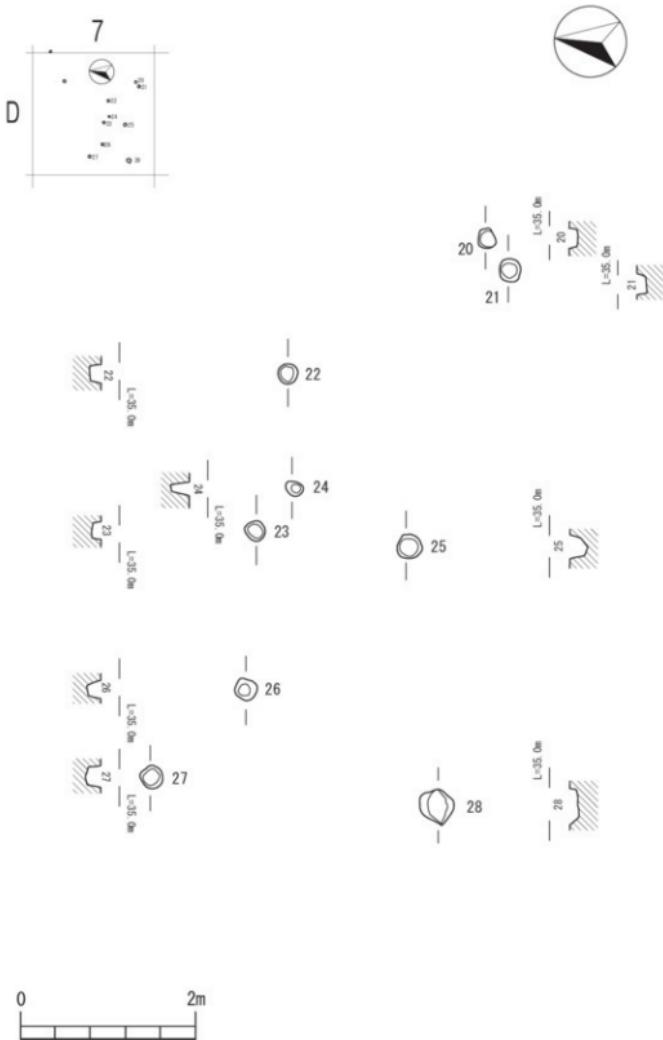


第17図 ピット位置図2

2号掘立柱建物跡



第18図 ピット位置図3



第19図 ピット位置図4

第3表 1号掘立柱建物跡計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	20	18	15
2	17	15	9
3	31	27	15.4
4	18.4	16	11
5	28.4	23	9
6	23	21	15
7	24.4	24	18
8	27	27	18

第5表 2号掘立柱建物跡計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	40	34	13.8
2	38	33	20
3	46.8	35	43
4	35	32	30
5	29	32	29
6	29	28	13
7	29	28	32
8	33	30	8
9	29	29	17
10	27	25	29
11	33	28	47.6
12	37	32	42
13	19	25	30.2
14	34	28	30.8
15	28	23	30
16	17	15	9
17	19	18	15
18	21	21	18
19	25.5	27	23.4
20	21	17	12
21	24	23	22.6

第7表 ピット計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	19	18	14.9	15	24	21	14
2	29	24	36	16	27	25	20
3	20	20	10.8	17	19	19	10.4
4	20	18.4	15	18	24	22	17
5	21.8	20.8	10	19	33	29	15
6	25	20	38	20	22.4	19.4	9.6
7	20	19	13	21	24	24	11
8	28	24	15.6	22	21	21	13
9	30	27.4	27	23	21.6	21	10
10	19	17	10	24	17	16	21
11	17	17	14	25	28	25.8	20
12	23	21	12	26	21.5	21	15.8
13	14	12	6	27	25	25	17
14	43	41.4	14	28	40.8	36.4	10

第4表 1号掘立柱建物跡規模表

桁行方向		梁行方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 - 7	394	1 - 3	292
1 - 8	190	1 - 2	140
8 - 7	200	2 - 3	152
2 - 6	416	8 - 4	280
3 - 5	406	7 - 5	280
3 - 4	204	7 - 6	146
4 - 5	194	6 - 7	134

第6表 2号掘立柱建物跡規模表

桁行方向		梁行方向	
柱穴間	距離(cm)	柱穴間	距離(cm)
1 - 6	960	16 - 1	540
1 - 2	200	16 - 10	138
2 - 3	186	10 - 7	186
3 - 4	185	7 - 1	220
4 - 5	194	17 - 2	546
5 - 6	190	17 - 11	146
7 - 9	990	11 - 2	400
7 - 8	390	18 - 3	540
8 - 9	600	18 - 12	126
10 - 15	970	12 - 8	218
10 - 11	210	8 - 3	204
11 - 12	176	19 - 4	514
12 - 13	198	19 - 13	108
13 - 14	176	13 - 4	410
14 - 15	210	20 - 5	530
		20 - 14	100
		14 - 5	418
		21 - 6	520
		21 - 15	114
		15 - 9	196
		9 - 6	210

(2) 中世の遺物

青磁 (第20図)

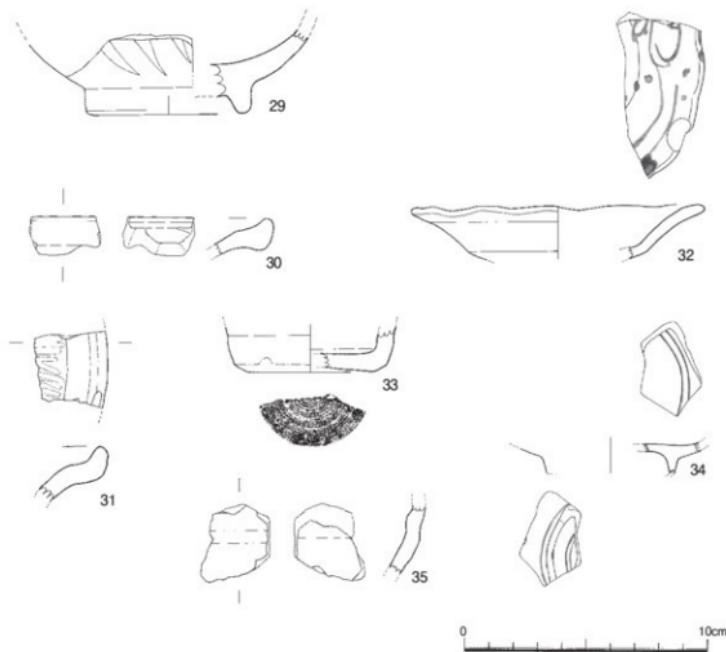
29～33は青磁である。29は碗の底部である。外面には片影りによる蓮弁文が施されるものと思われる。釉は高台内底のみ釉剥ぎされる。30・31は盤の口縁部である。口縁端部は幅広の譚状を呈する。30は残存部については無文であるが、31は内面に筋状の文様が見られる。32は稜花皿である。体部下位でわずかに屈曲し、口縁部にかけて緩く外反する形状を呈する。内面には線彫りによる簡略された唐草文が描かれる。33は香炉と思われる資料である。釉は外面にのみかかり、内面と外底面は露胎する。外底面の切り離しは糸切りで、体部との境は面取りされる。

青花 (第20図)

34は景德鎮窯系の青花である。見込みはわずかに盛り上がり饅頭心を呈するものと思われる。

陶器 (第20図)

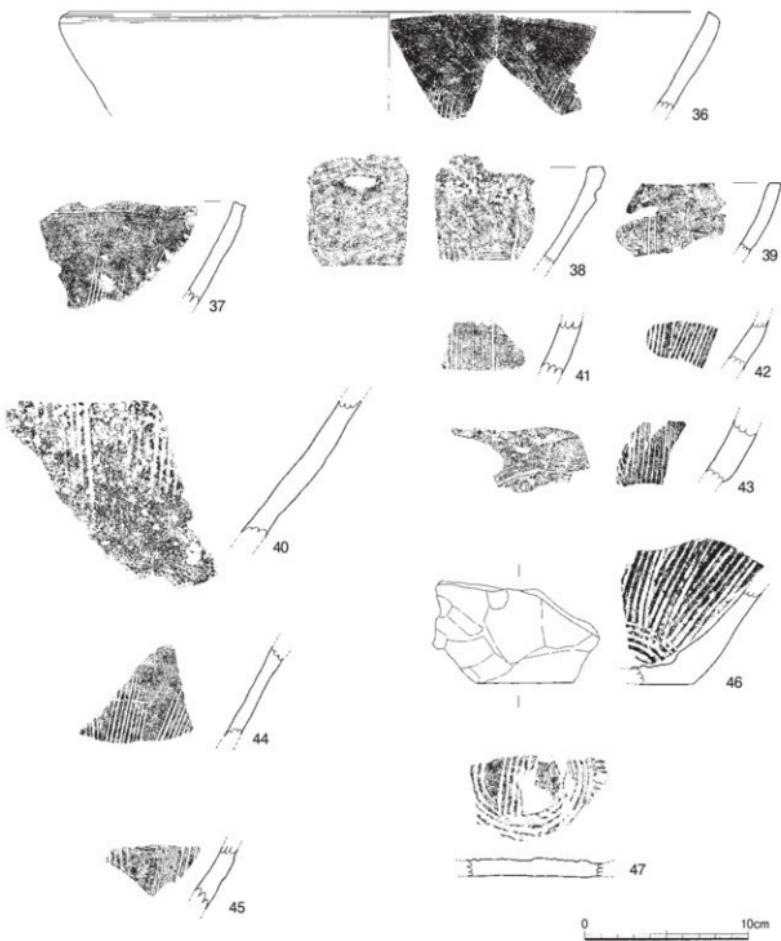
35は天目碗の体部である。口縁端部がわずかに欠損している。淡い灰褐色の胎土に黒褐色の釉がかかる。産地は不明である。



第20図 青磁・青花・陶器

瓦質土器 (第21図)

36～47は瓦質土器の擂鉢である。36～39は口縁部、40～45は胴部、46・47は底部である。内面には粗い擂目が、間隔をあけて放射状に入れられる。46は外面が粗く面取りされる。47は内底面のみの資料である。



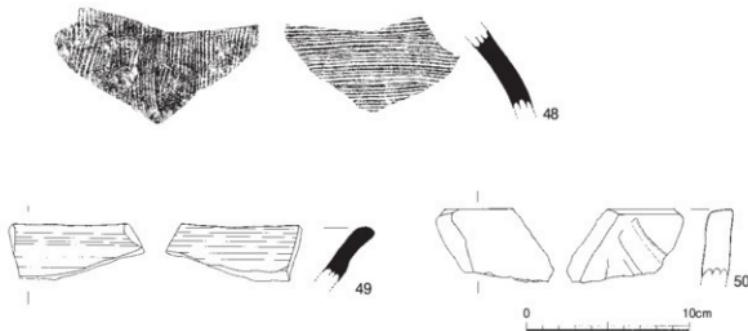
第21図 瓦質土器

中世須恵器 (第 22 図)

48・49は中世須恵器と思われる資料である。48は胎土が鈍い灰色を呈し、外面は縦位、内面は横位のハケ目状の調整痕が残る。タタキ成形ののち施されたものと思われる。49は鉢状の器形を呈する口縁部と思われるが、詳細については不明である。胎土は鈍い灰褐色を呈する。中世須恵器としたが他の種別の可能性も考えられる。

滑石製品 (第 22 図)

50は滑石製石鍋の口縁部である。



第22図 中世須恵器ほか

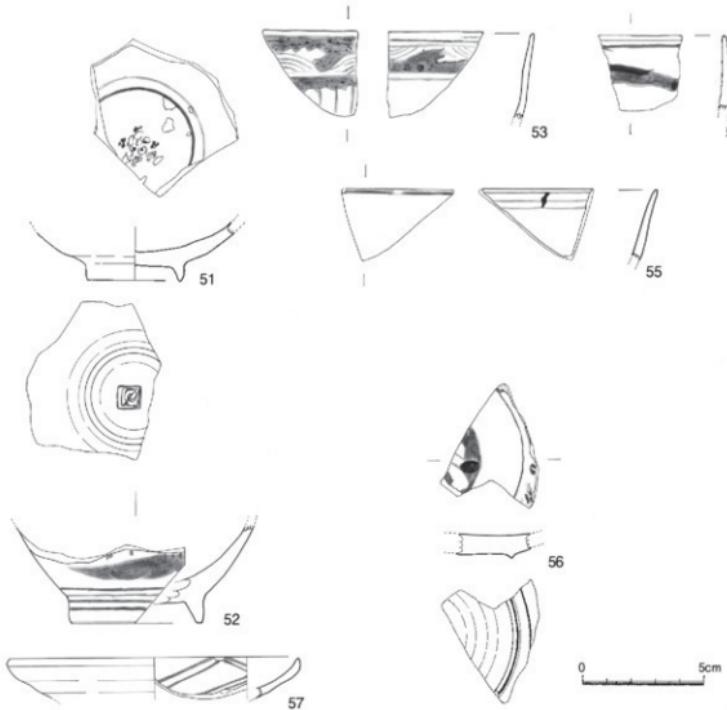
第8表 中世の遺物観察表

国名 番号	出典 番号	種別	器種	産地	出土区	層位	取り上げ 番号	法量 (cm) 口径 底径 器高	胎土の色調	軸巻の種類	施釉部位	時期	
20	29	青磁	碗	中国 龍泉窯系	E - 3・4	II	-	6.6	-	灰白色	青磁軸	高台内底面輪削ぎ	14世紀代
	30	青磁	盤	中国 龍泉窯系	E - F - 3	II	-	-	-	灰白色	青磁軸	残存部全面施釉	15世紀後半～16世紀前半
	31	青磁	盤	中国 龍泉窯系	E - 3・4	II	-	-	-	灰白色	青磁軸	残存部全面施釉	14世紀初頭～中頃
	32	青磁	棱花皿	中国 龍泉窯系	E - 3	IV	120	120	-	灰褐色	青磁軸	残存部全面施釉	15世紀後半
	33	青磁	香炉	中国 龍泉窯系	-	表層	-括	5.2	-	灰白色	青磁軸	外面腹部以下・内面無施	不明
	34	青花	瓶	中国 景德镇窯系	D - 4	II	48	-	-	灰白色	透明釉	器付輪削ぎ	18世紀代
21	35	陶器	天目鏡	不明	-	-	-	-	-	灰白色	黒輪	残存部全面施釉	不明
	36	瓦質土器	擂鉢	-	E - 3	II	6383	392	-	ぶい青褐色	-	-	-
	37	瓦質土器	擂鉢	不明	E - 5	IV a	-括	-	-	黄白色	-	-	中世
	38	瓦質土器	擂鉢	-	E - 4	II	125	-	-	淡黄色	-	-	-
	39	瓦質土器	擂鉢	不明	D - 4	II	34	-	-	浅黄褐色	-	-	-
	40	瓦質土器	擂鉢	不明	E - 3	II	72	-	-	浅黄色	-	-	-
	41	瓦質土器	擂鉢	-	D - 5・6	堅穴住居	-	-	-	灰白色	-	-	-
	42	瓦質土器	擂鉢	-	E - 4	II	129	-	-	灰色	-	-	-
	43	瓦質土器	擂鉢	不明	E - 3	II	61	-	-	橙色	-	-	-
	44	瓦質土器	擂鉢	不明	E - 3	II	59	-	-	黑色	-	-	不明
22	45	瓦質土器	擂鉢	-	E - 3	IV	121	-	-	灰色	-	-	-
	46	瓦質土器	擂鉢	-	表層	-括	-	-	-	黒色	-	-	-
	47	瓦質土器	擂鉢	不明	B - 4	II	8	-	-	浅黄褐色	-	-	-
	48	中世須恵器	壺	伴 伴万丈	E - 3・4	II	-	-	-	灰色	-	-	-
	49	中世須恵器?	壺か?	不明	-	表層	-括	-	-	灰色	-	-	-
	50	滑石製品	石鍋	-	E - 3	IV a	208	-	-	-	-	-	-

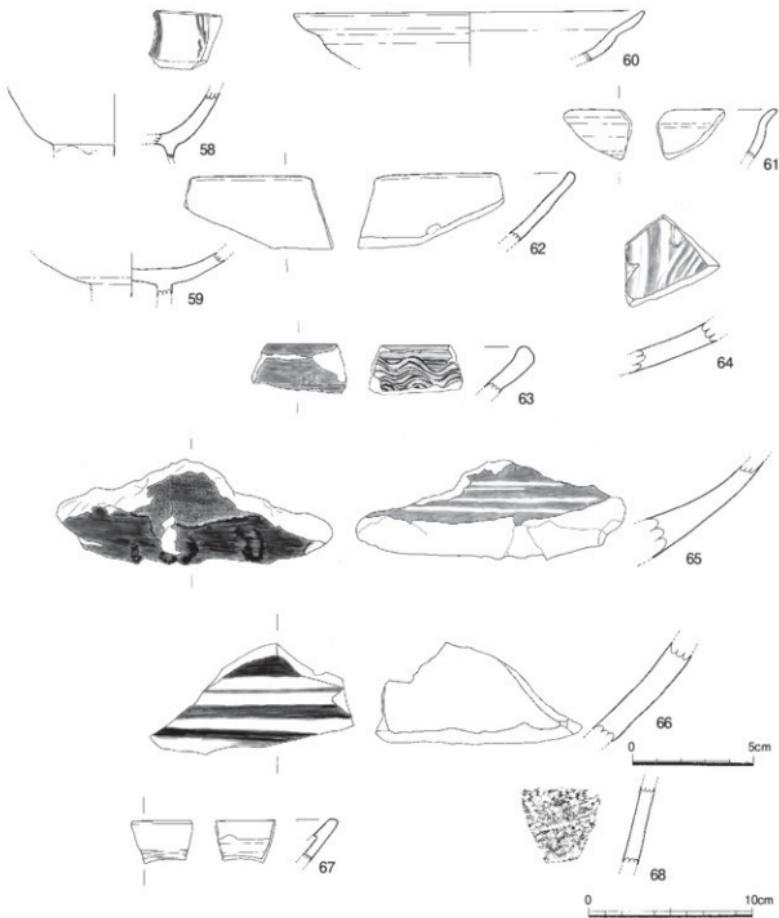
(3) 近世の遺物

磁器 (第23図)

51～57は染付である。51は朝顔形の形状を呈する碗で、外面に青磁釉がかかる。見込みには二重圓線とコンニャク印判による五弁花が描かれ、高台内面には渦福が描かれる。52は広東碗を模したと思われる碗である。一般的な広東形に比べ高台が低く厚い。透明釉は青みがかり、呉須の発色も悪い。文様は外面に山水文が描かれる。53は口縁部がやや外反するものである。小片のため器種ははっきりしないが碗もしくは鉢と思われる。54は筒形を呈する碗と思われる。55は端反形を呈する碗の口縁部である。56・57は皿である。56は中皿と思われるもので、高台の形状は蛇の目凹型高台を呈する。57は小皿になるものと思われる。透明釉は青みがかり、呉須の発色も悪い。内面には格子文が描かれる。



第23図 近世の遺物 1

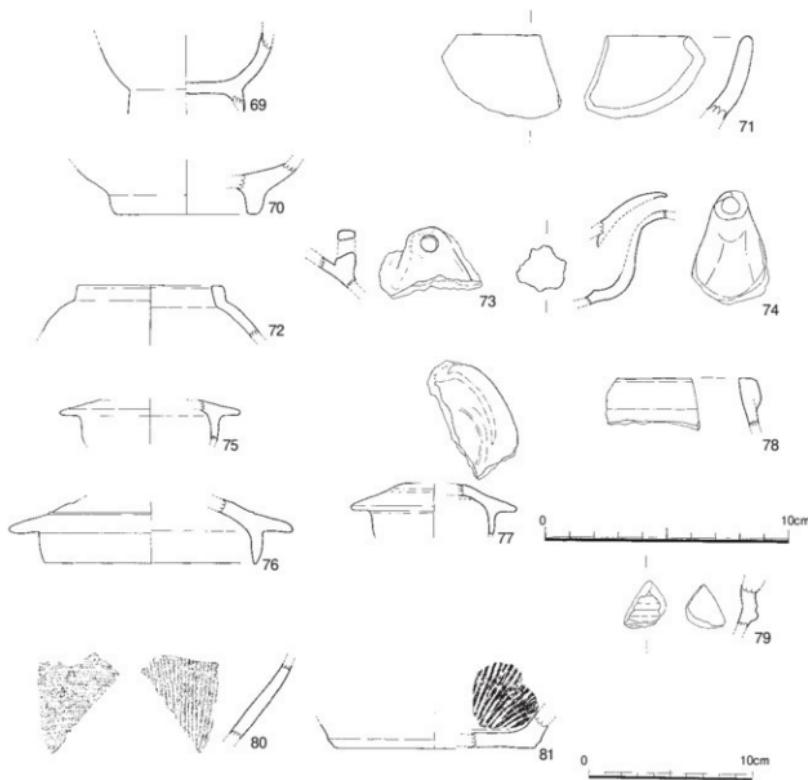


第24図 近世の遺物2

陶器（第24～26図）

58～66は肥前陶器である。58は碗で、内面に白化粧土がかかり、その上から鉄絵と思われる文様が描かれる。59は京焼き風陶器の碗である。外面腰部～高台内面は露胎する。60～62は内野山窯産と思われる皿の口縁部である。60は黄白色の胎土に透明釉がかかる。61は黄白色の胎土に黒褐色に発色した褐釉がかかる。62は灰褐色の胎土に白化粧土をかけたものである。肥前陶器としたが、他の産地の可能性も考えられる。63～66は大皿もしくは鉢と思われるものである。63は内

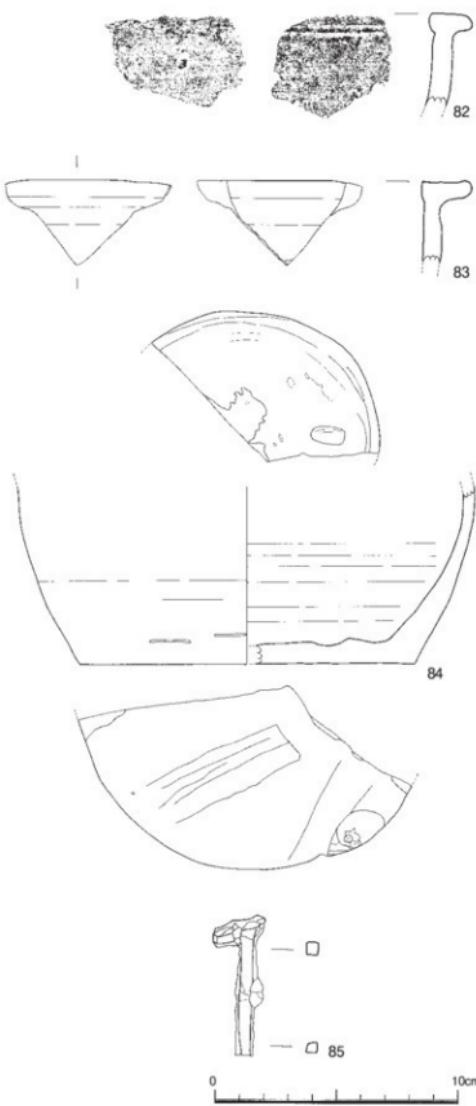
面に波状の文様が描かれ、縁釉がかかる。64は内面に、白土の象嵌により文様が描かれる。65は内面に白土による巻き刷毛目が施されたもので、外面は灰釉が腰部までかかり、以下鉄泥が塗られている。66は外面に白土を塗り、搔き落として縞状の文様を描く。内面は鉄釉と思われる褐色の釉がかかる。67は擂鉢の口縁部である。口縁端部は内側に折り曲げて肥厚させ、その部分にのみ鉄釉がかかる。擂り目の入る部分は欠損している。68は甕の胴部である。タタキ成形でつくられており内面にあて具痕が残る。釉はチョコレート色状の鉄釉が内外面にかかる。69～84は薩摩焼



第25図 近世の遺物3

である。69は白薩摩の碗である。70は龍門司系の碗である。赤褐色の胎土に褐色の鉄釉がかかるが、外面腰部から高台内面は露胎する。71は苗代川系の碗と思われる。暗褐色の胎土に黒褐色に発色した鉄釉がかかる。

72～74は土瓶である。72は口縁部である。73は胴部で、型造りでつくられた三角形の耳が付く。74は溜め口を呈する注口部である。茶止め穴は破損しているが、3穴と思われる。75～77は土瓶蓋である。76は大形のもので、鍋や釜の蓋として使われた可能性も考えられる。77は上面に焼成時の重ね焼きの痕跡が残る。78は釜の口縁部である。79～81は擂鉢である。79は口縁部で、先端は外側に折り返して肥厚させ、外面口縁部下位に2条の突帯を巡らせるものであるが、口縁端部は欠損している。内面の擂り目も欠損していて観察できない。80は胴部である。81は底部で、外底面の釉は拭き取られている。82は鉢の口縁部と思われる。内外面には横方向の筋状の工具痕が残る。口唇部は釉剥ぎされる。83は甕の口縁部と思われる。口唇部は釉剥ぎされる。84は甕の底部と思われる。外面胴部下位にはタキ成形時の痕跡が短い筋状に残る。



第26図 近世の遺物4

外底面の釉は拭い取られ、貝目とヘラ状工具と思われる工具痕が観察される。

鉄製品（第26図）

85は断面が方形の和釘である。頭部を折り曲げた皆折釘にあたる。腐食によるコブが見られるが、頭部は $2\text{cm} \times 1\text{cm}$ 、厚さ5mmの面をつくる。断面は、基部が $5\text{mm} \times 5\text{mm}$ の正方形、脚部側が $4\text{cm} \times 3.5\text{cm}$ の台形を呈する。脚部先端は欠損している。

第9表 近世の遺物觀察表

回 行 号	種別	器種	産地	出土区	層位	法量 (cm)		土色の色調	釉薬の種類	施釉部位	時期	備考	
						口徑	底径						
51	染付	碗	肥前	—	表層	—	3.8	灰白色	透明釉	登付輪剥ぎ	18世紀前半	見込みに手書き五井花	
52	染付	碗	肥前系	C-4	II	—	5.4	灰白色	透明釉	登付輪剥ぎ	18世紀～19世紀初頭		
53	染付	碗	肥前系	F-6	表層	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18世紀代		
54	染付	肥前系	E-F-3	II	—	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18世紀後半		
55	染付	碗	在地 肥前系	F-6	表層	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	19世紀～幕末		
56	染付	皿	肥前	—	表層	—	—	灰白色	透明釉	登付+高台全面施釉	18世紀代		
57	染付	皿	肥前系	E-F-3	—	12	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18世紀～19世紀初頭		
58	陶器	碗	肥前	E-F-3	II	—	—	黄灰色	内側白化粧、透明釉	残存部全面施釉	18世紀前半		
59	陶器	碗	肥前	E-5	II	—	—	灰白色	透明釉	外面部以下無釉	17世紀後半～18世紀前半	京焼き風陶器	
60	陶器	折沿盤	内側白化粧系	—	—	14.4	—	淡黄色	透明釉	残存部全面施釉	17世紀後半		
61	陶器	皿	肥前 内側白化粧系	F-6	表層	—	—	灰黄色	褐釉	残存部全面施釉	17世紀後半		
62	陶器	皿	不明	—	—	—	—	灰色	白化粧土	残存部全面施釉	不明		
63	陶器	皿	肥前	—	表層	—	—	■に青色	綠釉	残存部全面施釉	18世紀代		
64	陶器	皿	肥前	D-7	表層	—	—	■に青色	透明釉、白色象嵌	残存部全面施釉	18世紀代		
65	陶器	皿	肥前	—	表層	—	—	■に青色	(内面) 白土の跡毛目 (外) 灰釉、铁泥	外面部以下無釉	18世紀代		
66	陶器	蒜	肥前か?	C-4	II	—	—	赤褐色	铁軸	残存部全面施釉内外面 に白化粧土の跡毛目	18世紀代か?		
67	陶器	擂鉢	肥前	—	表層	—	—	褐灰色	铁軸	口唇部上部のみ施釉	17世紀後半		
68	陶器	甕	肥前	—	表層	—	—	灰黃褐色	铁軸	残存部全面施釉	—	内面タクキ目残る	
69	白薩摩	碗	薩摩燒 薩摩系	E-F-3	—	—	—	淡黄色	透明釉	残存部全面施釉	18世紀代か?		
70	陶器	碗	薩摩燒 薩摩司系	F-6	表層	—	5.8	明赤褐色	铁軸	外面部から台内底無釉	18世紀後半		
71	陶器	碗か?	薩摩燒 薩摩川系	C-7	表層	—	—	褐灰色	铁軸	残存部全面施釉	18世紀後半～19世紀		
72	陶器	土瓶	薩摩燒 薩摩川系	D-4	II	6.0	—	■に青色	铁軸	口唇部口縁内側無釉	18世紀後半		
73	陶器	土瓶	薩摩燒 薩摩川系	F-6	表層	—	—	褐灰色	铁軸	残存部全面施釉	18世紀後半		
74	陶器	土瓶	薩摩燒 薩摩川系	—	表層	—	—	黑褐色	铁軸	残存部全面施釉	18世紀後半		
75	陶器	土瓶蓋	薩摩燒 薩摩川系	—	—	—	—	■に青色	铁軸	上面施釉	18世紀後半		
76	陶器	土瓶蓋	薩摩燒 薩摩川系	F-6	Na	8.8	—	暗赤褐色	铁軸	上面施釉	18世紀後半		
77	陶器	土瓶蓋	薩摩燒 薩摩川系	—	—	—	底径 6.8	—	黑褐色	铁軸	上面施釉	18世紀後半	
78	陶器	鍋	薩摩燒 薩摩川系	D-7	Na	—	—	■に青色	铁軸	残存部全面施釉	19世紀代		
79	陶器	擂鉢	薩摩燒 薩摩川系	—	表層	—	—	赤褐色	铁軸	残存部全面施釉	17世紀前半		
80	陶器	擂鉢	薩摩燒 薩摩川系	—	表層	—	—	明赤褐色	铁軸	残存部全面施釉	18世紀後半		
81	陶器	擂鉢	薩摩燒 薩摩川系	—	表層	—	12.2	■に赤褐色	铁軸	底部無釉	18世紀後半		
82	陶器	蒜	薩摩燒 薩摩川系	—	表層	—	—	灰褐色	铁軸	口唇部輪剥ぎ	19世紀		
83	陶器	擂鉢	薩摩燒 薩摩川系	—	表層	—	—	■に青色	铁軸	口唇部輪剥ぎ	18世紀代		
84	陶器	甕	薩摩燒 薩摩川系	—	—	—	20.5	—	灰褐色	铁軸	外底面輪拭い取り	18世紀後半～19世紀	
85	金属器	角釘	—	B-4	II	最大径 5.7cm 2.2cm	0.7cm	—	—	—	—		
11	金属器	古錢	—	土坑内	—	最大径 24cm	2.4cm	—	—	—	1636年以降	寛永通宝	

第2節 広段遺跡の調査

1 発掘調査の経過（日誌抄）

平成21年5月8日 環境整備。グリッド杭設定。重機による表土剥ぎ。トレンチ設定、掘り下げ。

5月11日

環境整備。表土剥ぎ。

5月12日

トレンチ9～11掘り下げ。

5月13日

表土剥ぎ。C・D-6～8Ⅱ層掘り下げ。トレンチ4～6, 9掘り下げ。

5月14日

トレンチ9掘り下げ。C・D-6～8Ⅱ層掘り下げ。

5月15日

グリッド杭設定。Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ。

5月18日

Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ。グリッド杭、レベル設置。

5月19日

Ⅲ層掘り下げ。トレンチ埋め戻し。

5月20日

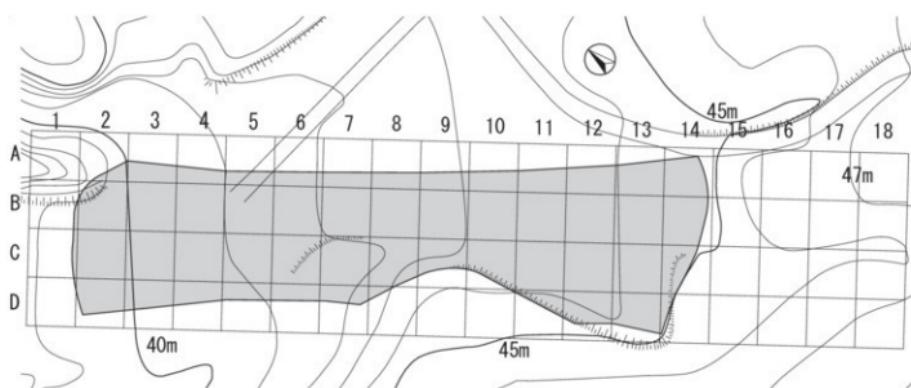
Ⅲ層掘り下げ。トレンチ埋め戻し。トレンチ配置図作成。

5月21日

調査区埋め戻し。ハウス撤去作業。

5月22日

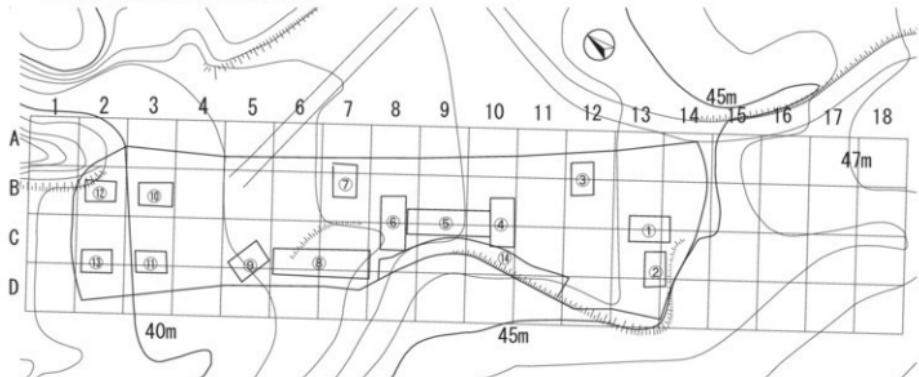
調査区埋め戻し。ハウス撤去作業。



2 発掘調査の方法と成果

調査は、南九州西回り自動車道出水阿久根道路実施設計図をもとに、南北方向に1・2・3～東西方向にA～Dとする10m間隔の調査用区割り（グリッド）を設定した。

調査区内にトレンチを14か所設定し、重機で表土を剥いだ後、人力（山鋤、ジョレン、ねじり鎌）で掘り下げ、遺物包含層や遺構の有無を調査した。調査の結果、いずれのトレンチからも遺構は検出されず、遺物は出土しなかった。



第28図 トレンチ配置図 (1/1,000)

第10表 トレンチ規模表

トレンチNo	縦×横×深さ (m)	トレンチNo	縦×横×深さ (m)	トレンチNo	縦×横×深さ (m)
1	5×10×2	6	5×10×1	11	5×4×1
2	5×10×4	7	3×5×2	12	5×4×1
3	5×10×2	8	10×20×1	13	5×4×3
4	5×10×0.5~2	9	3×7×1.5	14	42×5×1
5	5×20×1	10	5×4×1.5		

3 層序

広段遺跡は高松川中流域の右岸から約1km北の標高約12～15mの畑地内に立地する。右は広段遺跡の基本的な地層の模式図である。I層は表土である。II層は暗褐色土。III層は橙色土である。いずれの層からも遺構、遺物は出土しなかった。

I層 盛土(旧耕作地)
II層 暗褐色土
III層 橙色土

第3節 総括

1 上野畠遺跡の遺構

上野畠遺跡の遺構は、掘立柱建物跡2棟、竪穴遺構1基、炉状遺構2基、土坑1基、ピット28基が確認された。これらの遺構はいずれも検出面、埋土の状況及び遺構の周辺遺物などから中世もしくは近世の遺構であると判断した。しかし、遺構内からは共伴遺物が全く確認されなかつたので、時期の詳細については不明である。

(1) 掘立柱建物跡について

2棟は隣接しており、建物の方向も東西で一致することなどから、同一時期に建っていた事も予想される。調査を進めていく中で、本遺跡の南方面に位置する阿久根市山下地区の中世山城跡などに関連するものかどうかの可能性も考慮した。しかし、遺構の性格をあらわす遺物は検出されず、建物跡の明確な定義付けはできなかつた。

(2) 竪穴遺構について

床面や柱穴の埋土内に炭化物が見られたことから、生活の場、もしくは何かを製造する場として使用されたものと考えられる。

(3) 炉状遺構について

2基とも底面は全体的には平坦でゆるやかに立ち上がるものである。埋土中には炭化物が多く含まれていて、近くからは鉄滓も出土していることから、小鎌冶炉跡とも考えられる。

(4) 土坑について

ほぼ円形で壁が床面からほぼ垂直に立ち上がっているのが特徴である。埋土内から寛永通宝が1点出土したが、近世のある時期に埋土に紛れ込んだものとも考えられる。用途・目的については不明である。

(5) ピットについて

2棟の掘立柱建物跡周辺から多く検出された。ピットの位置に性質を見い出すことができなかつたが、埋土や周辺遺物の状況などが掘立柱建物跡の柱穴に類似していることから、建物跡との関連も考えることができる。

2 上野畠遺跡の遺物

遺物は主にⅡ層を包含層として、縄文時代以降の石器や古墳時代の成川式土器、古代の土師器、須恵器、中世の青磁、青花、陶器、瓦質土器、須恵器、滑石製品、近世の磁器、陶器などが出土した。包含層が非常に薄く地形もやや起伏があるため、遺物出土地点のレベル差等で時代を特定することは困難であった。そのため主に遺物のみで時代を判断したが、出土量が多かつたのが中世から近世にかけての時期の遺物である。遺構との関連を考えると、縄文時代から近世にかけてこの地で脈々と生活が営まれるなか、中世から近世の時期に人々の生活が最も盛んに営まれていたと思われる。また、中世の輸入陶磁器や近世の肥前系陶磁器など、各地との広範な交流を示す遺物が確認されていることからも当時の生活状況が推定でき、周辺遺跡との関連性も若干はあるが窺うことができた。

3 広段遺跡

14本のトレンチを設定し調査を進めたがいずれのトレンチからも遺構、遺物は確認できなかつた。

4 おわりに

今回の発掘調査の結果から、上野畠遺跡は阿久根市山下地区を中心とする中世山城跡などの遺跡群の周辺部に位置する小規模の集落遺跡であると考える。遺跡の性格を明確に定義づける遺構・遺物は検出されなかったが、今後、周辺遺跡の調査が進んでいく中で、阿久根の地域の歴史がより深く解明されていくものと思われる。

〈参考・引用文献〉

- | | | |
|-----------|------|--|
| 阿久根市 | 1974 | 『阿久根市誌』 |
| 阿久根市教育委員会 | 1982 | 『北山遺跡』 阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(1) |
| 鹿児島県教育委員会 | 1997 | 『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（VI）』 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書72 |
| 阿久根市教育委員会 | 2003 | 『中之城跡』 阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書(4) |

北山田遺跡

第5章 北山田遺跡の調査

第1節 調査の経過（日誌抄）

調査は以下の経緯で進行した。

平成21年5月

発掘機材検収。環境整備。表土剥ぎ。グリッド杭、トレント設定。トレント掘り下げ。トレント位置図作成。写真撮影。B・C-3・4区斜面部分掘り下げ。

平成21年6月1日～6月5日

B・C-3・4区遺物出土状況写真撮影、掘り下げ。C-4区木器出土状況平板実測、写真撮影。C-3・4区疊出土状況平板実測。B-4、C-3・4区硬化面検出。

平成21年6月8日～6月12日

遺物出土状況、疊出土状況実測。遺物取り上げ。水田層掘り下げ。B-4、C-3・4区硬化面掘り下げ、写真撮影。

平成21年6月17日～6月26日

C-4水田層分層、土層断面実測、写真撮影。B・C-4・5区水田部分表土剥ぎ。

平成21年7月1日～7月17日

表土剥ぎ。B・C-4・5区水田層掘り下げ、検出。B・C-3区センター図作成、土層断面実測。

平成21年7月21日～7月24日

B・C-3区傾斜面上段下層確認、硬化面検出。B・C-4区土層断面実測、ベルト設定、水田面ミニトレント掘り下げ。

平成21年7月27日～8月26日

雨により調査区水没のため排水作業。環境整備。台風養生。B・C-4・5区水田面検出、平板実測、写真撮影。B・C-4区斜面硬化面検出作業、平板実測。近世以降の6枚の水田区画が確認される。平成21年9月7日～9月11日

B・C-3・4区水田層掘り下げ、遺物取り上げ、重機により搅乱部分の掘り下げ、水路内疊検出状況写真撮影、畦・水路検出。

平成21年9月14日～9月25日

水田層（水田4）掘り下げ、実測、杭列実測。水田層（水田3）検出、遺物取り上げ、写真撮影。C-4区水路平板実測。B・C-3・4区斜面硬化面実測。1mメッシュ設定。重機による表土剥ぎ。平成21年10月5日～10月14日

台風養生、排水作業。水田3遺構実測。水田3北側実測。空中写真撮影準備。

平成21年10月15日～10月27日

水田3北側掘り下げ、南側実測。水田2検出、実測。空中写真撮影。調査終了。

第2節 発掘調査の方法

北山田遺跡は標高約10m～20mの丘陵縁辺部分に立地し、遺跡の東側、低地部分を流れる岩下川（西目川）をはさみ、対岸の丘陵上には中郡遺跡群がある。周辺は山林及び雑種地等で、低地面

には水田が広がっている。

調査は、プレハブ設置後、調査区域内の草払い等の環境整備を行った後、センター杭No395（起点）とNo392を結ぶ線を基準に、北側から南側へA～D、西側から東側へ1～8の20mグリッドを設定し、8か所にトレンチを設け着手した。トレンチ調査は重機で表土を除去した後、山鋤・ジョレン・ねじり鎌・移植ゴテ等を用い、人力による掘り下げを行った。

その結果、B・C・3・4区を中心にⅡ層から中世の土師器、青磁、縄文時代の土器、石鎌、スクレイパー、磨石が出土、B・C・4区を中心に、4層からなる水田遺構が検出された。

これらの結果に基づき、遺構および遺物包含層が残存する800m²を対象に、順次本調査に移行した。本調査は、表土を重機によって除去し、Ⅱ層を人力で掘り下げ、写真撮影・測量・遺物取り上げ等を行った。

水田遺構部分300m²については、表土を重機で除去した後、水田層ごと4層について、人力による掘り下げ、畦・水路等の遺構の検出を行い、写真撮影・測量・遺物取り上げ等を行なった。空中写真撮影後重機により埋め戻しを行い調査を終えた。

第3節 層序

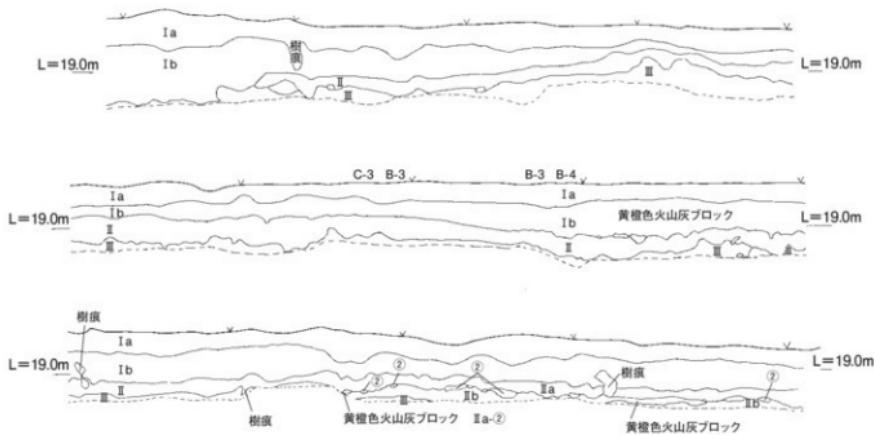
比較的土層が安定する平坦面の部分は既に削平を受けており、遺物包含層が確認された斜面部分では、土層の堆積が悪く、シラス上部の黄褐色土層（Ⅳ層）の上部は、3層に区分されるのみであった。

水田遺構が検出された段丘崖に沿った谷地形の部分では、経年的な水田耕作による複雑な土層の堆積状況が見られ、これを9層に区分し、このうち4層を水田の遺構面として捉えた。

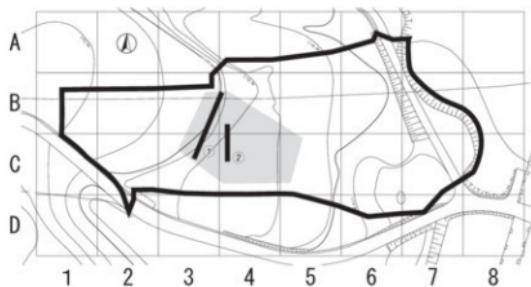
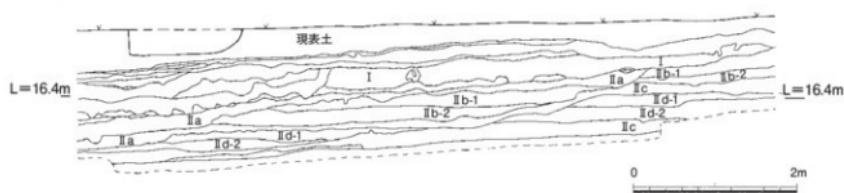
なお、シラスの堆積層の下位には、基盤をなす段丘疊層に続くが、調査区内でも後世に削平やシラスの堆積が不良で、上部の混土疊層及び段丘疊層が露出する部分も見られた。基本的な層位を以下にまとめた。

I層	表土	耕作土	
II層	暗褐色土	遺物包含層	
III層	赤褐色土		
IV層	黄褐色土	シラス上部	
Ⅱa層		暗灰褐色土	
Ⅱb-1層	水田Ⅳ	灰褐色土	約3mmの黄橙色バミスを含む
Ⅱb-2層		暗灰褐色粘質土	
Ⅱc-2層	水田Ⅲ	明灰色粘質土	
Ⅱd-1層	水田Ⅱ	明青灰色土	砂質土を含む斑鐵層、0.5-1.5mmの黄橙色バミスを含む
Ⅱd-2層		青灰色弱粘質土	
Ⅱe層	水田Ⅰ	暗青灰色強粘質土	有機質土
Ⅲ層		白色シルト質土	アカホヤ火山灰

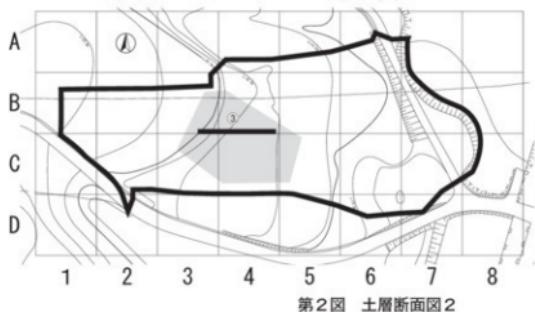
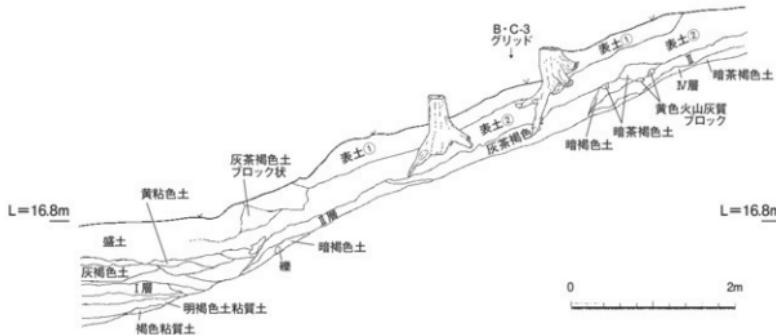
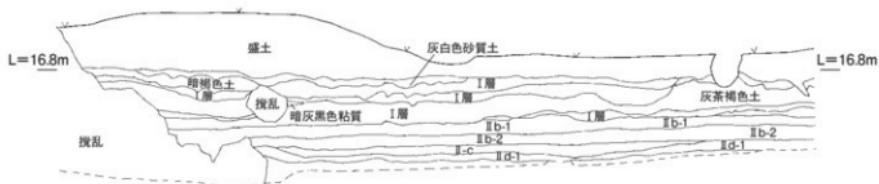
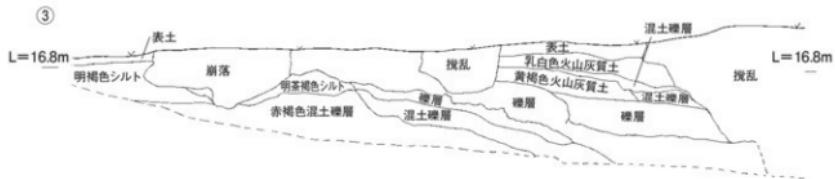
①



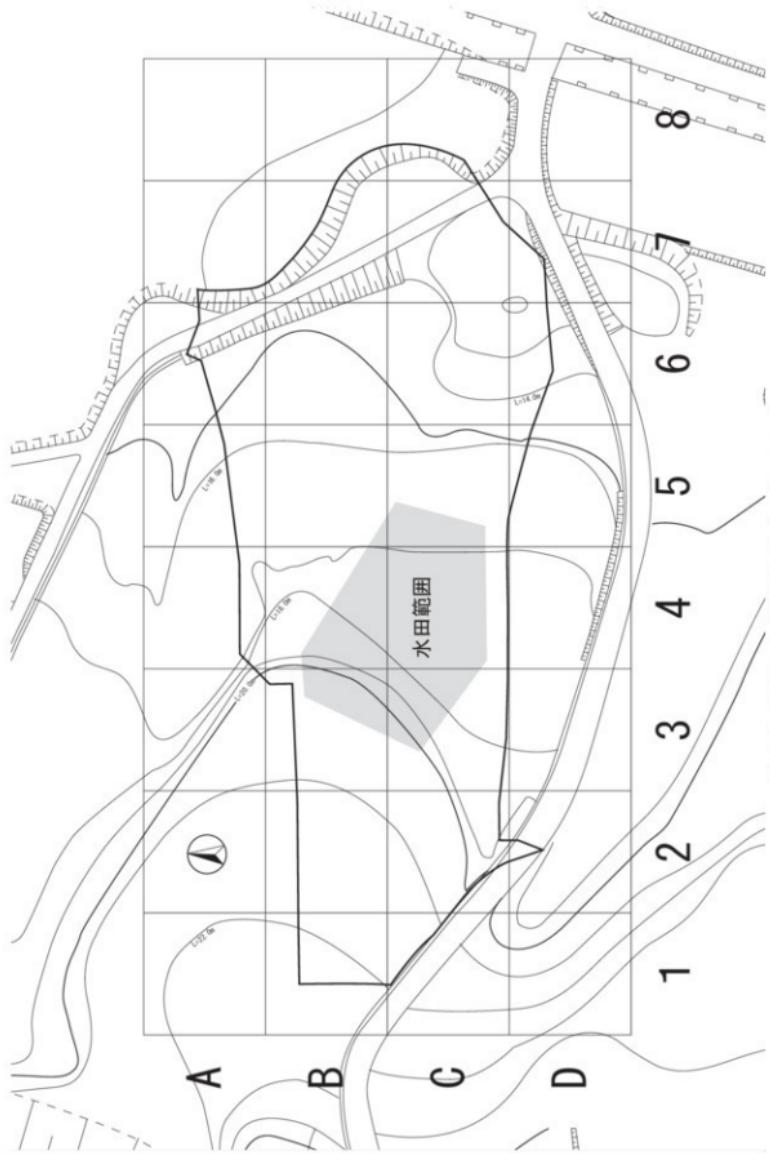
②



第1図 土層断面図1



第3図 地形図および遺構位置図 (1グリッド20m)

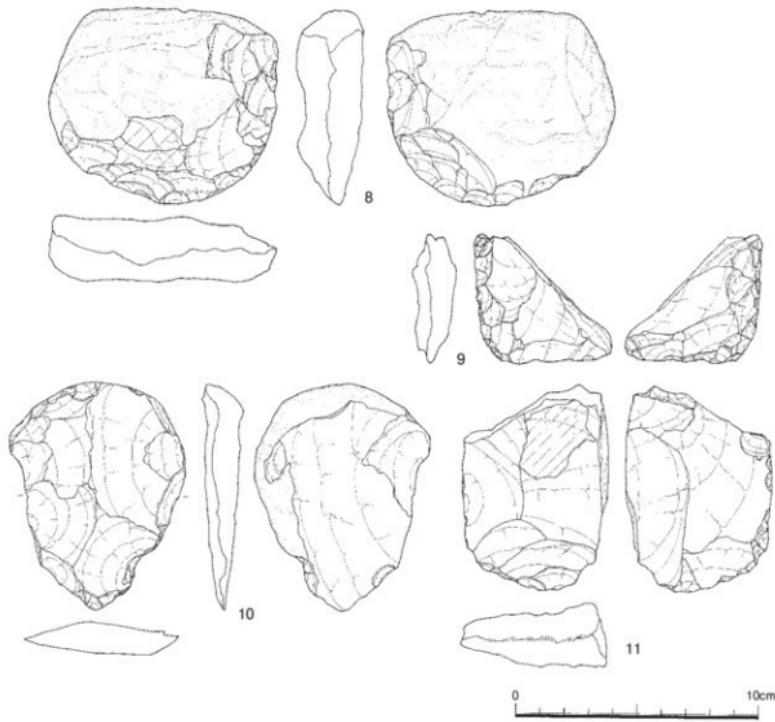




第4図 遺物出土状況図 (S=1/500)



第5図 縄文時代の石器 1



第6図 縄文時代の石器2

第4節 縄文時代の調査

縄文時代相当の遺構は検出されなかった。遺物は石鎌、石匙、剥片、石核、礫器、磨石、敲石、石皿が出土した。

1 遺構

縄文時代の遺構は検出されなかった。

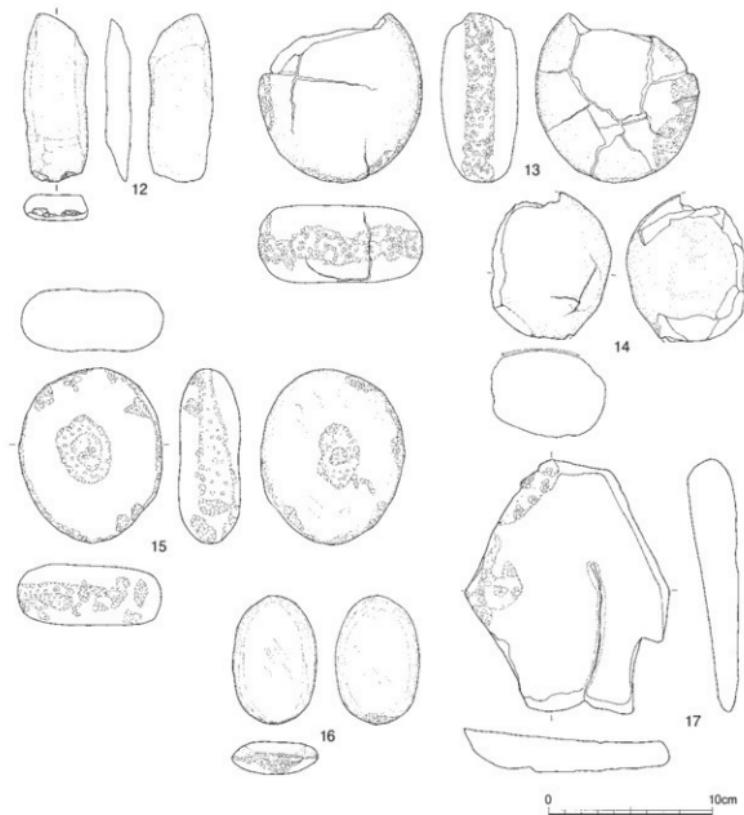
2 遺物

石器（第5～7図）

遺跡全体が大きな地形変更を受けており、共伴する土器等から石器の帰属時期を確定することはできなかった。このことから、水田遺構に伴って出土したものも含め、時期的には縄文時代を含む、それ以降の石器として一括して報告する。

石鎌 1は灰黒色で黒色の縞が入る良質なチャート製の石鎌である。基部に浅い三角形状の抉りが入る凹基の二等辺三角形鎌で、薄手でシャープな整形となっている。

石匙 2は青灰色で透明感がなく、不純物を少量含む黒曜石製。比較的薄手の不定形剥片を素材と



第7図 繩文時代の石器 3

する石匙で、右半部を大きく欠損する。素材剥片の打瘤部分の表裏から、比較的簡略な調整剥離でつまみ部が作り出され、身部も周縁のみに調整が施される横型の石匙である。3は灰白色を呈する安山岩製の横型の石匙である。全体に風化が進み、細かい観察はできないが、裏面の一部を除きつまみ部、身部ともほぼ全面に二次調整がおよび、丁寧に仕上げられている。

剥片 4は灰白色を呈し黒色の縞が入る良質なチャートの剥片である。5は緑灰色を呈する比較的良質な珪質頁岩の剥片で、右側縁下半から下縁にかけて細かい剥離が観察できる。6は紫黒色で半透明、白色の不純物を少量含む比較的良質な黒曜石の剥片で、自然面は擦りガラス状を呈する。表土からの出土であるが、下辺部分にはバテナの発達した細かい剥離もみられる。7は底面の自然面を取り込んだやや厚みのあるサスカイト製の剥片である。新しいキズの部分は漆黒色で、風化面は灰色を呈する。

礫器 8は表裏に自然面が残るホルンフェルスの扁平な亜角碟で、上辺および左側縁は自然面のまま残置し、右側縁から下縁にかけて表裏から比較的丁寧に剥離が加え、円刃気味の刃部が作り出されている。右側縁下半から下縁右寄りにかけて、使用によるとみられる細かい剥離が観察される。9はホルンフェルスの剥片を素材とするが、折れにより大半を欠失し、全形は不明である。打製石斧の欠損部分の可能性もある。

剥片2 磔器あるいは礫石器の製作使用に関わるとみられるものである。10はホルンフェルスの円碟から剥出された剥片で、部分的に周縁からの二次的な剥離が観察される。11もホルンフェルス製の剥片で、右辺および上辺に折れで全体の形状は不明であるが、下辺部に剥離及び細かい剥離がみられる。

磨石・敲石類 12はやや不定形な扁平・棒状の砂岩の亜円碟で下辺部分に剥離がみられる。13は凝灰岩の円碟で、被熱によるとみられるひび割れや剥離が生じている。図、正面には研磨による明瞭な磨滅面が、また、側縁には敲打による側面が形成されている磨石、敲石である。14は多孔質の安山岩製で、側縁には敲打による側面が形成され、表裏に浅いくぼみが生じている。また、裏面には顕著な磨面が生じている磨石、敲石、凹面である。15は多孔質の安山岩の円碟で、被熱による剥離が生じているが、正面に外弯する磨面がある磨石である。16は扁平な砂岩円碟で、表裏とも平滑で部分的に擦痕がみられる。下縁部には敲打につぶれが生じている。

石皿 17は扁平な砂岩碟で、裏面は自然面で顕著な風化を示す。正面は平滑な凹面を呈しており、石皿もしくは砥石としての使用が考えられる。

第1表 縄文時代の石器観察表

擲団 実測 番号	掲載 番号	器種	層位	石材	出土区	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	標高 (m)	備考
5	1	石鏃	II c	チャート	B - 3	2.2	(1.6)	0.3	0.8		
	2	石匙	表土	黒曜石	B - 4	(3.1)	(3.9)	0.5	3.4		
	3	石匙	II d		B - 4	3.0	5.3	0.8	8.1		
	4	剥片	II d	チャート	B - 4	3.0	2.5	0.8	9.0	17.122	
	5	剥片	II	珪質頁岩	B - 4	3.0	3.2	1.0	4.1	16.292	旧水田グライ化層
	6	剥片	表土	黒曜石	B - 4	3.1	3.7	0.9	6.2		
	7	剥片	表土	サヌカイト	B - 4	3.4	6.0	1.0	26.3		
6	8	礫器	表土	ホルンフェルス	B - 4	9.4	7.9	2.8	276.7		
	9	剥片	表土	ホルンフェルス	B - 4	(5.3)	(5.6)	1.8	48.1		
	10	剥片	II	ホルンフェルス	B - 4	9.4	7.2	1.5	98.3	18.27	
	11	剥片	表土	ホルンフェルス	B・C - 4	(8.4)	6.0	2.6	126.1		
	12	磨石・敲石類	II	砂岩	C - 4	10.3	3.9	1.5	97.6	17.053	
7	13	磨石・敲石類	II d	凝灰岩	C - 4	(10.3)	10.0	4.7	(620.0)	16.795	
	14	磨石・敲石類	表土	安山岩	C - 3	(8.9)	(7.2)	5.3	(470.0)		
	15	磨石・敲石類	II	安山岩	C - 3	10.6	8.7	3.7	555.0	18.645	
	16	磨石・敲石類	II c	砂岩	C - 3	7.9	5.1	2.0	135.0		
	17	石皿	II	砂岩	C - 3	15.4	12.5	2.6	600.0		水田最下層下面

第5節 中世・近世の調査

中世・近世に比定される水田遺構が4面検出された。遺物では青磁、瓦質土器、染付、薩摩焼が出土した。

1 遺構 丘陵縁辺の谷部分で4面の水田遺構を検出した。また、両側の斜面部分より畦畔や水路等の遺構も検出された。

水田1（第8・9・12図） B・C-3・4区の谷部分で検出された。水田からは南側から北に向かって緩やかに下がり、2~3mごとに畦畔で区画されている。水田幅は4~5mである。東側には水路と思われる溝跡が水田と斜面との境で検出された。西側斜面にはこの時期の水田のものと思われる畦畔跡がみられた。また、青磁、薩摩焼の破片が4点出土した。18は青磁碗である。口縁端部は丸くつくられ、わずかに外反する。19は青磁碗である。高台内底の釉は円状に釉剥ぎされる。20は薩摩焼で苗代川系の徳利である。外面の釉は水蝕のためか褐色に変色している。21は薩摩焼で苗代川系の徳利である。胎土は灰色を呈し、緻密である。外面と内面の一部に薄い鉄釉がかかる。

水田2（第8・9・10・13図） 水田1の上層より検出された。水田1と同様に畦畔で区画されているが、水田幅が水田1より広く畦畔と畦畔の幅も水田1より若干広くなっている。東側には水路と思われる溝跡が検出された。ただし水路の位置は水田1より東にずれている。水田2からは薩摩焼の破片が1点出土した。22は薩摩焼で龍門司産の碗である。口縁部外面に白化粧土をかけ、その上から褐色釉をかけるものである。

水田3（第8・10・11・14図） 水田2の上層で検出された。水田2より更に幅は広くなっている。水田の両端に斜面に沿って水路と思われる溝跡が検出された。東側斜面水路状溝跡は水田1や水田2の水路状溝跡より東側により高い場所に営まれている。この水路状溝跡の北側には排水口と思われる畦畔の切れ目がある。取水口状の切れ目と排水口状の切れ目との標高差は40~55cmである。

水田3より青花、陶器の破片が出土した。23は漳州窯系青花の碗である。口縁部外面に文様が描かれ、芭蕉文の先端も観察される。24は肥前陶器の大皿もしくは鉢と思われる。内面は白土による刷毛目が施され、外面には鉄絵が描かれる。

水田4（第8・11・15図） 水田3の上層で検出された。畦畔、水路状溝跡の様相は水田3と類似しているが、畦畔、水路状溝跡とともに位置は水田3と若干ずれており、時期差が伺える。水田3で検出された取水口状の切れ目と排水口状の切れ目の位置は変わらず、水田3の時期から継続して使用されたものと思われる。水田4より陶器の破片が2点出土した。25は肥前陶器である。鈍い黄白色の胎土に、やや緑がかった灰色の釉がかかる。外面腰部から高台内面は露胎する。26は土瓶蓋と思われるが、産地は不明である。胎土は緻密で灰褐色を呈し、上面に白化粧土と透明釉がかかる。

第2表 遺構内遺物観察表

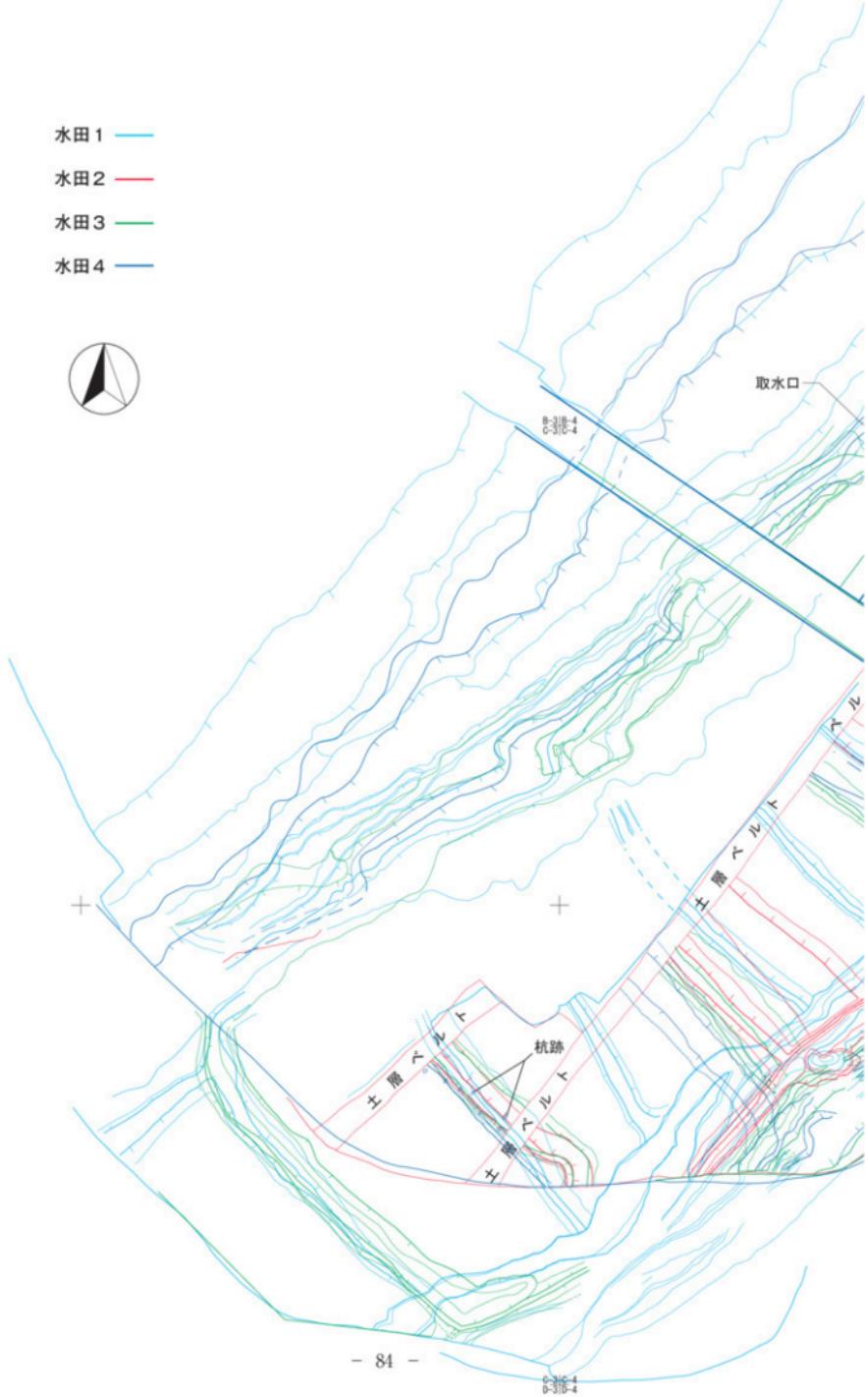
出土番号	種類	器種	産地	出土区	遺構	法量(cm) 〔口径×底径×高さ〕	胎土の色調	施釉の種類	施釉部位	時期	備考
12	18	青磁 瓢	中国 龍泉窯系	C-4	水田1	- - -	灰褐色	青磁釉	残存部全面施釉	14世紀代	
	19	青磁 瓢	中国 龍泉窯系	C-4	水田1	5.2	灰白色	青磁釉	高台内面露胎	14世紀～16世紀代	
	20	陶器 徳利	薩摩焼 苗代川系	C-3	水田1	- -	灰褐色	陶釉、鉄釉	外面と内面の一部	18世紀代	
	21	陶器 徳利	薩摩焼 苗代川系	C-4	水田1	- -	暗赤灰色	鉄釉	残存部全面施釉	18世紀代か？	
13	22	陶器 瓢	薩摩焼 苗代川系	B-4	水田2	- - -	暗褐色	白化粧土に褐色釉	残存部全面施釉	18世紀後半	
	23	青花 瓢	中国 漳州窯系	C-4	水田3	- - -	灰白色	透明白釉	残存部全面施釉	16世紀末～17世紀初頭	
	24	陶器 皿または鉢	肥前	B-4	水田3	- - -	明赤褐色	白土の刷毛目、灰釉	残存部全面施釉	18世紀前半	鉄絵
15	25	陶器 瓢	肥前	-	水田4	4.2	灰褐色	灰釉	外面腰部から高台内底露胎	18世紀前半頃	
	26	陶器 土瓶蓋か？	不明	C-4	水田4	12.2	- -	におい味白化粧土に透明釉	上面に施釉	18世紀後半以降	

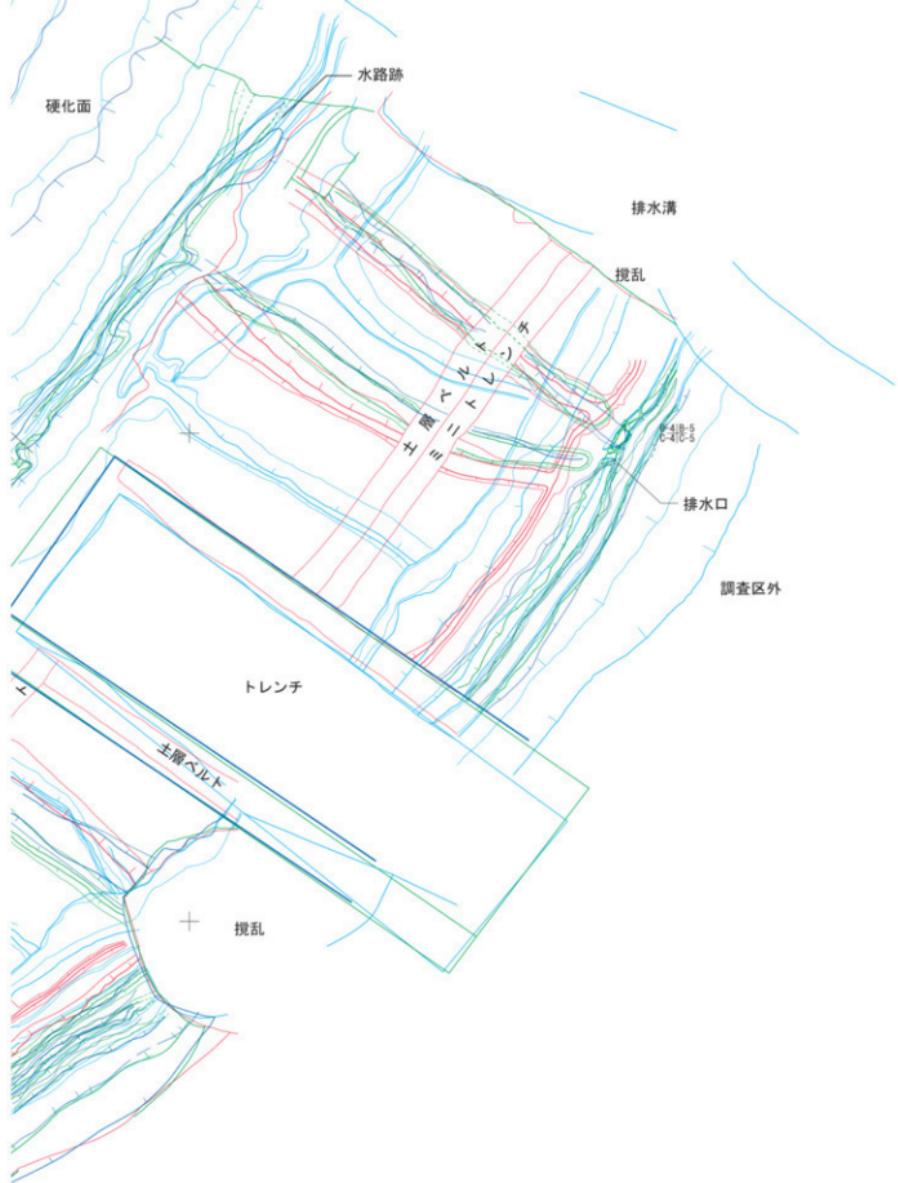
水田 1 —

水田2 —

水田3 —

水田4 —

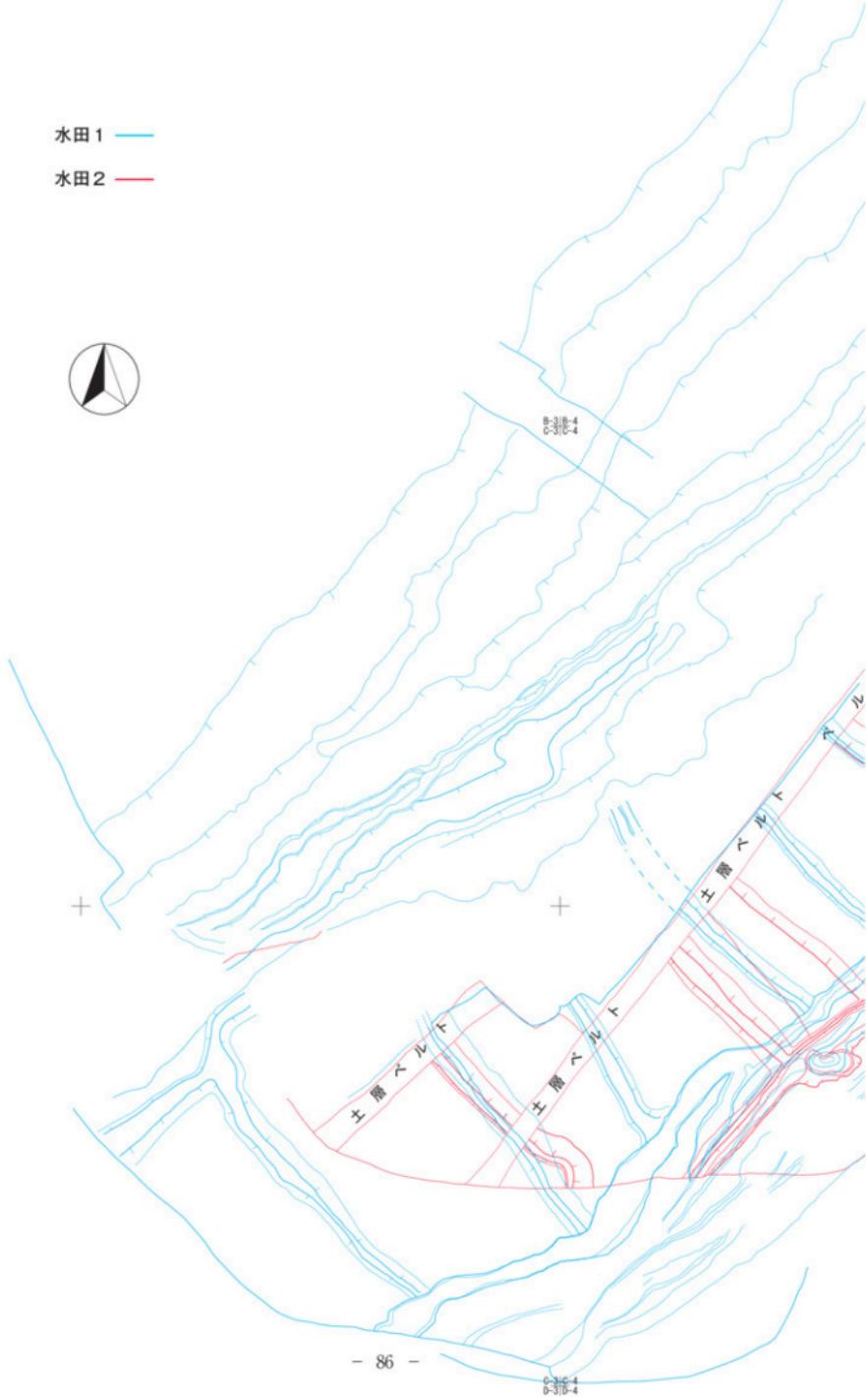


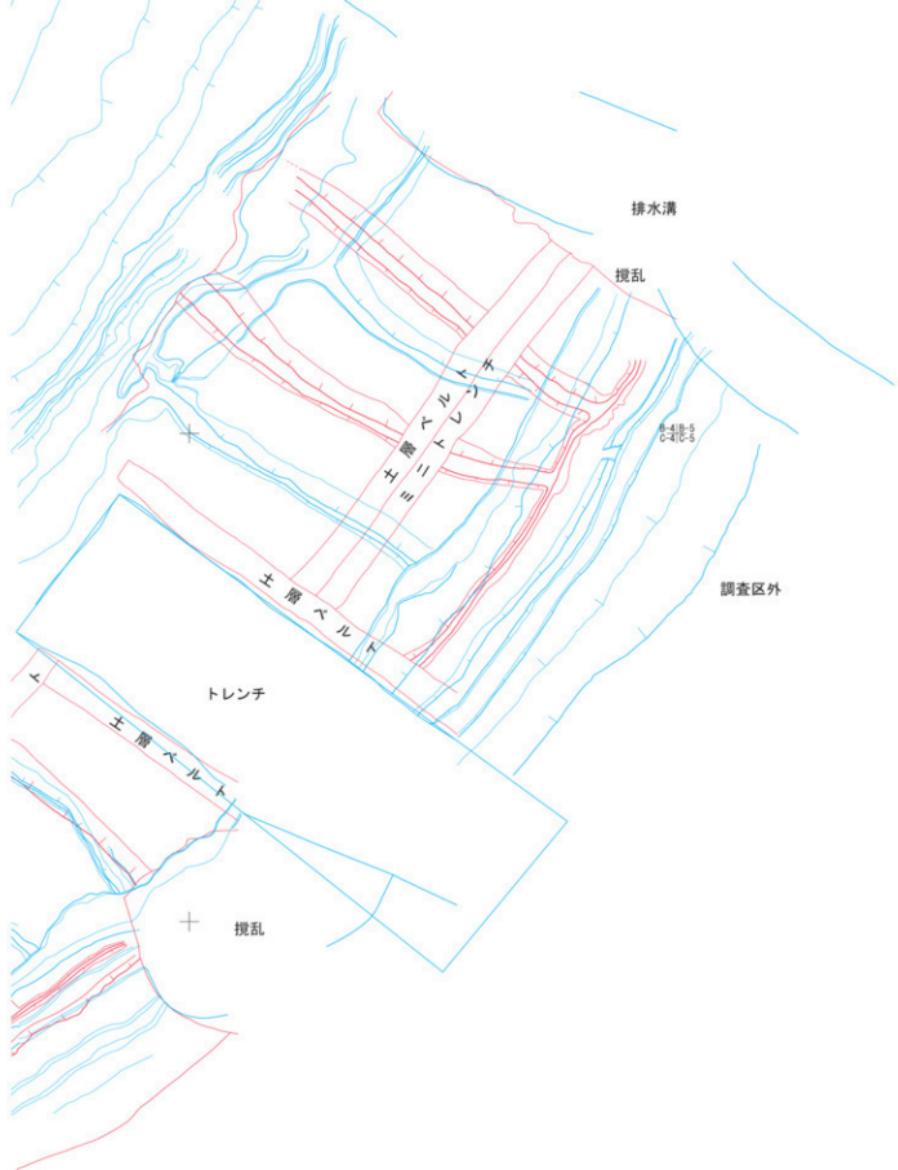


第8図 水田1・2・3・4 ($s=1/100$)

水田 1 ——

水田 2 ——





第9図 水田1・2 ($s = 1/100$)

水田2 —————

水田3 —————



取水口

B-3
C-3
B-4
D-3
B-4

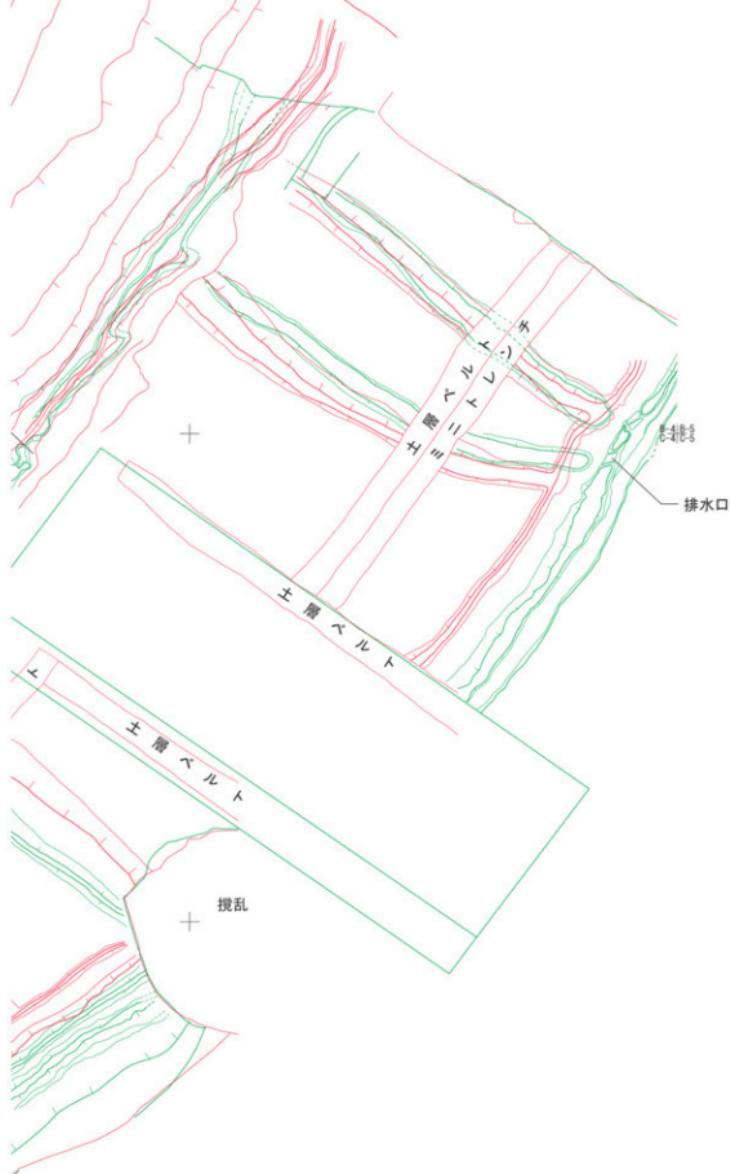
+

+

土層
ルイ

土層
ルイ

土層
ルイ



水田3 緑

水田4 青



+

+

- 90 -

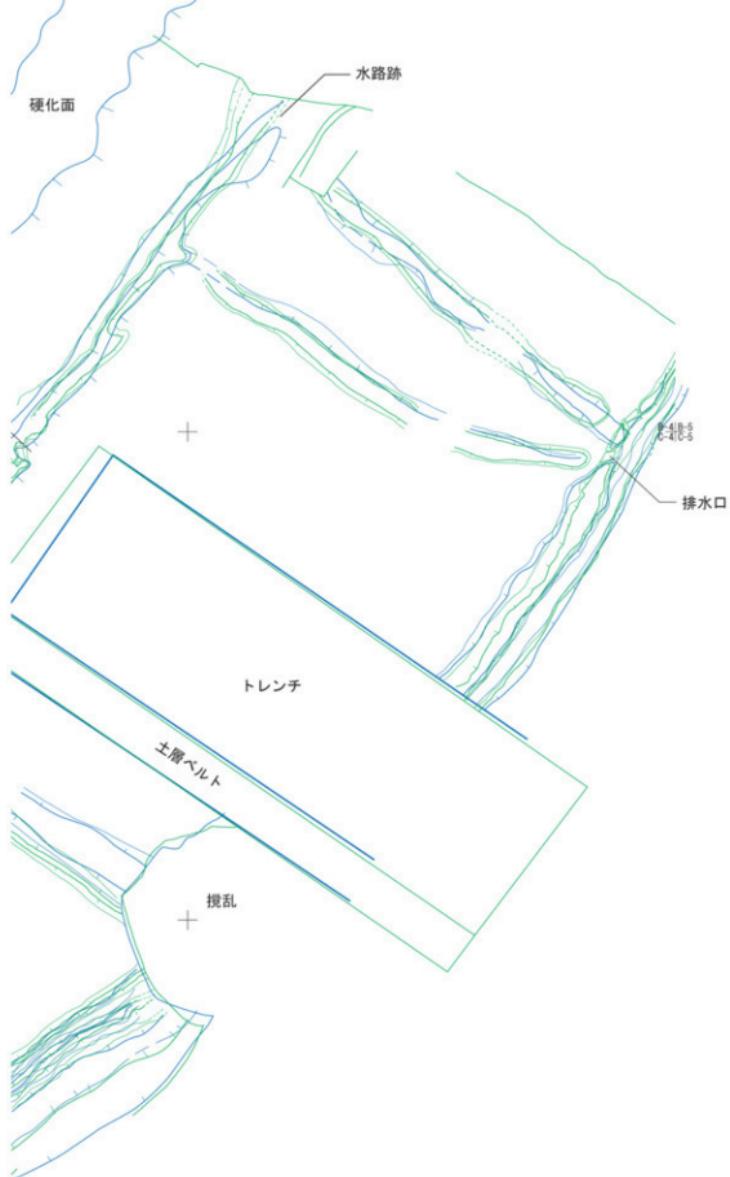
B-3|B-4

杭跡

取水口

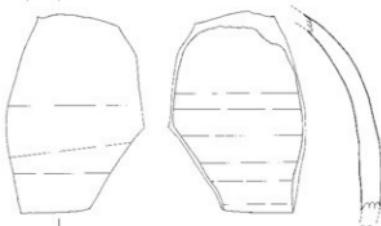
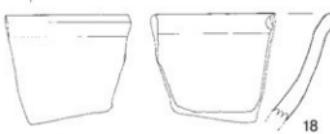
B-3|B-4

C-3|C-4



第11図 水田3・4 ($s = 1/100$)

水田1 ($s = 1/100$)



0 5cm

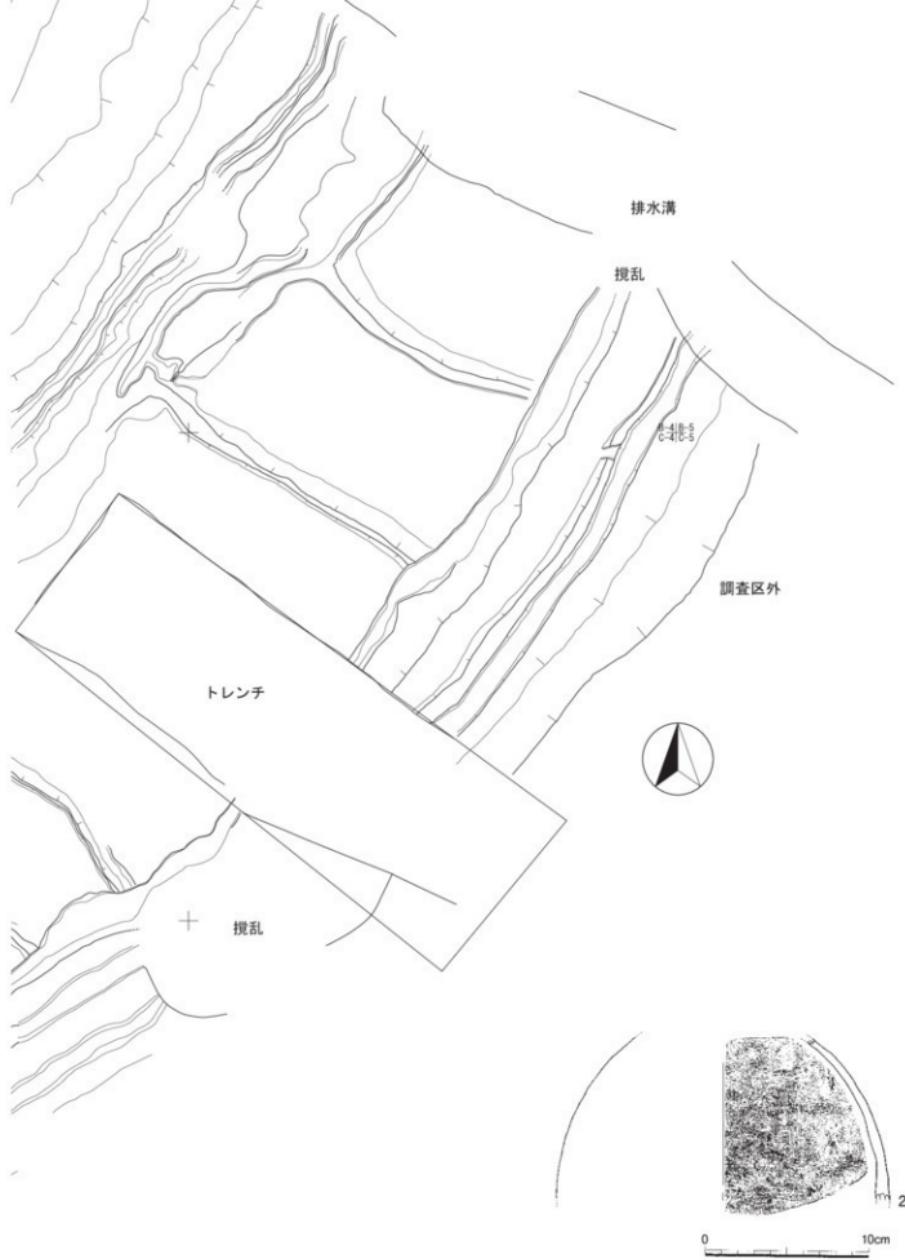
B-310-4

C-310-4

C-310-4

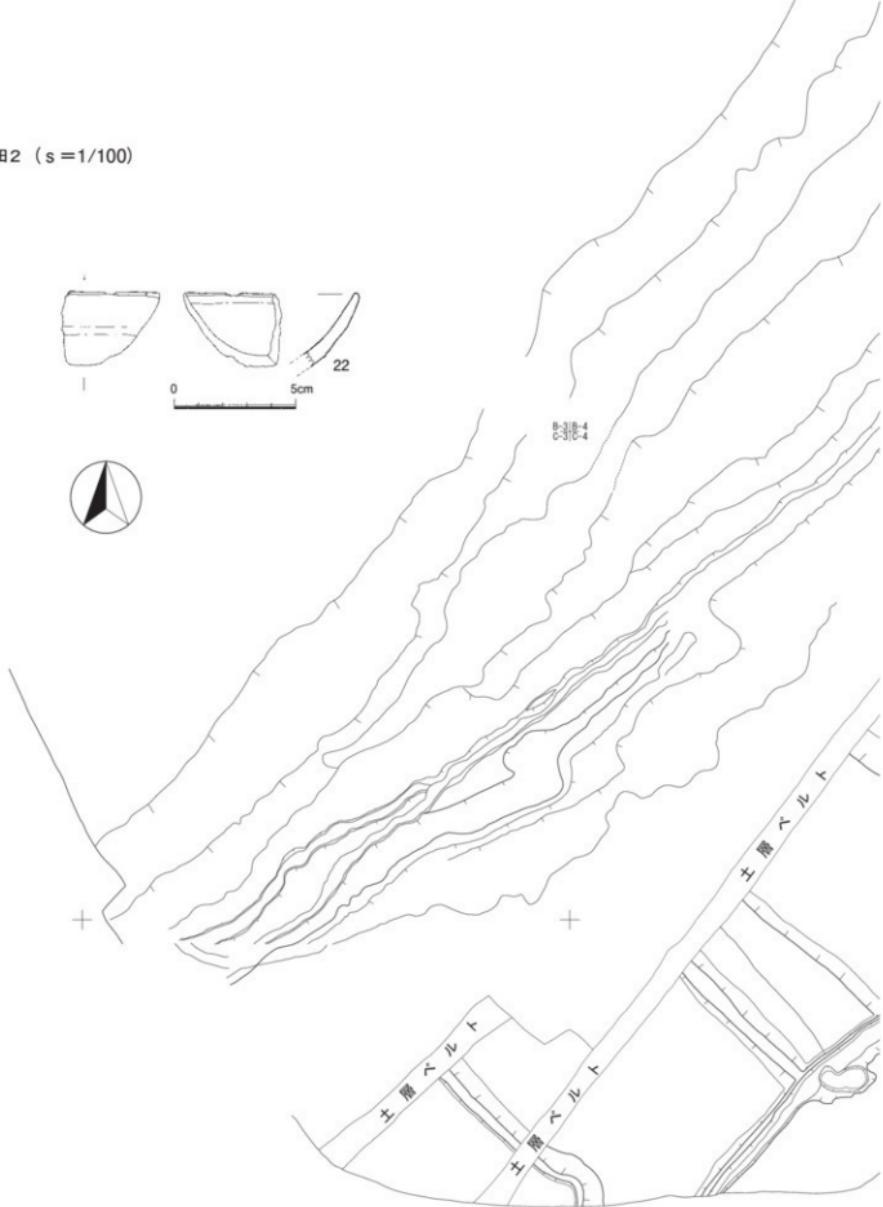
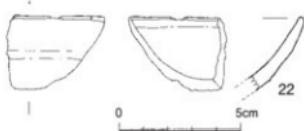
D-310-4

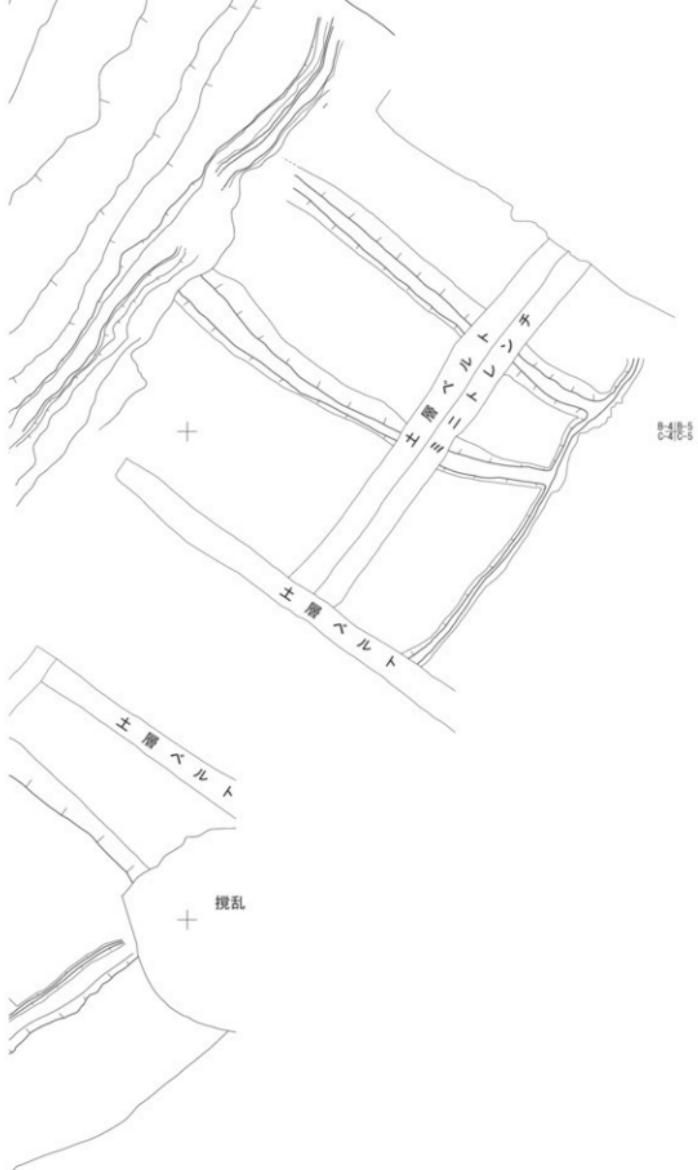




第12図 水田 1 および出土遺物

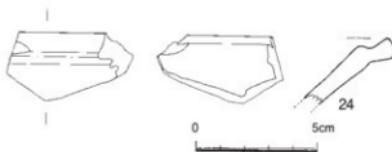
水田2 ($s = 1/100$)

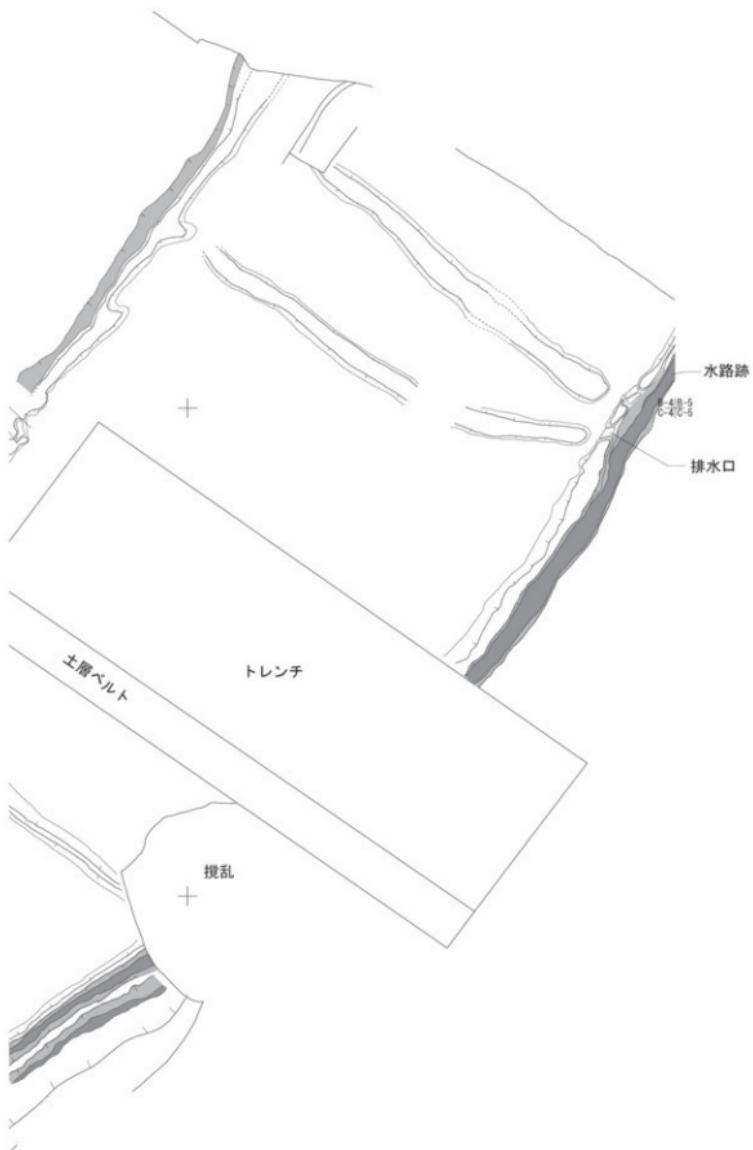




第13図 水田2および出土遺物

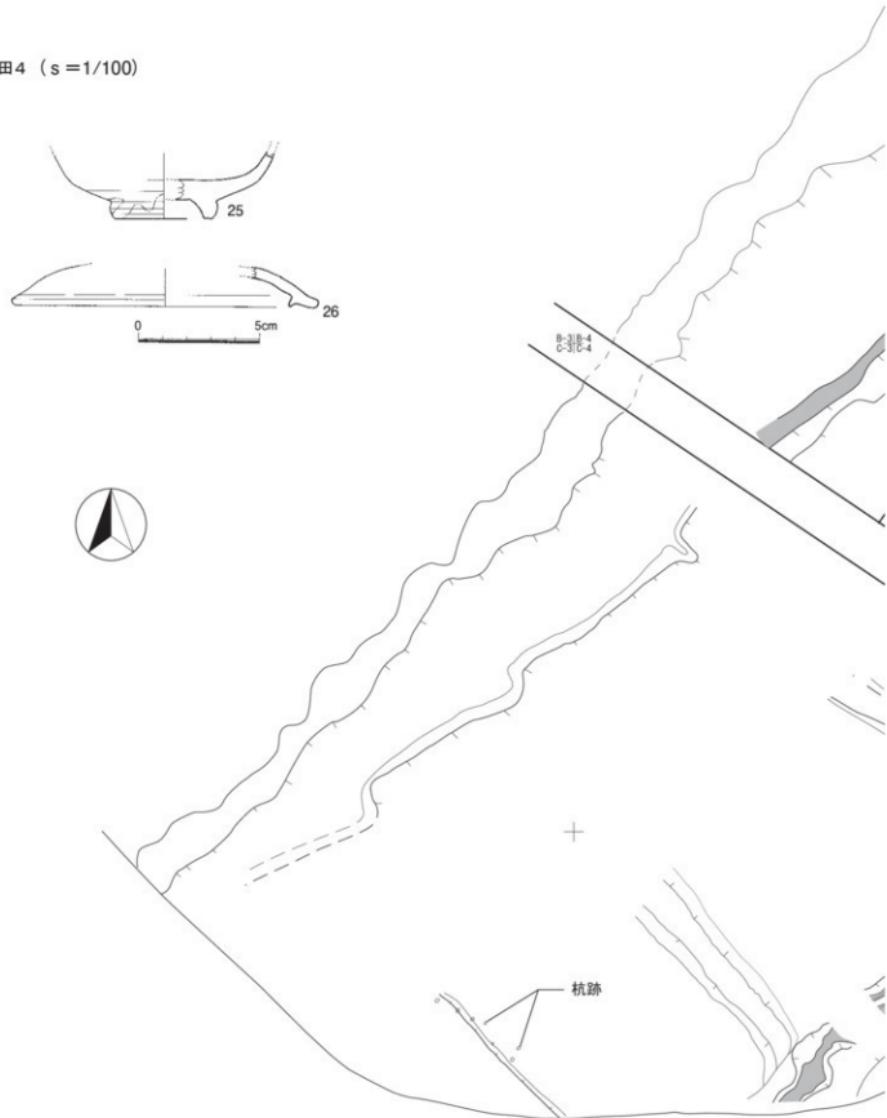
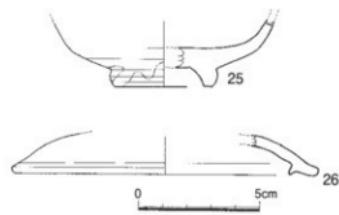
水田3 ($s = 1/100$)

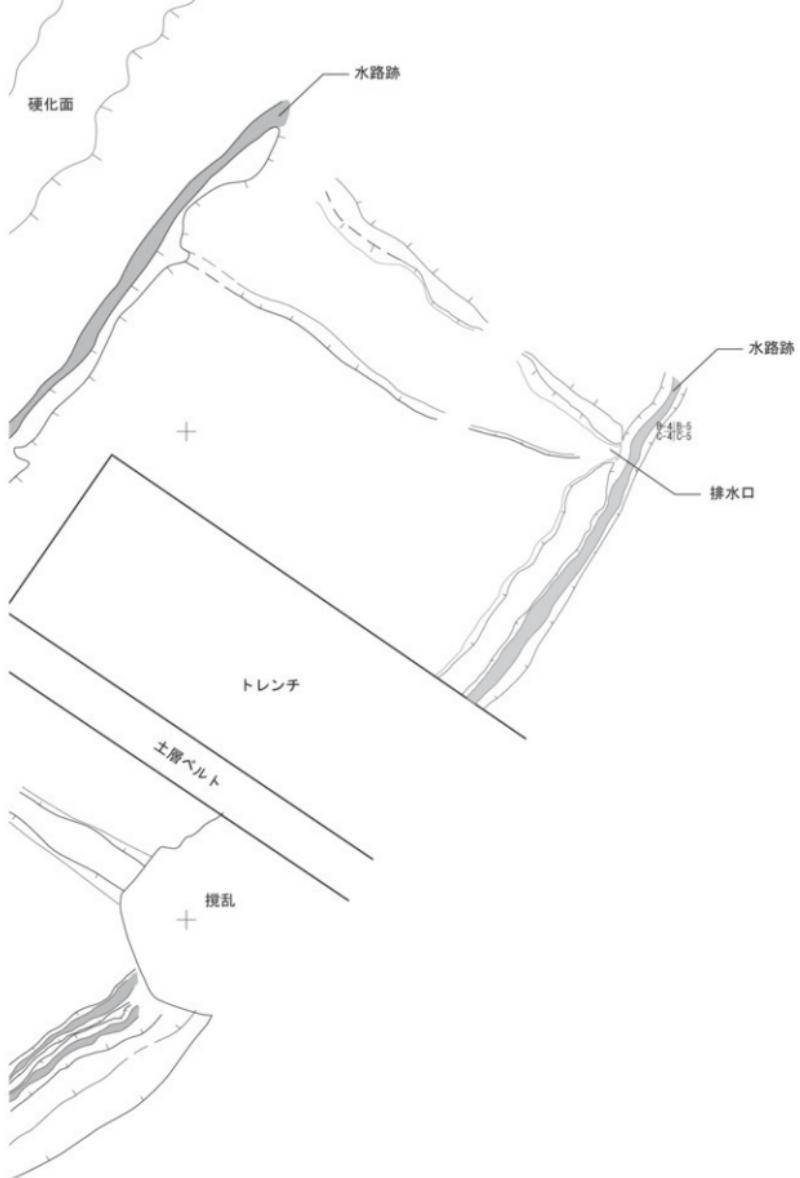




第14図 水田3および出土遺物

水田4 ($s = 1/100$)

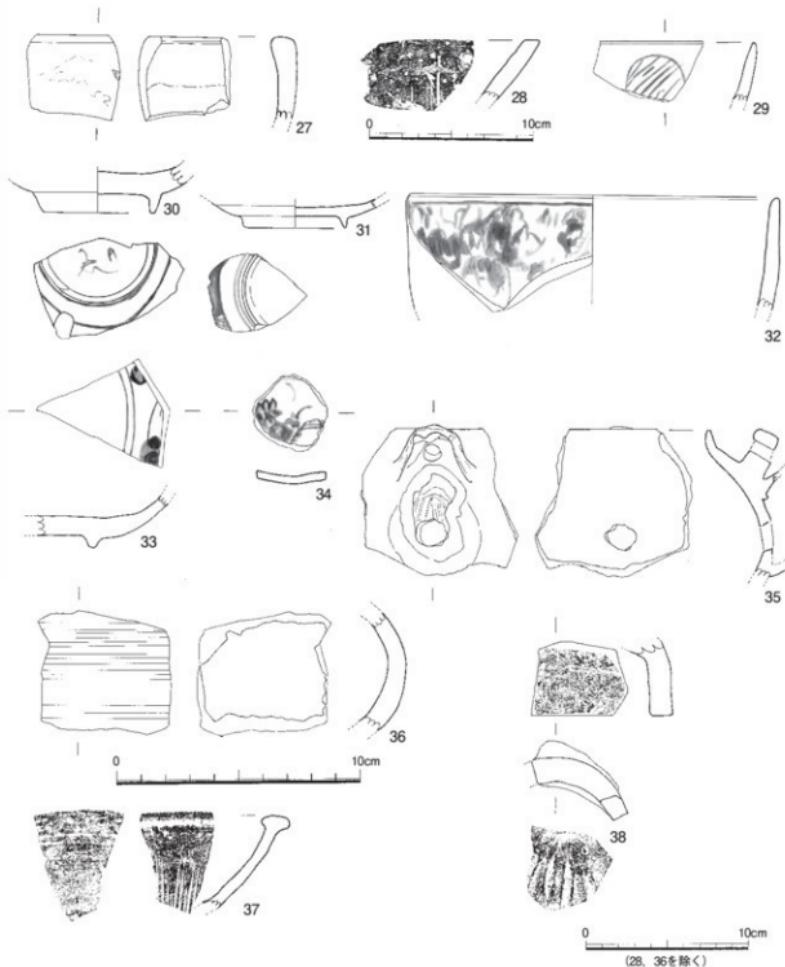




第15図 水田4および出土遺物

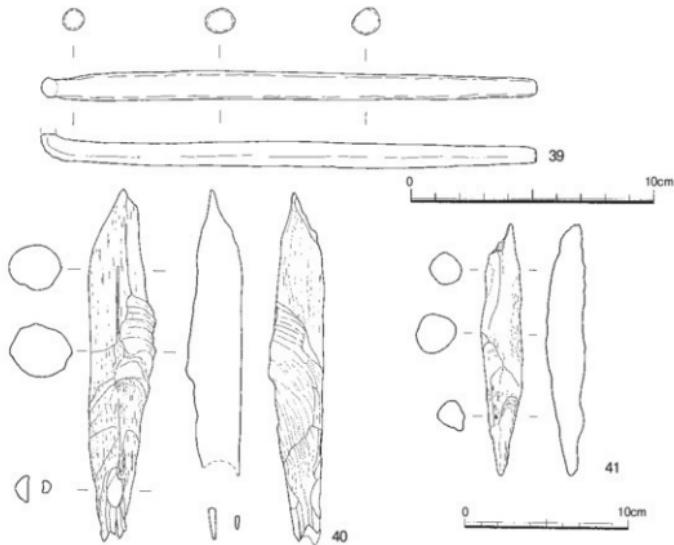
2 遺物（第16・17図）

中世～近世の遺物が出土したが、いずれも出土量は少なくそのほとんどは小片であった。そのうち17点を図化した。27・28は中世の遺物である。27は青磁の香炉である。内面は口縁部下位から露胎する。28は瓦質土器の擂鉢である。口唇部は平坦につくられる。29～38は近世以降の出土遺物である。29・30は染付碗である。29は外面に丸文が描かれる。30はやや青みがかった透明釉が



第16図 中世・近世の遺物1

かかる。31は赤絵の碗である。近代の資料と思われる。32は染付鉢と思われる。透明釉の摩耗が激しい。33は染付の中皿である。見込みは蛇の目釉剥ぎされる。34は染付の皿をメンコに転用したものと思われる。35～37は薩摩焼である。35・36は土瓶で、35は焼成不良であるのか、水触によるものであるのか詳細は不明であるが、素焼き状で釉薬が観察できない。36は外面にヘラ状工具による横方向の筋状の調整痕が残る。37は擂鉢である。口縁部は内側に折り返して丸くつくる。内面は口縁下位に余白を残して描り目を入れる。38は燃し瓦で、丸瓦の玉縁部である。39は煙管である。40・41は木製品であるが、詳細な用途等は不明である。



第17図 中世・近世の遺物観察2

第3表 中世・近世の遺物観察表

種類	出典	別名	器種	产地	出土区	層位	取扱上行 番号	口径 〔底径〕	法量 〔cm〕	断土の色調	釉薬の種類	施釉部位	時 期	備 考	
		27	青磁	香炉	中国	龍泉窑系	C-3	表土	-	-	灰白色	青磁釉	内面口縁部下位以下露胎	不明	
		28	瓦片	土器	-	-	C-3	表土	-	-	浅黄褐色	-	-	-	
		29	染付	碗	肥前	-	C-3	表土	-	-	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18世纪後半	
		30	染付	碗	肥前系	-	C-3	-	4.5	灰白色	透明釉	染付釉剥ぎ	18世纪後半		
		31	未定	碗	肥前か?	-	C-3	表土	-	4.1	灰白色	透明釉	染付釉剥ぎ	近代	
		32	染付	鉢	肥前	-	C-3	表土	17	15.4	淡黄色	透明釉	残存部全面施釉	18世纪代	
16		33	染付	皿	肥前系	C-3	-	-	-	灰白色	透明釉	投付釉剥ぎ、足込み部ノ目釉剥ぎ	18世纪後半～19世纪初頭		
		34	染付	メンコ	肥前	C-3	被覆	-括	-	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	18世纪代	染付器の転用	
		35	陶器	土瓶	古代川系か?	C-3	II	54	-	-	橙色	鐵釉か?	残存部全面施釉	18世纪後半	
		36	陶器	土瓶	古代川系	C-4	IV	-	-	灰色	铁釉	残存部全面施釉	19世纪		
		37	陶器	擂鉢	薩摩焼	C-4	-	-	-	にふい橙色	铁釉	口縁部釉剥ぎ	18世纪前半		
		38		軒丸瓦	在地	B-4	表土	-	-	にぬい橙色	-	-	-	19世纪代	
		39	金属製品	煙管	-	B-4	Ib	51	最大径 20.3 最小径 1.2	-	-	-	-		
17		40	木器	-	-	B-4	IIe	-	最大径 21.8 最小径 3.9	最大厚 3.4	-	-	-		
		41	木器	-	-	B-4	IIe	-括	最大径 19.5 最小径 2.5	最大厚 2.4	-	-	-		

第6節 総括

今回の北山田遺跡の調査では、縄文時代の遺物、中世から近世にかけての遺物および水田遺構が検出された。

1 縄文時代

縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物はB・C-3・4区の斜面Ⅱ層および水田層から出土した。土器については貝殻条痕文土器を施された土器片が数点出土した。石器については石鏃、石匙、剥片、礫器、磨石、敲石類、石皿が出土した。遺跡は南西向きの丘陵の縁辺地に立地しており、本遺跡およびその周辺では縄文時代に人々の生活が営まれていたことをうかがわせる。

2 中世・近世

中世から近世にかけては、4層からなる水田遺構、陶磁器等が出土した。

水田遺構の時期については、各層より薩摩焼が出土していること、水田の両側に水路が營まれていること、各層の水田区画に大きな差異が生じていないことなどから、今回検出された水田遺構は近世から近代あるいは現代まで連続して営まれていたことが推測される。ただし、水田層からは中世の遺物も出土しており、今回検出された水田より以前に何らかの遺構が存在し、水田造成時に消滅したという可能性も否定できない。

今回検出された水田遺構は自然の谷間を利用して棚田状に作られており、当時の地形を利用した水田耕作の様相をうかがい知る貴重な遺構であろう。

なお、この水田遺構は今回の調査区外であるC・D-2・3区、A・B-4・5区にも存在する可能性がある。

自然科學分析

第6章 自然科学分析

第1節 北山田遺跡の水田層に関する植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鹿児島県出水市野田町下名に所在する北山田遺跡では、これまでの調査により縄文時代の遺物や中～近世の遺構・遺物が検出されている。中～近世の遺構のうち、水田遺構は中世の頃に丘陵縁辺の谷部分に構築され、近世にかけて4枚の水田面が利用されたとされる。今回は、水田層での稲作や周辺の植生に関する情報を得る。

1 試料

水田遺構の土層は、下位から大きくⅢ層、Ⅱ層、Ⅰ層に分けられる。このうち、Ⅲ層はアカホヤ火山灰とされる。Ⅱ層には4枚の水田層（下位からⅡe層、Ⅱd-1層、Ⅱc層、Ⅱb-1層）が含まれる。また発掘時の所見では、Ⅱe層、Ⅱd-1層、Ⅱc層に中世の可能性が指摘され、Ⅱb-1層は近世とされる。なお放射性炭素年代測定から得られた暦年較正結果では、Ⅱe層は検討の余地があるものの、考古学的所見よりもやや古く、Ⅱb層は考古学的所見と同時期の年代観が得られている。Ⅰ層は、表土とされている。

試料は、C-4区のⅡ層を中心に採取された8点を用いた。試料が採取された層位と点数は、Ⅱb層が2点（試料番号3と4）、Ⅱc層が2点（試料番号5と6）、Ⅱd層が2点（試料番号7と8）、Ⅱe層が2点（試料番号9と10）である。

2 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位の変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位の変化を図示する。

3 結果

結果を表1、図1に示す。C-4区の各試料からは、植物珪酸体が検出される。ただし、植物珪酸体含量は概して少なく、不明を除く分類群もそれぞれ100個/g未満～800個/g程度の含量である。

表1. 植物珪酸体含量

(個/g)

分類群	試料番号	C-4区									
		II b層		II c層		II d層		II e層			
		3	4	5	6	7	8	9	10		
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属		300	200	200	<100	400	800	-	100		
タケア科		400	300	<100	200	200	400	300	100		
ヨシ属		-	-	-	-	-	100	-	100		
ウシクサ族スキ属		300	200	<100	200	<100	600	300	300		
イチゴツナギアキ科		200	<100	<100	-	<100	100	<100	<100		
不明		2,300	5,100	1,000	1,400	900	6,200	1,900	3,000		
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属		400	500	200	300	700	400	100	200		
タケア科		200	<100	<100	<100	200	300	300	<100		
ウシクサ族		100	400	300	500	400	700	500	700		
シバ属		-	-	100	-	<100	<100	100	-		
不明		1,800	600	1,400	900	1,700	1,600	1,000	1,200		
合計											
イネ科葉部短細胞珪酸体		3,500	6,000	1,400	1,800	1,700	8,200	2,500	3,800		
イネ科葉身機動細胞珪酸体		2,600	1,600	2,100	1,700	3,100	3,100	2,000	2,100		
植物珪酸体含量		6,100	7,600	3,500	3,500	4,800	11,300	4,500	5,900		
珪化組織片											
イネ属短細胞列		-	-	*	-	*	-	-	*		
樹木起源珪酸体											
クスノキ科		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
マンサク科イスノキ属		**	**	**	**	**	**	**	**	**	**

含量は、10位で丸めている(100単位にする)

合計は各分類群の丸めない数字を合算した後に丸めている

<100:100個/g未満

-:未検出, *:検出, **:多い

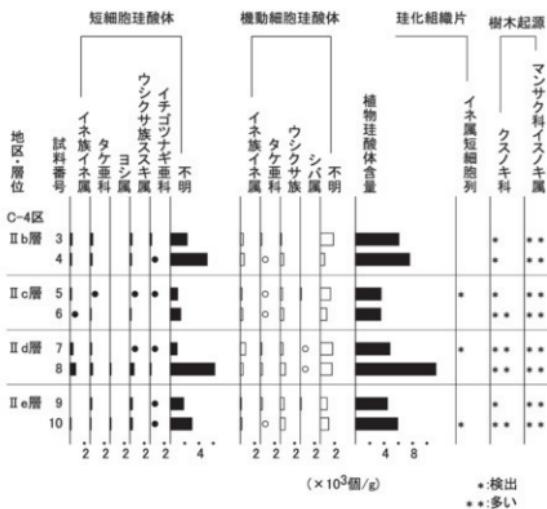


図1. 植物珪酸体含量の層位的変化

堆積物1gあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g未満を示す。

また、珪化組織片と樹木起源珪酸体の産状を*で示す。

各層の試料からは栽培植物のイネ属が産出し、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は、II e層の試料番号10で短細胞珪酸体が約100個/g、機動細胞珪酸体が約200個/g、試料番号9で機動細胞珪酸体が約100個/g、II d層の試料番号8で短細胞珪酸体が約800個/g、機動細胞珪酸体が約400個/g、試料番号7で短細胞珪酸体が約400個/g、機動細胞珪酸体が約700個/g、II c層の試料番号6で短細胞珪酸体が100個/g未満、機動細胞珪酸体が約300個/g、試料番号5で短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がともに約200個/g、II b層の試料番号4で短細胞珪酸体が約200個/g、機動細胞珪酸体が約500個/g、試料番号3で短細胞珪酸体が約300個/g、機動細胞珪酸体が約400個/gである。

また各試料からはタケ亜科、ウシクサ族が認められ、試料番号9、7、5でシバ属、試料番号10や8ではヨシ属も見られる。なお、イネ科起源の他に樹木起源珪酸体のクスノキ科とマンサク科イスノキ属も検出される。

4 考察

C-4区のII層のうち、水田層とされるII e層、II d層、II c層やII b層からは栽培植物であるイネ属の植物珪酸体が産出した。稲作が行われた水田跡の土壤では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壤中に蓄積され、植物珪酸体含量（植物珪酸体密度）が高くなる。水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている（杉山、2000）。この事例と比較すると、II層でのイネ属機動細胞珪酸体の含量は多くても700個/g程度と少ない。これは、耕作期間が短い、土層の堆積速度が速い、などのことが考えられ、土層内にイネ属の植物珪酸体が供給および蓄積されにくい状態にあったことが考えられる。また、これまでの調査によると、水田土壤でも植物珪酸体の含量は場所によってばらつきが生じることが明らかにされている（例えば、辻本・田中、2000）。今回もそのような事例を反映している可能性があり、さらに同一層位やその下位・上位層について複数地点を分析調査するとともに、珪藻化石による堆積環境の推定や周辺の古植生変遷に関しても調査した上で、今回の結果を改めて評価したい。

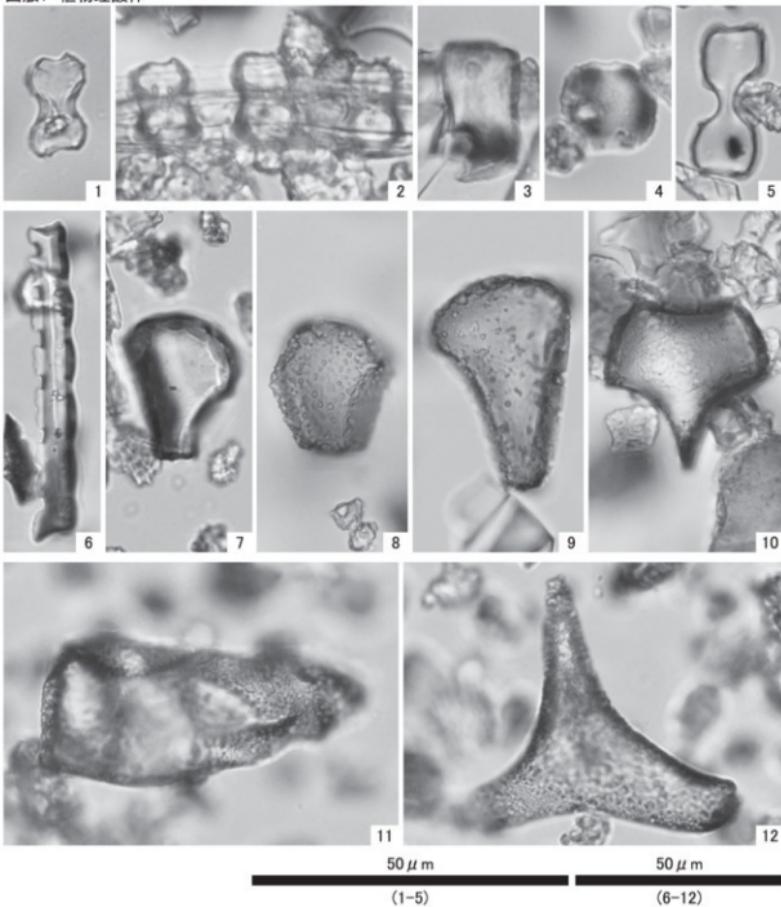
ところで、下位から上位の水田層ではイネ属の他にタケ亜科やスキ属が連続的に見られた。これらは、開けて乾いた場所に生育する種類を多く含む分類群である。そのため、水田層が形成される間に調査区の周辺にはタケ亜科やスキ属が生育する草地が存在したと思われる。なお、II e層やII d層では潤湿な場所に生育するヨシ属がわずかに見られ、付近の水路沿いなどに生育していたと推定される。II e層～II c層ではシバ属も生育していたと思われる。またイネ科起源の他にクスノキ科やマンサク科イスノキ属など樹木起源の植物珪酸体も検出され、これらで構成される照葉樹林の存在も想定される。なお周辺の古植生に関しては、森林植生や低地の植生について、より詳細な情報が得られる花粉分析による検証が望まれる。

引用文献

株式会社古環境研究所、2003、付編 鹿児島大学構内遺跡群郡元団地における自然科学分析、鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報17、鹿児島大学埋蔵文化財調査室、41-47。

- 近藤 錬三, 2010, プラント・オパール図譜, 北海道大学出版会, 387p.
- 辻本 崇夫・田中 義文, 2000, 川田条里遺跡 D2 地区第 6 水田面の微化石分析, 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書, 47, 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 10 長野市内その 8 川田条里遺跡 第 3 分冊 (自然科学 総論編), 日本道路公团・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター, 152 – 157.
- 杉山 真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オパール), 辻 誠一郎 (編著) 考古学と自然科学 3 考古学と植物学, 同成社, 189 – 213.

図版1 植物珪酸体



- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(C-4区 II c層;6) | 2. イネ属短細胞列(C-4区 II e層;10) |
| 3. タケ亜科短細胞珪酸体(C-4区 II d層;8) | 4. ミシ属短細胞珪酸体(C-4区 II e層;10) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体(C-4区 II d層;8) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(C-4区 II b層;3) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体(C-4区 II b層;3) | 8. タケ亜科機動細胞珪酸体(C-4区 II d層;7) |
| 9. ウシクサ族機動細胞珪酸体(C-4区 II d層;7) | 10. シバ属機動細胞珪酸体(C-4区 II c層;5) |
| 11. 樹木起源珪酸体 クスノキ科(C-4区 II b層;3) | 12. 樹木起源珪酸体 イスノキ属(C-4区 II b層;3) |

第2節 北山田遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鹿児島県出水市野田町下名に所在する北山田遺跡では、これまでの調査により縄文時代の遺物や中～近世の遺構・遺物が検出されている。中～近世の遺構のうち、水田遺構は中世の頃に丘陵縁辺の谷部分に構築され、近世までの4枚の水田面が確認されている。

今回は、水田遺構覆土などに含まれた炭化物を対象とした放射性炭素年代測定を実施し、水田遺構に関わる年代資料を得る。

1 試料

水田遺構に関わる土層は、下位から大きくⅢ層、Ⅱ層、Ⅰ層に分けられる。Ⅲ層はアカホヤ火山灰とされ、Ⅱ層には4枚の水田層（下位からⅡe層、Ⅱd-1層、Ⅱc層、Ⅱb-1層）が含まれ、Ⅰ層は表土とされている。また発掘時の所見では、Ⅱe層、Ⅱd-1層、Ⅱc層は中世の水田面である可能性のあることが指摘され、Ⅱb-1層は近世の水田面とされている。

放射性炭素年代測定用の試料は、土壤に含まれる炭化物2点（試料1と2）である。試料1は、C-4区のⅡb層で見られた水田層（L=16.248m）より採取された。試料2もC-4区で採取され、Ⅱe層で見られた水田に伴う水路南側より出土した。

2 分析方法

土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合には、これらをピンセットや超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後は塩酸により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウムにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて二酸化炭素を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した二酸化炭素と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma 68%）に相当する年代である。

なお暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010